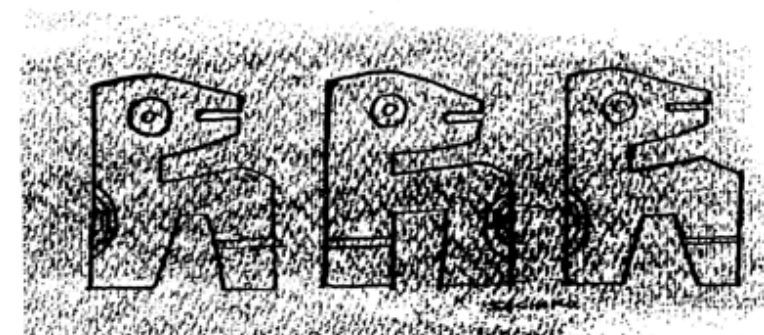
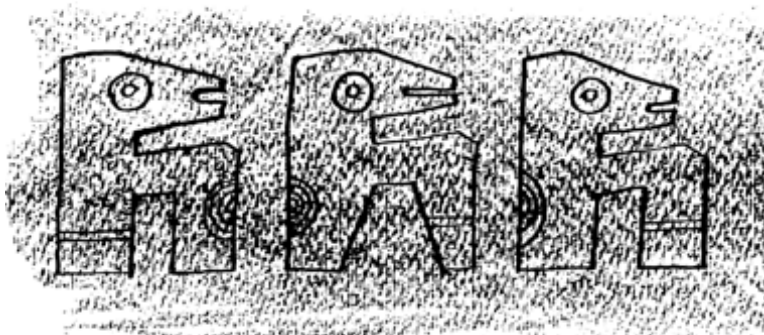




コロニア文学
第32号



○詩二編……………町安太 ②

第四回コロニア新人文文学賞発表

④

——選考経過——

折れる葦——滝井康民 ⑧

短歌特集
明 嘉 崎 梅
思 露 村 植
み 比 原 川
郎 太 哉 高
男 寿 村 河
子 賀 田 光
弘 中 千 弘

⑬

リベイラの自然と風俗

古き黄金の森 季節風・同人 ②

俳句と川柳
渡部南仙子 佐藤文六
佐藤霞城 長谷川清水
鈴木光威 森山天拝
安藤魔門 岡村鈴蘭

⑨

応募作品について 尾関興之助 ⑤

随筆
◇私の中のアリアンサ・武本由夫 ③

想い出の詩
流離の歌 コンサルベス・ジマス ③

創作
青いカビ 新井知里 ⑦

随筆
〇醒めてもがけ……………石朋次 ⑦

新人賞佳作第一席
大根の花・矢島健介 ③

第三十二号 ※合評会
それぞれ読みこたえあり ⑤

●終刊の辞 野尻アントニオ ⑤

詩二篇……………町安太 6

第四回コロニア新人文学賞発表 9

選考経過

〈受賞作〉

折れる葦――滝井康民 22

短歌特集 54

梅崎 嘉明

植村 かず

川原 比露思

高橋 よしみ

河村 哉太郎

光田 寿男

弘中 千賀子

リベイラの自然と風俗 59

古き黄金の森 季節風・同人

俳句と川柳 155

渡部南仙子 ・ 佐藤 文六

佐藤 霞城 ・ 長谷川清水

鈴木 光威 ・ 森山 天拝

安藤 魔門 ・ 岡村 鈴蘭

応募作品について

尾関 興之助

161

随 筆

◇私の中のアリアンサ ・ 武本 由 夫

164

想い出の詩

流 離 の 歌

183

コンサルベス・ジラス

創 作

|| 青いカビ ||

新 井 知 里

186

随 筆

○醒めてもがけ……………石 朋 次

210

新人賞佳作第一席

大 根 の 花 ・ 矢 島 健 介

231

第三十二号※合評会

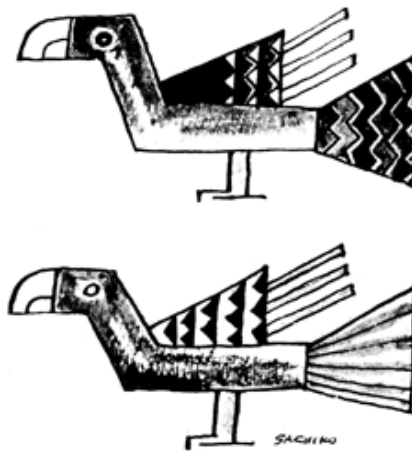
それぞれ読みごたえあり

●終 刊 の 辞

野尻アントニオ

277

コロニア文学
第32号



装幀
越石幸子

São Paulo — 1977

Gremio Literário "Colônia"

迷い子

しかし既に久しいある日 私は私をよぶことをきいたようにおもいます。
いや 確かに雨の耳にはっきりきこりました。
私は私をよぶことを確信しました。
だから、私は立ちどまりませんでした。
だから、私はほとんどあるきつづけました。
どれくらいいつてからでしたか
やがて私はあしをとめじつと耳を澄せました
あまり澄ませつづけたので私自身ひとつの耳になってしまったくらいです
しかし既に久しい間私は私をよぶことをききません



独楽に学ぶ

一日に二十四時間しかないということが
あきひる ぼん とこはんをかかさず喚べぬらぬということが
こはんは なかなか 戴けぬものであるということが
さいごにばくを受けとめたのだった。
ぼくは ちからの限り旋回する

迷い子

しかし既に久しいある日 私は私をよぶこえをきいたようにおもいます。

いや 確かに雨の耳にはつきりききとりました。

私は私をよぶこえを確信しました。

だから、私は立ちどまりませんでした

だから 私はどんどんあるきつづけました

どれくらいいつてからでしたか

やがて私はあしをとめじつと耳を澄せました

あまり澄ませつづけたので私自身ひとつの耳になってしまったくらいです

しかし既に久しい間私は私をよぶこえをききません

独楽に学ぶ

一日に二十四時間しかないということが

あさ ひる ばん とごはんをかかさず喰べねば

ならぬということが

ごはんは なかなか 戴けぬものであるということが

さいごにぼくを受けとめたのだった。

ぼくは ちからの限り旋回する

「町 安太 第一詩集」――一九五二―より

第四回「コロニア新人文学賞」発表

受賞作品

「折れる葦」……………滝井康民

佳作

第一席「大根の花」……………矢島健介

第二席「樹傷」……………藤光 決（たかし）

略歴

● 一九一四年十一月五日生まれ。

● 一九二八年二月、父母と共に渡伯。

● 学歴、なし。

● 渡伯後、三十三年間農業に従事、次いで印刷業に転じ、現在に至る。

● 伯国文学を三年前より研究開始、只今、エリコ・ベエリシ
その作品“夜”を翻訳中。

● 現住所。聖市ジャルジン・ダ・サウデ区、クルシーノ街、一
一六四番地。

受賞の言葉

六十才になって、創作を始めた私は、小説“きずな”を書いた。センチメンタリズム“が鼻につく。

テーマが生と死なのに、つつこみが足りない、等々、選者諸氏の評は、キビシかった。

いつか、亦、生と死について書きたいと思った。

昨年、大病を患い、文字通り死線をさまよった。

死と向きあった弱い人間、その男の、心のゆらぎを書いてみたかった。意、余って、筆、足らない作品であつたが、幸い選者諸先生の目にとまったことは、望外の喜びである。これかちも、人の世に生ききる者達の、喜び、哀しみを書きつづけたい。

コロニア新人文学賞

選考経過

今回は以下のごとく二十一篇の応募作品が集った。（作品番号は到着順）

- ① 「闇の彷徨」 37枚 五条騎一郎
- ② 「青いカビ」 49枚 新井 知里
- ③ 「血の地所」 99枚 山口 道夫
- ④ 「樹傷」 95枚 藤光 決（たかし）
- ⑤ 「当て磨かれた青春記」
- ⑥ 「余波」 富岡 耕村
- ⑦ 「偽装狂態」 石城 秀節

- ⑧ 「ロウロの旅」 大岩由美子
- ⑨ 「陽炎」 33枚 清水よし子
- ⑩ 「死弾を教える」 100枚 西 幸夫
- ⑪ 「頬かむり」 65枚 若生五十路
- ⑫ 「甥の命」 22枚 岡村 正
- ⑬ 「カイサラ日記」 有馬鉄之輔
- ⑭ 「石ころ道」 88枚 則近 正義
- ⑮ 「虚耗」 147枚 中島 孤穂
- ⑯ 「大根の花」 79枚 矢島 健介
- ⑰ 「珈琲の花が咲いた頃」 17枚 塚田 信治
- ⑱ 「野草の戯れ」 三瀬喜代志
- ⑲ 「折れる葦」 47枚 滝井 康民
- ⑳ 「徒労の背景」 梅木 幹弘
- 21 「泣き酒」 46枚 松井たろう

去る二月二八日夜、尾関興之助、藪崎正寿、宮尾進、前山隆、醍醐麻沙夫の全選考委員が出席して選考会が開かれ、前記のごとく受賞作と佳作が決定されたが、選考経過は次のようであった。長時間の討論を発言順に記すと反ってわずらわしいので、各作品ごとに主要な発言をまとめた。作品名の下の点数は、上位群の作として各委員が一票ずつ投じた点数の合計である。従って、満票作品が必ずしも質的に最高位という意味ではない。

①「闇の彷徨」

宮尾 主題として主人公とモノノケの彷徨を重ねるつもりだったと思うが、成功していない。

藪崎 面白さは抜群なんですけれど語られている怪異譚は、主人公のボクの神経症をもっと強調しつつ描かれたら、読む方も自然に受けとれますがね、怪異が怪異のまま終ると、読む方はひっかかるものが残る。

醍醐 始めの八枚目まではすごく良く、あとがまるでダメで、あまり意味のない回想場面の連続になってしまう。こういう書き出しをしたら、必然的にテーマは怪談にしばらくはずれ、途中からどうして、移民の状況になるのか分らなかった。ざっと見積って十五枚の内容だと感じた。

②「青いカビ」 4点

尾関 まとまっているね。見事なところもある。ただ、何か作品を構成する重要なものが欠けているような感じがして、底が浅いんだ。ユーモア感覚は大いに買うが、その反面、客観的な冷たさみたいなものに欠けるうらみがある。

藪崎 生活のリアリティがとても強く出ている。ヒロインが日本へ行って神経症を患うというが三、四枚あるけど、この文体ではそこがうまく書けなくて調和が破られている。その欠点がなければもっと良い作品だと思った。生活のリアリティが、光る一行といった文章の効果とあいまって仲々の効果を挙げている。例え

ば『夜でなければなかなか優しい言葉を使わないとも子である』といった、彼女の性格をつかまえつつキラツとする一行があるんですが、何個所もそういう処があった。かなり上位に推したい作品だ。

宮尾 やはり、リアリテイがあるのが、彼女の第一の強味だ。だから読ませる。ただ、作者の視点が妻から夫に変わったりして、その辺が読んでいてオヤっと思うし、色々なエピソードももう少し整理したら、更に良い作品になった。僕としては佳作の下位ぐらいの心づもりなんだ。

醍醐 いいです。欠点を言えば不要な回想場面が多い。言いたいことをコレとコレとハッキリさせて、その観点から不要物をとっていけば三十枚くらいになる筈ですがね。最後までとてもいい。一応、佳作に思います。

前山 視点が変わるのが、やはり気になったけど、私小説と中間小説との組み合わせのようで棄てがたい味がある。

③ 「血の地所」 3点

尾関 僕はこれを今回は第一の作品と感じたね。読み応えがあった。タキという女がだんだん魔性を帯び、遂には娘婿に殺される場面なんか鬼気迫る！ ものがあった。と言つては、ホメすぎかな。でも、タキの変貌が無理なく納得できた。まず、第一の力作です。これは。

宮尾 ウーン。タキの変化がどうも。

変貌の裏付けが感じられなかった。大人しい農家の主婦が金の力を知って遂には守銭奴になる訳だけど。それはとてもいいんだが、裏付けがねえ。それと、この人の作品はいつも場所が何となくハッキリしない。

薮崎 読み物として良い出来映えだ、という事で点を入れてあります。登場する人間は上べだけしか描かれていないけども。

前山 この人のは前作（確か「霧」だった）の方が良かったと思っっている。

勿論、これも悪いとは思わないけどね、入賞には無理だ。

④ 「樹 傷」 3点

前山 この作品に描かれているパラナ河べりのパルセイヤという植民地は、勝ち負けの争いが激しかった頃に原始林が売り出され、ワツと入植者が集り、数年後の綿相場の暴落と共に潮が引くように衰退した、言わば、コロニアでは最も盛衰が激しかった場所だ。その歴史的な背景も充分にとらえであるし、今回の応募作品では次点にマークした。

尾関 僕も二番目に高い点をつけた。書き込んであるし、力作だと思う。ただ、難を言えば、ダラダラしているキライがある。もっと省略を利かせて欲しかった。

宮尾 この人の作品として、特に良いとも思わないが、悪いとも思わない。そんな批評をする意味は、何となく思い付で作品をつくってしまったという印象があるんだよ。例えば叙述に時間的

な混乱があつたり、類型的な特務機関が出たりする、ところにそれを感じる。

⑤ 「当て磨かれた青春記」

薮崎 “イスカのはし”の喰いちがいの面白さを作者は描こうとしたのだと思います。しかし、それだけではやはり小説にならないですね。

⑥ 「余波」

宮尾 主題がハッキリしないと思う。

尾関 文学的な香気はないけど……」

前山 文学賞の対象としては僕も除外しますが、破魔商会が戦時中に敵性財産として資産凍結をされ、ウヤマヤのうちに破産した史実を追って書いた作品で、しかもかなり読めるものになっている。賞ということではなしに活字化を進めてほしい作品です。

⑦ 「偽装狂態」 1点

宮尾 手の込んだ作品を書く人ではあります。

尾関 大変な努力は認めるが、なんといっても古めかしすぎるのでね、この長さでは読者に負担をかけすぎる。

⑧ 「ロウロの旅」 1点

醍醐 これは童話です。仲々楽しく読みました。絵もついてい

る。

薮崎 短がいし、載せてもいいのではないですがね。

宮尾 童話としての新鮮味は感じられなかったけど……。

⑨ 「陽 炎」

尾関 これは勝ち負け問題の裏面史を描いている。一応はかけているが、やはり作者の力不足を感じてしまった。

前山 背景に重いものを持って来てもそれだけでは作品の力は増さない、という事です。ぜひ書き直して欲しい。

⑩ 「弾を数える」 2点

尾関 これはマツトグロツソの活劇だが、本格的な大創作だねえ。想像力を駆使しているが、筆力が追いつけず息が切れているのが残念だ。

宮尾 コロニア初の西部劇です。

⑪ 「頬かむり」

前山 地主と契約者、旧移民と新移民の葛藤は一応書けているけど、それ以上のものにはなりえなかった。

⑫ 「甥の命」 1点

醍醐 この作品は素直に書いてあって、とても感激しました。佳作として推したい。

薮崎 受賞には弱いけど、いい作品だと思って好ましく読みました。感傷に流れやすいテーマを、よく抑制を利かして書いてある。ただ、何故甥がこのような惨めなたちで死ななければならなかったかという、当時の耕地の事情が充分に描かれていなくて、死の意味するものが読者にもう一つ強く追らないのです。

⑬ 「カイサラ日記」

尾関 映画のロケのシーンがふんだんに出て来て、面白かった。でも、それだけの内容なんだな。

⑭ 「石ころ道」 3点

宮尾 今回は青春をテーマにした作品が多かったが、その中ではいちばんいい。淡々しいのが物足りない想いもあるが、それが長所にもなっている。佳作の第一席という評価を僕はした。

尾関 力もあるしいいんで、佳作ラインで点を入れたんだ。しかし、本音を吐くと、こういう作品は何度読まされても、結局は文学に到しないのではないか、という疑いも同時に持っている人前山 かなりの水準だ。ヒナの鑑別の描写も興味深い。ただ、ブラジル人の若い女が登場して、それか日本人に積極的にモーションをかける、という辺がいかにも図式的なんでね、実際にそうだから、そのまま書くというのでは困るんで、何らかの工夫がないと。

⑮ 「虚耗」 1点

醍醐 むずかしい題ですね。

薮崎 洗濯屋が出てきますね。コロニア小説だと、主人公は老百姓さんが普通なので、洗濯屋の登場人物は職業としてはマージナルなのです。ですから、その点を評価できると思います。

前山 この作品にかぎらず、受賞の対象としては挙げなかったが、読みながら関心を持ってノートした作品は多いんです。中でも、この作品は個人的に最も関心を惹かれノートも沢山とった。

過去では一種の下積みの職業であったから、そして、コロニアにとつては重要な職業でしたから、大変面白い作品だった。ただ、冗長すぎます。

⑯ 「大根の花」 4点

薮崎 しみじみとした良い作だと、共感をおぼえながら読みました。コーヒー園のコロノ生活は今迄書かれていたようで、やはりこれほど詳しくは書かれていなかった。不満の点は、ファゼンダに方針に順応する家族と反対して追い出される家族がいる訳だけど、方針に順応して賞与の米など貰う家族が、追い出された家族への感情のヒダが描かれていないのか、作品の奥行きを浅くしている。損な役と得な役の二家族の間には心理的なこだわりがあるはずだと思うんだけど……」

醍醐 そのところは僕もひっかかった。それが欠けているから二家族の男女の恋愛感情も淡いだけでもう一つ深くならない。

特にとま子の感情がね。でも、しみじみした情感が最後までつらぬいていて、好篇でした。こういう作品を毎日少しずつ書き進めた作者の喜びが感じて、机に向う後姿が見えるようです。コロノの日課もすごく詳しく、教えられました。

⑰ 「珈琲の花が咲いた頃」

醍醐 十七枚ではとにかく短かすぎる

前山 一生懸命に子を育て一生を捧げながら、その子がマランドロになっちまって、だから老いたら財産を残さない、という教訓です。

⑱ 「野草の戯れ」 2点

前山 この作品として近来の力作です。

僕は一応四つの作品を上位に挙げたが、その第四位だ。落伍者の家族がカロウサでマツトグロツソ州に移って行く。

小さな一家の生きざまが、あまりシミつたれてもいず割に楽天的で、土性骨もある。そこに好感を持って佳作に推したい。文章も落着いているしね。題は悪いけど。

薮崎 始めはかなりの点をつけたんですが、同作者が『流離』という未完の作品をコロニア文学に発表していますね。あれと重なり合う部分があるようです。前作が事情はあるにせよ未完結なんです、その点引きをした。

⑩ 「折れる葺」 5点

醍醐 僕はこれに一番良い点をつけました。

宮尾 滝井さん個人から見ると非常な進歩です。ただし、それを突き出してしまうと、こういう心境小説は先達の作品がある訳です。今回の応募作の中では、最も自分を見詰めた作品として評価しています。

尾関 いい作品だよ。ただ、私の点は③や④の方が上位ではある。

藪崎 病院、旅行、家族など一つ一つのことの意味性を探って行く、姿勢から静けさがにじみ出ている。その内省は今回の中で群を抜いて、文学性をそなえている。ただ、主人公は移民の条件を抜け出ているので、他の移民小説のような共感を得にくいから、そこにこの作品を評価する側からの厳しさも生じる。

前山 静かな作品と藪崎さんは表現したが、よく見るものを見て書いているから静かでありながら感動は他作品より強い。

⑳ 「徒労の背景」 3点

宮尾 エンターテイメントとして面白かったです。点は入れたが、さほど高い点ではないんです。文章のスピード感は抜群にあるね。

醍醐 確かに面白い作品が書ける人ですが、エンターテナーとしては自分（作者）の見つめ方、とらえ方に悪い点があつて、それがいつも致命的なのです。志賀直哉みたいな作品世界なら自分の偏屈や偏見もそのまま通るけど、梅木さんの作品世界ではそ

れはちよつと通らないと思う。大ざっぱに上位作品群を移す場合、梅木さんのものはいつも無視できない。それでいながら、入賞作を決定する段階になると、その欠点の故につい落してしまうんです。

⑪ 「泣き酒」 1点

尾関 前作の「狂犬」は大いに推したが、これはあまり…。

前山 いいですよ。コントの面白さがあつて軽妙です。主人公のウスーロの動作がよく出ている。

薮崎 主人公は細君に死なれると、どうしようもない訳ですね。普通の人間なら再婚を考え、それまでのつなぎに女と遊ぶことを考えるけど、移民は遊びのエレメントが欠けていたから、ここに登場するような〈遊ぶ〉ことにもチエが廻りかねるような一タイプが確かに存在するでしょう。そのあたり旨く掴んだと思う。佳作圏内の作品です。

尾関 随分、同情的なんだね。

薮崎 同病相あわれむ、というところでしょうか。

以上で各委員の主な発言を収録した。

討論の結果、受賞は「折れる葦」と決まり、佳作第一席「大根の花」第二席「樹傷」となった。「青いカビ」と「石ころ道」も最後まで佳作を争ったが過半数の支持を得られなかった。

編集部としては各投稿者の方々にお礼を述べると共に、来年も一層すぐれた作品を寄せていただくように切望しています。

第四回 「コロナ新人文学賞」 入選

折れる葦（47枚）

滝井 康民

私は、その日体調が良かったので、病室から、階下の食堂に降りた。最近、一と月あまり、妻が盆で運ぶ食事を一人で食うのは、まことに味気なかった。

久しぶりで、家族と賑やかに談笑しながら食事を摂るのは楽しかった。

息子が、父親の気持ちをひきたてようと、明るい話を始めた。彼は、私の方に顔を向け、時々、“ねえ、お父さん”とか“お父さん、そうだろ”など気を引くのだ、長男の気持が私に仄かに伝わってくる。

彼の話術は、なかなか巧みで、話し終ると一同は笑った。

私も、皆んなの笑いにひきこまれ、“アツハハー”と大笑いをした。

久しく胸に、うつ積していたものが洗い流されたようであった。すぐ失敗ったと思った。

心ぞうの鼓動は激しくなり、胸に狭心症の痛みが襲い始めたからである。私は、さりげなく立ち、次の部屋のソファアに坐った。

この痛みは、本年二月から、現在の七月まで、日々、繰り返して私を虐なんでいた。

“ううん、今日の痛みは、かなりくるな”

と、上半身を前に屈し、胸に手を当て、息を詰めて身構えた。痛みは、横隔膜から胸部に登ってくる。

それは、上昇気流に乗った、夏雲のように食道にそい、喉元までたちまち登る。ぐいぐい喉元を、錐でもむように迫めたてる。同時に、心ぞうにも大きな魔手が伸びる。その手の指は、鉤形に曲り、私の心ぞうを、がつきと握り、ぐぐつと締め始めた。私の大切な器官は鷹に捕われた、小鳩のように身悶える。巨大な手は、情け容赦がなかった。一定の時間的経過をおき、万力で締めるように痛みつける。これでもか、これでもか……と。小鳩は、身悶え、悲鳴をあげ、虐げを受ける。

右方の胸部も無事でなかった。私の肺ぞうは、万貫の石で圧されている。もう通常の呼吸が出来ぬ。

私は、身を屈したまま、犬が炎熱に喘えぐように、口を開け、舌をだらりと出し、全く抵抗出来ず、痛みの去るのを待っている。一分 二分 三分、全身に油汗が出る。末だ治まってくれぬか、まだこの痛みは去らぬかと、ひたすら耐えるだけだ。五、六分たつた。波状的に襲っていた痛みは、もう充分虐めた。今日はこの位でよかろうと、潮のひくように腹部に下りた。あれだけ私に油汗をださせた苦しみは、うそのように消えた。

私は、よろよると立ちあがり、二階の寝室に戻ろうとした。気

配で知った息子が、後ろより私の体を両手で抱き、階段の登りを助けた。

タイル張りの狭い階段は冷えていた。途中の曲り角で私は休み、一息ついた。人生の曲り角に立たされているんだな……それにしても、きゆうくつな冷たい曲り角だ、との実感が湧いた。

寝室に戻った私は、病床に崩れ伏した。枕元の持薬を飲んだ。私は身を海老の如く曲げた。鼓動の激しさは治まったが、反対に脈拍が弱くなり、不規則に拍ち始めたが、これは、ここ一ヶ月何回となく経験している。

大したことあるまいと思った。

「あなた、今日ね、婦人会の集りがあるの、私、参会してもいい？
大丈夫ね、あなたは

と妻が問いに来た。

一抹の不安があつたが

「あゝ大丈夫だ、行っておいで」
と気強く答えた。

子供らは、学校、仕事へと出かけて行つた。古い広い家は静まりかえり、私は、一人喘えいでいた。

私が寝ている部屋の隣りは、サーラで、その前面にバアランダがあり、左方は事務所に続いている。そこから微かにタイプをたたく音が伝ってくる。タツタツタ…、と軽快なリズムがひびく。

私は、自分の心ぞうの鼓動と比較した。

鼓動は、相変らず不規則で、力なかった。

私は一寸、心細くなった。明日にも、否や、一時間先にも、この心ぞうは、活動を停止するかも知れぬ。私は、じっと少し埃で汚れた天井を見つめた。蠅が三匹飛びちがい、入れちがっていた。相変らず脈は乱れている。おかしいな。いつもなら治まるはずなのに。心なしか、手足が冷えてきた。私は、大儀そうに、右手を足首にふれてみた。氷のように冷たい。更に左手にさわってみた。手首まで冷えきっている。＂いかな＂と呟いた。足先にあった冷たさは、少しつつ膝に登ってくる。手先も、しびれてきた。私は床を降り、壁やガラス戸を頼りに少しづつ歩を進め、事務所に行きついた。事務員のAが驚いて、立ちあがった。

「どおしたんです、顔が真っさおですよ、無理をなすucciやいけませんなあ…、」

「医者を呼んでくれ…、それから家内を呼び戻してくれ、婦人会に行った。」

たった、これだけの言葉を言うのに、少くとも、二、三分かかったろう。

が 家内を…、で少し休み、＂婦人会から＂で喘えぎ＂戻してくれ＂と絶えだえに言った。

「はい解りました。すぐ手配します。ですが早く床に戻り、休みましょう。」

Aは、私の体を抱き支えて、病床に戻し、慌てて医者呼びにとびだした。

私は、病床に身を仰向けて、医者くるのを待った。先き程、わ

ずか十四、五米歩いたのが、こたえたのか、もう手足が動かぬ。冷たさは、下肢より上肢に、手首から肘にと登ってくる。少しづつ、少しつつ、一センチ、二センチと登ってくる。爬虫類のうごめきだ。

もう膝まで、肘まできた。

不思議と、全身には、いささかも痛みがなかった。

手足は、床に膠着して動かせぬ。意識だけは、しっかりしていた。医者は末だこぬ。多分、先着の患者を診ているのだろう。

私は、ふと、死の影が私に忍びよっているのを覚えた。よく死んだ人を「冷たくなった人」と言うが、自分も今、冷たくなりつつあるのだ。下肢から登る冷たさが腹部に入り、手首から肘まできたのが胸部に及んだら、「死」が私を占領するのだと思った。

相変らず、古い広い家は静まっている。私は、「一人ぼっちだなあ……」と思った。不意に私は、「死」がどのようにして迫ってくるのか……、どのような過程を経て、「死」が私を占領するのか……、それを見きわめたい……、との好奇心が湧いた。

手足も動かせず、言葉も言えぬ自分に、たった一つ出来ることは、迫りくる死を見つめることだと思った。

死が忍びよる、黒く翼を広げ、私をつつみこむ。

私は、「自分の好奇心が満たされる……」「そお思つて、一種の満足を覚え、心で微かに笑った。私は無抵抗であった。

私は、どの時点で、ことんと眠りに入るように、死の世界に入

れるかが知りたかった。

私は、幼時期から青年期にかけ、神経質で、不眠症に悩まされ、
「カルモチン」を常用していた。渡伯以来、なんとかして不眠症
を治したいと願い、眠る訓練を自分にほどこした。不眠症は克服
した。その訓練の最中、けだるい眠気がくるのが解った。ああ…、
眠りがくる…、自分はあと二、三分で眠りに入るのだ…、その半
睡の中で、ことりと眠りに入る、

瞬間が解りだした。それで「死」に入る瞬間も「眠り」に入る
時のように、私には解ると思ったからだ。

膝と肘まできた冷たさは、そこまできて、停まり、じつとして
いる。

私は、又、考えた。

今、私に迫まりつつあるこの「冷たさ」を敵とよぶべきか？
或いは、友と向かえるか？　どうなんだと自問した。

それは、お前が死にたいか、生きたいか、に係っているのさ、ほ
んとにお前は今、死にたいのか、との問いを聞いた。

人間は、一回は死ぬのだ。世界中の人間の運命だ。

ガンで苦しんだり、中風で三年も五年も家族に迷惑をかけるよ
り、ここで苦しみもなく、ぽっくり死ぬのも…、それは、それで
よいじゃないか…、とすると、この「冷たさ」は友だ。ほんとに
それでよいのか、と自身に駄目を押した。

ふと、三年近く続けた、伯国文学の研究発表はどうするのだ、未
完のままゆくのか、惜しいな、と思った。急にこの世に未練が出

た。少し早いな。今、死ぬのは、それならこいつは“敵”だと思った。

私の、気持は、莫然としてではあるが、振り子のように、生と死の間でゆれていた。

不思議と死に対する恐怖はなかった。生への執着もあまり強くなかった。

現在の、非常事態に対しても（私にとって）あなたまかせよ、成り行きに任せよう。自分で、どうすることも出来ないしと思った。それから“友”か“敵”かと考えるのも億劫になった。解らなかったからだ。

私は、押しよせた、“冷たさ”に友よとも敵よとも言えなかった。

相変らず“冷たさ”は、前進も後退もせずじつとしていた。
“いつまで、中途半端でいるんだ…”

うつ屈した思いが、私の鳩尾のあたりをつきあげた。

“どおするんだ。ぐずくずせず決着をつけろ”と、

私は胸中でどなった。

その声を待っていたかのように、“冷たさ”は後退し始めた。全身に冷汗がにじんだ。心ぞうの鼓動は、やつと力を得て拍ちだした。

バアランダに、あわただしい足音がした。妻の足音だ。私は、なにかほっとした気になった。子供が母親を待つ、甘えたい、すがりつきたい気持―、それが六十才を過ぎた私に湧いた。ふがいな

い話だ。

彼女は、入口の戸をろくに閉めず、病室に駆けこんできた。

「あ方た、どうなさったの!？」

私は、無言でやっと動くようになった手を差し出した。

「あら氷のように冷たいわ、足は？」と、床に手を入れ。

「足首も冷えきって…、」

と、ごしごし、さすった。血が全身に巡るのが解った。

その時、ダア リツセンサ（ごめんなさい）

と、医者が入ってきた。彼は、私の病室に入るなり、枕辺にある四種類の薬を見た。

私が、自分の病気は、冠状動脈障害だと告げると、

「え、ここにある薬で解ります」

と軽く答えた。

私が、なお、発作の経過を手短に話すと、青い目を大形にひろげ、"うん うん"とうなずき、"危なかったですね"と言い、寝ている私に向かい、どうぞそのまま"と丁寧に診察してくれた。

「クリーゼ（危機）は去りました。もう大丈夫です。」

と言い、一寸考えこんで、

「あなたは、この発作前、心になにか、感動を受けたのではありませんか、たとえば、喜ぶとか、悲しむとか…、」

「いいえ、先生、それがですね、息子の話につられて…、大笑いをして…、ひどい目に会いました。」

「それですよ、この病氣を持つ人は、いつも心を平静に保たねばなりません」

と注意してくれた。

「厄介な病氣だな、大笑いも出来ないなんて」

医者 of 帰ったあと、私は妻にこう言った。

2

次の朝、末娘のエリザベツチが、私の病室にきて、

「お父さん、昨日は、大変だったのね。今朝お母さんから、話を聞き、びっくりしたの、もう良くなった。」

と私に問うた。私の家庭では、日常会話は、日本語で話し合っている。

私は、この時、娘を一寸、からかってやれと思った。娘に向かい、病状は、苦しく危険な状態であった。又、生死の境を歩いたようだ、誇張して説明し、

「その時にね、お父さんの前に、ぼうつとして、はつきりしないが、動く者らが居たんだよ。」

娘の、ベツチは好奇心にかられ、

「あら、なんだったのかしらそれらは」

私は、まじめな顔をして、見た者らは、子供のような顔を持ち、白衣を着て、背に羽根を持っていた、と告げた。

「あら、すてき、天使だったのよ、きつと」

「お父さんも、天使が迎えにきてくれたのか…、と嬉しかったんだよ。それがね、いつの間にか、黒いマントを着た、手に大鎌を持った者らのように変っていたのだ」

「悪魔、ジャーボだったのよ。」

ベツチは、恐ろしそうに言った。

私も、嫌悪の情を示し、

「だがね、彼らの正体を見定めないうちに、そいつらは、灰色のかたまりになり、向こうに飛んで行ってしまったんだ」

ベツチは、半信、半疑であった。

私は調子にのり、

「ねえ、ベツチ、今度、お父さんが、又あいつらに出会ったら、しっかり見定めるよ。そしてお父さんが死んでしまったとする。折角、見定めたものを、誰れにも伝えられぬのは、残念だ。そこで、ベツチと打合せをしておきたいのさ、」

「その打合せは？」

「お父さんが、天使に会ったと見定めたら、右手の親指と、人差指をつき出しておこう。よいかね、又、鎌を持った黒いマントを着た奴らが、お父さんを追い立てたら、左手の小指を一本だけ立てておくよ。お父さんが死んだら、よく両手を調べてごらん」

「嫌やよ、いやよ、そんな約束、できないわ、そんな話やめて…」

「残念だなあ…、ベツチ、よくお聞き、火星に生物が居るか、居ないかと、地球の学者たちは、アメリカがあげた、人工宇宙船の報告を待ちあぐんでいるんだ。何百億マイル先の星の問題でなく、

この地球で、人間が最後に出会う生物の方が、少くとも、この地球に住む、我々にとって、大問題だと思うんだがなあ、お前は、お父さんのサインを受けてくれないんだね」

ベツチは、大きく頭をふった。

私は「やれ やれ」といった表情をしたが内心ほっとしたのだ。

3

以上、述べたことは、××年、七月中旬に起きたのである。私の発病は、同年二月に溯る。

子供らの、休暇を利用した私は、妻と、ベツチを連れ、南リオ、グランデ州の奥地を旅行した。その途中、発病したのだ。

旅行の目的は、エリコ ベエリシモの作品、「時と風」「アンターレス事件」の舞台であるガウシオの奥地を、直接見たいと思ったからである。

車は、ポルト・アレグレ市から、西北五百キロメートル離れた。サント・アンジェロ市に向かって駆けている。見渡すかぎり、大豆畠である。否や畠などの表現では、不充分だ。

波状形の岡は、緑の海と化して続いている。おそらく何百キロ平方、この緑海は広がっているであろう。私たちは、南リオ・グランデ州の広大な農園に目を見張った。と同時に、ブラジルの広大さを実感した。

所々の交差路や、道端に紅紫の花をつけたさるすべりが撩乱と

咲いていた。サン・パウロ市附近では、見かけぬ花である。ベツチが「まあきれい」と歓声をあげた。終点の、サント・アンジェロ市に着いた。

タクシーをやとい、六十キロメートル程、先にある 教化部落跡に行った。そこは、かつての独裁者、ゼツリオ・バルガス出身地である。サン・ボルジャの近くで、もうアルゼンチン国境は指呼の間である。

この教化村に住んでいた、グワラニー土人らは、千七百五十年代に、イスパニヤ、ポルトガルの連合正規軍により、一夜にして麁殺された。

この悲惨な歴史を知る者は少ない。

土人らが作った、大きな建物（五十米×百五十米）が、飄颻と吹く風に、何百年もさらされ、蒼黒く、その残骸を残していた。

それは、サンミゲル廃墟と呼ばれている。

廃墟の前面の広場は、夏草が生い茂っていた。

“夏草や、グワラニー土人の、夢のあと”

私は俳聖、芭蕉が、古戦場で抱いた感慨を押しはかった。

土蜂が、草の根から、飛び立っていた。一匹、そのあとから一匹と、絶えまなく、とび出し、別の蜂が戻ってきて、巣に入るのを見た。

往時、ここに住む土人らも、地にしがみつき生きていたのである。
ろう。

私は、廃墟の内部に立った。厚い外壁を隔てた内部は、別な世

界であつた。

石だたみを歩く、私の足音は四囲の壁にひびいた。

その壁は、切石を積みあげて、作つたものだ。

午後、三時の陽はかなり暑かつた。私は、内壁の影に身をよせた。所々の切石のすき間に、名も知らぬ草や、かつらが自生し、蔭影を落していた。その一つ一つの蔭うつな影に土人の怨念が籠もっている。

私は、傍らの妻と娘の存在を忘れた。私は、目を閉じ往時を偲んだ。

小説 アンナ、テーラの主要人物、混血土人、ペエドロ（注、ペエドロは、白人娘と肉体関係を結び、アンナの肉親の兄らに、惨殺された）が、私の前に立ち現われた。

ペエドロの双眼は、恨みに炎えていた。全身、血まみれのペエドロは、両手を少し、離れて見える大樹に向いている。暗殺された自分は、その大樹の根元に埋めこまれているのだと訴えている。ペエドロは、一步私に近かよつた。死臭が私の鼻をつく、ペエドロは、満身に受けた、刃きずを私に示し、同時に、白人らが、自分たち、グワラニー土人らに加えた、惨虐、横暴を告発しているのだ。

私は、瞑目と続けた。

風は、吹きすぎる。時は、経過した。妻が、”もう充分観たわ、さあ、ぼつぼつ外に出ましよう”

と、うながしたので、私の瞑想は破られ、白日のもと、現実

戻った。

ベッチは、とつくに外部に出て、そこから三重になった、鐘楼に登り、私らを手招きしていた。

旅行を続ける、私は、車窓のカーテンを少し引き、外を見た。広い湖があつた。手元の岸边に蒲か葦か、はつきりせぬが、二米位の水草が蒼黒く、月夜に揺らいでいた。

私は、ふと“人間は一本の葦だ。だがこの葦は考える葦だ”とのパスカルの言葉を思いだした。遠く旅の空で、私は自分を反省した。人間は弱い、人間だなんて偉っているが、この葦のようなものさ、私は頬をゆがめた。

だが待てよ、哲人は、考える故に偉大なのだと教えている。考える、考える故に、人間は、偉大なのか…、パスカルは、さすがだなと呟いた。

4

その時、私は車内が少し、むし暑いのが感じた。

それで、わずかに車窓を引き開けた。涼風が入ってきた。私は胸をはだけ、涼しさを味った。

ちくり、胸元で異様な痛みがした。針先でつついた程の痛みは次第に拡がり、胸部一杯を占めた。激痛ではなかった。さりとて鈍痛でもない。不快な形容出来ぬ痛みだ。とつさに肋間神経痛だと思った。

あわてて車窓を閉めた。手を胸にあて、痛む部分をこすった。

摩擦を受けた胸部は温くなり、痛みは治まった。

「もう神経痛を病む年になったのか、老人病にとりつかれたのか」

と、苦笑が洩れた。

私は、帰宅するまで、この発作を黙っていた。

帰宅した、翌朝、床よりはなれ、着替をしていると、前日と同じ傾向の痛みがあった。私は急いでジャケツをまとった。前日より痛みは強いようだ。

私は、妻をよんだ。

「神経痛らしい、助間神経痛なんだ、力をいれ、背中を上から下にさすってくれ」

と、命令するように言った。こんな時に逆らうと、理不尽に怒りだす夫なので、彼女は、「はい」と力をこめ、背骨にそって、なでさすった。そのうち、彼女の手が、左の肩胛骨にそっそなでていた。奇妙なことに、痛みはすぐ治まった。

「ありがたい、そこをなでてもらったら治まったよ、やっぱり神経痛なんだな、老人病だよ。いつまでも 若いつもりでいたが、僕も老人の仲間に入ったか」

「還暦を二年前したでしよ、あなたは。なんぼ気持だけ若くても、身体は正直なのよ、無理をせず、大事にしてね」

妻は、いつになく優しくかった。

それから四、五日続けて同じ痛みが決まうて、早朝の着替の時

におきた。

温い床から出て、着替の時、寒さを受けると痛むのだから、神経痛なのだと思いこんだ。或る朝、起床しようと身を起こすと、胃のあたりに、拳程のしこりがあり、それが胸部につきあげてきた。同時に痛みがあった。

一昨年、医科を出た二男に、今までの、徴候を説明し、彼の意見聞いた。

「お父さん、それはどうも心ぞう病らしいな、助間神経痛じゃないと思うな、だけど今日の徴候なら、ひよつとすると、横隔膜ヘルニヤかも知れん」

「なんだい、そのヘルニヤと言うのは」

「つまりね、横隔膜と食道の間に、すぎができて、腸がそこから胸部に出るんだよ」

「ふん、それじゃ、脱腸じゃないか、たいがいの人は、腸が股の付け根に出るのだろ、まあ、稀には、へそに出るのもあるが、僕のは人様と反対に胸に出てくるのか、こいつは愉快だ。お父さんの、アマノジャックを、身体が証明しているじゃないか」

「お父さん、笑いごとじゃないよ」

と、かばんから、薬瓶を出し、

「この薬を、次に痛みがきたら飲んでごらん、水で飲まず、じかに舌の下に含むのだよ。つばで三十秒位でとけて、効き始めるはずだ。若し、痛みが一分位で治まったら、まちがいなく心ぞう病

だよ、試してごらん、ほつといちや駄目だよ。解ったかい、お父さん」

と、二世らしく念を押し、大まじめに言った。

「あゝ」私は、氣のない返事をした。

それから、こちら三ヶ月、毎日同じ痛みが襲ってくる。痛みのくる度に、枕元にある、二男がくれた薬に、怖ずおずと手を伸ばす。恐ろしいものにさわるようで、どうしても、ふたをあけ薬を取りだせなかった。

二男が、「どう、この頃は？」

と聞くと、「ああ、なんとか治まっている、たいしたことない」と口をにがしていた。

私の前に、心ぞう病―不治―急死…、この一連の文字が立ちはだかちていた。その文字は、心筋梗塞症で急死した父の顔と二重うつしになっていた。

それは、浅い沼に落ちた者の心理と似ているようだ。

ろくに泳げぬ者が沼に落ちた。溺れまいとして、手足をばたばたさせた。ついに力つきて、足から沈んでいった。足が沼の底についた。水深は、胸までであった。彼は歩いて歩いて岸にたどりついた。この男が始めより、沼の深さを知っていたら、いたずらな、あがきをせず、沼から出たであろう。

私の場合も、この男の徒労に等しかった。

なにしろ、枕辺に、二男がくれた薬があるにも係わらず、三ヶ月も泥沼のあがきを、繰り返していたのだから。

或る朝、激しい痛みに襲われた。

私は、どうしても痛みに耐えられず、怖ずおず、小瓶をとり、ふたを開けた。ふたの下に脱脂綿がつめてあった。痛みでふるえる指で、それをつまみ出した。小瓶の底部に仁丹を倍にした位の薬があった。

小瓶を傾けると薬がころげ出た。

“さあ、これでいよいよ神経痛か、心ぞう病かが、はつきりするぞ”と自分に言けきかせた。一粒つまんで舌の下に入れた。特別な味はなかった。薬はたちまちとけた。

もう、毎日襲う痛みは、胸一杯広がり、私を虐めていた。痛みと薬は、ぶつかかった。胸部が熱くなった。猛烈な摩擦がある。薬と、痛みの力くらべだ。

痛みは、薬を押しつけ、すでに占領した胸部に居坐わろうとする。薬は、痛みを押し戻どそうと争う。

激しい斗があった。痛みは、一層ました。

“ううん”私はうめいた、この間一分位であつたろう。薬の力は絶大であった。痛みは敗退した。治まったのだ。私の心は晴れなかった。やっぱり心ぞう病だったのか。

大きく息をついた私は、口を曲げ、“ざまあみろ”と悪態を吐いた。その悪態は、痛みに対してでなく、心ぞう病と、今、確認した私自身に対してであつた。

三ヶ月も、空しい病との斗のあと、私に与えられた報いは、自虐の快感であつた。

私は、あの一回のテストで自分の病気を心ぞう病と確認した。
二男を呼び、いくぶん顔をうつむけて、” 専問医を紹介してくれ” とぼそぼそ言った。

それは、私の怯懦な気持を正面から見すえられなくなかったからだ。

「なんだ、今頃まで病気を放っていたの、しようないな、お父さんは、病気に弱いから困るよ、全く駄目だな」

と、ため息をつき

「僕の先生に診てもらおう。明日は是非行こうよ」と、言った。

翌日、私は二男につきそわれて、診察所に行った。

その先生は、六尺近くの偉丈夫で、顔一面、とらひげを生やしていた。” 医は威なり” の格言を思わせる。ドットルであった。笑うと目元に優しい表情が浮かんだ。

彼は、入念に診察してくれた。心電図を撮り、X光線で心ぞうを透視した。一通りの検査が終わったのち、医者は、私と机を隔てて、対坐した。

「あなたの病気は、冠状動脈障害です」と、重々しく言った。

私は、心ぞう病と思っていたのに、別の病名を言われたの

で、一寸」戸迷った。が、何にか関連があると解った。冷えびえとした気分が昂まってくる。＂落ちつけ、医者のお話をよく聞くのだ＂と自からを押えた。

「その、動脈に障害があると、なにか心ぞうに影響があるのですか」

「心ぞうは、冠動脈から送られる血液により、酸素と栄養を受けるのです。その動脈が障害されると必要な活力を受けられず、結果的に心ぞうが弱るのです。まあ、当分、内科的に治療してみましよう」

と、四種類の薬を処方してくれた。

二週間程、医者の指示通り、薬を連用したが一向はかばかしくない。病状は悪化するようだ。再び同じ専門医に診てもらった。

「あの薬を服用して、好転しないなら、シネ、コロナ、グラヒヤのテストが是非とも必要ですな」

と医者は、眉をひそめて言った。

「その、テストの結果に依り、内科的な治療が可能か、外科手術をせねばならぬかが決まるのです。この検査は必ず受けねばなりません」

と、医者は念を押し、話を打ち切った。

帰り道、つきそってきた、妻が心配そうに

「先生は、どう言ったの、内科的な治療で治ると言った？」

「シネ、なんとやらのテストを受けよと言ったよ、やゝこしいテストで、費用も二万コントス近くかかるそうだ。INPSの費用

でもらおう」

「あら、そうなの、だけどあまり心配しなくてもよいわ、皆人なそんな病氣治しているんだもの」

妻は、病氣の性質も知らず、気軽に言う。

丁度、車は、十字路にさしかかり、シグナルは赤であった。

“解っていないんだ。おれの健康に赤信号が出ているのに”

私は、胸のうちに舌打ちをした。

それから、また三ヶ月、私は、指示されたテストを受けなかった。テストの結果、外科手術が必要と、結論の出るのを恐れたからだ。

「お父さんは、ふだんは、氣が強よそうにしているが、実は臆病なんだよ」

「そうなんだ、弱身を見せまいとして、僕らの前では、空元氣を示しているんだよ……」

「まあ、そう言ってしまったら、みもふたもないわ」

息子らは、辛辣に批評し、妻が私をかばっているのを聞いた。事実、彼らが言う通り、私は正面きって病と、立ち向かうのを恐れていた。

なんとかして、内科的に治したいと、家に籠り、終日病床に伏していた。抗えぬ、大きな力に、地に伏し、よろばい、はって逃げていたのだ。

七月の中旬には、先に記した、大笑いをして、ひどい目にあつ

た。病勢は、日々悪化した。八月の中旬、ついに意を決し、シネ、なんとやらのテストを受けに、ポルトゲーズ病院に行った。虫が知らせたのか、二男、長女、三女、妻らが、つきそてくれ、賑やかであった。

順番を待つ患者らは、一様に不安気な表情を浮かべていた。

名前を呼ばれた私は、二男につきそわれて検査室に入った。室の中央には、鎌首をもたげた大蛇のように、X光線のカメラが据えてあった。その真下に幅、一米位の床があり、私が乗ると、数條のバンドで体は床に固定された。たぶん角度を変えて撮つす時、下に落ちない為であろう。床にしばらくつけられた私は、嫌やでも、前面の鎌首をあげたカメラと向き合った。まるで、大蛇に呑み込まれるような、いやあな気分になった。

「テストは、二十分かります。開始」

と、医者と言った。私の右腕の静脈血管は切られ、細い筈が、同血管内にさしこまれた。私が息を吸いこむと、血が心ぞうに戻るらしく、その血液の流れに乗るように細い管は心ぞう近くまで押しこまれた。

“よし”と医者は言った。

細管を通し、特殊な液体が、ポンプの圧力で注がれ、血液に交じり、心ぞうをとりまくように、循環するのが解った。更に、液体は注入された。心ぞう周辺は熱湯を浴びたような感じであった。“苦しい”と言うと酸素吸入をさせてくれた。

先程から、X光線のカメラは、音を立てて、撮影している。検

査室の壁にスクリーンがあり、テレビのように、私の病状を示しつつあった。

私の体位は、仰向けより側位に変えられた。テストは続く、又仰向けに戻された。この間六、七分であつたろうか。

「よろしい、テストは終った」

と医者が言った。

私は、テストが意外に早く終ったので、病状は良いのだと思つた。

「先生、結果は？、どうなのでしょう？」

「あなたの息子が、説明します。次の室で待ちなさい」

と、科学者らしい、冷静な声が返えってきた。次の室に移された私は目を閉じ、二男がくるのを待った。なかなか二男は、こなかった。彼を待つ私の気持は、微妙であつた。始めは、痛いが軽症であるとの報告を期待して二三分待った。次に、ひまどるなあゝ、重症なのかも知れぬ、との不安が雲のように湧いた。蒼白な顔をして、二男が私に近かずいた。

直感的に、私は事態を悟った。彼は、私の肩に手を置き、

「お父さん、病状は最悪なんです。すぐ手術せねば、生命にかかわるそうです。医者は、お父さんの同意を求めています」

息子の言った最後の言葉は、強いひびきがあつた。

私の心に、ある、うねりがおきた。それは、連続的によせては返した。私は大きく息をした。多少は、予期し、覚悟もしていた事だ。子供らの前で、見苦しい乱れを見せるな、と心をはげまし

た。私は、わざと言葉に底力をもたせ、

「あゝ、そんな状態なら、否や、応ないな。だけど一たん家に帰り、出なおせないかな」

「もう、そんなにしておれないのだよ。血管内のこぶに、ポンプで圧力をかけたから、それがはずれて、先端の血管につまると、即死するんだよ。すぐ手術を受けよう…、」

と、まるで、すゝめる本人が、死刑の宣告を受けた者のような顔色であつた。

「そうか、状態是最悪なのか、しかたがない。生死は神の手にゆだねよう。身体は、近代医学を信じ、医者の手腕に任せようじゃないか…」

そう言った、私は、しいて息をととのえ、床を囲み、半円形にならんだ、妻、長女、三女、二男らを見た。彼らは、皆蒼白な顔をして、身じろぎもせず立っていた。

私は、ゆつくりと妻、親族、親しい友人らの名をあげ、一応最後のつもりで挨拶した。

次に、七人の子供の名前を個別にあげ、彼らに対し　「ありがとう」と言った。

その言葉は、第三者には奇異と思われる言葉であろうが、私にとっては、自然な感情の流露であつた。

私たち夫婦は、七人の子供を持った。南国の伯国は、子供は育てやすかった。日に四立の牛乳を飲ませた時期があつた。二升二合の量である。昔のことなので、価は安かつたが、私にとって、負

担であつた。衣服も、充分でなかつた。子供らは、半裸で、おまけに裸足で、街路に出て、黒人の子供らと遊んでいた。あまり目だたなかつたのは、貧しい人々の住む地区にいたからだ。

子供の誕生日には、安物の菓子を買ひ、母親が作ったレモン水で、楽しく祝つた。

私も、妻も、子供を育てるのは楽しかつた。子供が多くて、大変だなど思つたことは、一回もなかつた。

時は経ち、今、末娘も大学に入つた。その年頃になつたのだ。現在の生活は富んでいないが、水いらずで楽しい。私の口から、”子供らよ、ありがとう”と、自然に出た。

ふと、私に、辞世らしいものを作りたいとの、しやれた氣持が出た。私は、短歌は、ごく下手なのだが、即興で作るのは得手であつた。だが、その時、おかしな事に、

”なきかずにいる、名をぞここにとどむ”

との、正行の辞世の下の句が頭に浮かんた。いかん、これは他人の作つたものだ。私は自分のを残さねばならぬ、とあせて、その下の句を頭から、追い出そうとした。

”名をぞ、ここにとどむ、名をぞとどむ”

下の句は、どつかと私の頭に居坐り、頭から出て行かない。歌は、どうしても作れなかつた。

私は、テストを受けたままの半裸でいたのだが、急に悪寒が窮つてきた。

手も足も胴も、私の意志に反し、はげしく震え出した。齒がか

ちかちと音を立てた。あれは、悪寒の為であつたのか、手術への怖れであつたろうか。

6

手術室は、冷えびえとしていた。天井にある、直径、一米位の円い蓋を附けた蛍光灯が室を照らしていた。白衣に身を包んだ、医者が五人いた。その男らは、一様に、口をマスクで覆っていたが頬や、額を現らわしていた。その部分は、蒼い光を受けて、不健康な肌色に見えた。

私は、二男がその中に、立ち会い人として交じっていたのを見て、心強く思った。

私は、全裸にされた。胸と股にすじが引かれた。

手術に対し予備知識を持っていた私は、あゝ肋骨を切り開くのだ。股にある静脈血管は、引き抜かれ、詰まった冠状動脈に綴がれるのだな、と思った。一人の医者が、かみそりを見せ、恥毛をそると合図した。私は、うなづいた。かみそりは、器用に動き恥毛をぐりぐりそり出した。私の胸に卑猥な冗談が浮かんだ。

それを口に浮かべれば、現在の自分の気持に余裕があるのを示すようであつた。

私は、自分の銜気を恥じた。口まで出た卑しい言葉を胸に押し戻した。

一人の医者が、“トード、プロント”と同僚に言った。“OK

“と他の医者が応ずるように答えた。

私は、意識を失なって行つた。深いふかい谷底に落ちるように……。

私は、夢の世界にたゆたう心地であつた。

波間にゆれる、小舟を見ていた。

「お父さん、僕だよ、解る？ 解る？」

私の身体は、微かにゆすられていた。

私は、ものうく、両眼を開けた。前面に二人、右方に一人、白衣を着た者らが立っている、麻酔から覚めきらぬ私の瞳は、二重三重の暈を持っていて、彼らを識別できなかった。ただ、右方の男が話しかける声に覚えがあつた。

「お父さん、手術は、六時間もかかったが、成功したよ、百％うまくいったよ。もう大丈夫だよ」

声は、はずんでいた。私は解つたと、うなずいた。

二男はまだ一言、二言、話しかけた。私にとって、全てものうく、うるさかった。ただ先程までいた夢の世界に戻りたかつた。波間に漂よう小舟に乗りたかつた。

次に目覚めた時は、手術後、二十時間経ていた。

私の手術は、二男が告げたように、成功であった。
手術後の経過も良好であった。

十五日たった。"明日は退院できそうです"と担当の医師が明るく告げた。

その夜、同室の病友が、悲鳴をあげ、さわだした。

「痛い、苦しい、もうたまらん、アイアイアイ、助けてくれ」と大声で繰り返す。それは、絶叫などをこえた、生の叫びだ。私の居る病室は、二床だけで、彼と私だけが病を養なっていた。

「アイ、アイ 助けてくれ……」

この言葉が、病友の最後の声のように、聞えた。
非常ベルは、すでに何回も鳴らし、赤ランプは、戸口に点もっている。

五、六分、私は待った、医者も、看護夫も来ぬ、病友のうめき叫びは、ますます高まった。

私は、ついに意を決し、病床から下りた。病室の戸を開け、廊下に出た。長い廊下は、冷えきっていた。窓ごしに見える。大通りに、乗用車が連なり通り、車の光芒が、夜を、彩っていた。

私は、おぼつかない足取りで七、八十米離れた看護夫の詰所に歩を進めた。

気がせいいているので、少し歩行に無理があった。

どうきが高まった。無理かなと思いつつ、やっと詰所にたどりついた。詰所には、たった一人雑役夫がおるだけであった。

××号室の病人が重病で苦しんでいる。すぐ手配してくれるように頼んだ。私の頼み声は、弱く絶えだえであった。やっと自分の病室に戻った私は、もう病床に上ることが、できなかった。激しい発作があった。全身が震え、呼吸困難があった。息は、ひゅーつと笛のような音を立て、出るだけだ。気管に弁ができたように、空気は肺に吸いこめぬ。

私は、床に倒れた。頭が痛かった、全身から力が抜けた。意識が遠のいた。

特別看護室（UTI）に居る自分を、見出したのは、何分か経った後であった。

私は、何十分前の自分の行為を思い出した。危なかったな、自分の体力の限界を越したのだ。私の心ぞうは、末だ充分治っていなかったのに…、後悔が走った。次に、“人がその方のために自分の命をすてる…”

幼時に暗誦した、聖句が胸に浮かんだ。

大げさな、なんだ、一寸したことをしただけで…、

お前は、自分である行為を決定したのだ。他人に強要されたのではない。明らかに、自分の自由意志で決めた行為だ。その結果が良くても悪くても、お前の責任なのだ。

私は、この論理で自分が納得した。妙に割りきった、すかっとした気持ちになった。

後日、退院のさい受取った、病状経過書の一部に、

『患者は、手術後十五日目、激しい呼吸困難を示し、次に心不全

の徴候を見せた。直ちに特別看護室に移し、応急処置をほどこした。

三日間の特別看護により、危機を脱した』

と書いてあった。

続いて、退屈な、病院生活を三十日余した。

8

退院を許され、療養を続けている私は、近頃、決まって明方に目覚める。睡眠薬の助けで眠った頭は、にぶく重い。(手術後、又昔の不眠症がぶりかえした)、窓から、仄のかに、暁の白さがさしている。

夜着を、ずらした肩先に、白光に乗った冷気が泌みる。

私は、吐息を洩らした。何回も死にかかり、生きのびた私―、そして現在、生きている自分を見るのだが―、一向、生えの感激がないのは、どうしたことか。

私は、目を一点にすえ、発病してから手術後までの、療養生活を反省した。人に見せたくない、内心の思いを反芻した。

私は、神経質で、怒りやすく、わずかな事にも―、それは他の人なら、笑ってすごす事でも、針ねずみのように、刺げを立てるのだ。

あれは、手術後、五、六日目であった。

いつも、午前八時頃看病に来る妻が、十一時頃来た。

「おそくなつてごめんなさいね。女中さんが今日は休んでこなかったの、細まごました家事を片付けていたもんだから、あゝそれから本屋さんによって、文春を買ってきたわ、」

私は、手渡された、文春を床にたたきつけた。満面に怒気を満なげらせていた。続けてひどい罵言を妻に浴びせようとしたが、看護婦が注射を打ちにきたので、やっと耐えた。

妻は、私に背を向け、持ってきた花を、花瓶に生けていた。

斜めに見た、彼女の肩がひどく、痩せて見えた。

看病づかれで、体重は、すでに五キロも失なっていたのだ。

発病以来、何回も行なわれた、私のエゴイズム、何回となく示した。私の、怯懦な精神を、あらためて、ここに告白する勇氣が、私にはない。

私は、"あゝ"とうめき身じろぎした。

手術を受けた助骨の切断面がうずいた。

うずきは、更らに深い個所にあり、

"弱い、全く弱い人間なんだ、俺は、一本の葦なんだ"との、うめきとなつて出た。

私は、徐々に、明るくなる外界に、身を置きたくなかった。

目を閉じた。私の目裏に、南伯で見た広い湖の光景が浮かんだ。月夜であつた。月も星も公害のない冴えた夜空に煌めいていた。湖面は、月影とほしかげを銀色に浮かべていた。

少し風があるのか、沖まで測として、銀波が続いていた。

岸辺に揺らぐ、葦は蒼黒く見えた。

風が出て来た。葦は、さらに揺らいだ。

烈風になった。横なぐりの風圧に、早や、湖面に打ち倒されたものもある。

旋風が起きた。葦は、よじれ、入乱れ、争い、束となり、又、ほどけた。

更に、激しい風が襲った。

葦は、水の飛沫のなかで、悲鳴をあげ、なびき伏した。

“ぐき”と音がした。ついに弱い一本の葦は折れた。

私は、びくつとして、身を震るわせた。

私の、心耳に、この音は、つきさすようにひびいた。

終
り

(短歌持集)

梅 崎 嘉 明

いざなわれ出できし野径腕組みて帰結のあらぬ風の音聞く

ガラス戸にローソクの光映りつつキリスト復活の講話はつづく

低迷をつづけし幾年朱の柿の重きをもぎて思うことあり

弱りたる体と思うそこばくの柿を背負いて坂登りつつ

呼びかけし声が訝となりて還る沼はミヤストーマの花盛りなり

青 き 核 (たね)

植 村 か ず

オリーブの青き核吐き溜めいつつ負目持つことば唇に洩れいず

痛む腕をいたわり揉みつ重ね来し齢いの襞(ひだ)に頭ちてくる悔

地下駅を出でし眸あげる中空に昼月白し耳朵のかたち

風の持つ音粗（あら）々と廃園の椰子葉鳴らして吾が頬を擲つ

香煙の片なびく墓前命とう韻き斑となる朝風の中

生の翳り

川原比露思

かたみには言い難きもの秘めいつつ対う茶房の間接照明

耐うるほか術のなかりし過ぎゆきも生の翳りの中にかそけく

苛酷とはかくもすがしく断面の結晶みせつつ溶くる氷柱

逃避などなき命終のかなしみが匂うパイナの花の散る下

はたらきて切なきいのちあふれたる記憶はすがし冬日浴びつつ

高橋 よしみ

レベイヨンの時を忘れし歓楽にそむきてい寝る異質の心

一杯のピンガにあがる無頼等の会話に国も文明もなく

昧く重くバイブルの章神聖におきて悟りにとをき掌

追いつめてモルフオ蝶の夭き死を強うる罪の臭いのする禁猟区

寒去りて先ずひらき初むイペー黄に眼も魂も奪う八月

裸 木

河村哉太郎

葉を落とし直ぐ佇つ桐が整条に谷越して山の麓まで見ゆ

夜の霧に濡れて堪えねば雫して樹々は孤独に葉を垂らしゐむ

蚤ひねることに憤れし長き夜の夏逝きて此頃よくよくねむる

秋に入る庭の小薔薇が我が窓にとゞきて咲くに剪ることもなし

夜の空の明るきに佇つ裸木はおびゆる程に枝を張りたり

老人が妻殺したりといふニュースきゝたる朝を憂鬱にをり

谷越してつゞける遠き桐畑車窓に見れば冬陽あたゝかし

剪定をなせる桃木が簡潔になりて花咲く前をしずけし

闘鶏はするどくまなこ見据えたり金網越しの我に対ひて

険峻を汗かきあへぎ登る夢現（うつ）の何にかゝわりありや

声 な き 嘲 笑

光 田 寿 男

心閉ざせしひと日の夕べ鉢植えの石榴は裂けて肉をさらせる

人造石のにぶき艶もつビルの壁いびつに吾の映りすぎゆく

すっぽんを釣り上げし折の途惑いを想い出すなり間へいもなく

吾が蹴りしビールの缶がいつまでも音たてゆけば笑いをさそう
魚族らの声なき嘲笑湧き上る酔いて醜き面さらし居れば

弘 中 千 賀 子

能面の小面（こおもて） 白き頬伏せて掬うるはなに細き凝視に

小面の凝視のかたえなまぐさき生身（しょうじん）にして齡重ぬる

魑魅魍魎（ちみもうりょう）たとえば云わむ夜の闇の疑心ひとつ
に對き合っていて

雪崩れこむ夜受け止めてひとりなり限りもあらぬもの手繰りつつ

立ち木なす山の斜面に積む雪の幻覚として凍死のシーン

古き黄金の森

「リベイラの自然と風俗」

解説

これは一九四六年に若き三人の学徒によって書かれた、

原題 「リベイラの自然と風俗」の全文である。原本は騰写版ずり一五〇部限定であつたから、今ではほとんど手に入らない。三十数年前に書かれたものでありながら観察の内容は今日でもその価値を失っていないばかりか、読み物としても第一級の面白さがある。「コロニア文学」編集部は筆者の斉藤広志、橋本梧桐両氏の承諾を待て、（増田健次郎氏は故人）ここにその全文を再録することにした。

テキストはサンパウロ人文研究所蔵、旧南樹文庫のものを使用した。

旧かなを新かなに改めたほかは全て原文のままであるが、各章の見出しは編集部がつけた。



はしがき

まだ見ぬ土地にあこがれ、都を遠く離れた山に河に自然を尋ね、人情風俗を探ってみたいという単なる旅行以外に、常日頃、幾らかにてもおのがじしの立場から物を究めたいという切なる望が叶って押し出した三人が、これはまた気俤なペンを無理に走らせて綴ってみたのが、ともかくもこうした一冊にまとまった。

南聖地方と通称されている地帯を汎く旅したわけではないが、ブラジルの歴史でも古い物語りを数多く持っているこの地方の大半は見聞きしたこと、草や木を尋ねて多少の新しい知見を得たこ

と、風物を描いて何か今までに見ぬものを感じて来たということが、この旅行の収穫であったと言え言えないこともない。

それにもまして感じたのは、旅という書斎では得られぬ新しい人生の一つの暗示であったかもしれない。

本文中、生物学方面と写真は橋本、道中記と歴史方面は斉藤、スケッチと終りの一私見とは増田がそれぞれ担当したことを記して、責任を明かにしておく。尚参考のため、この地帯に関する文献の主要なるものを掲げておいた。

深い理解を持って支援していただいた蜂谷専一氏の御厚意を謝し、また種々御配慮をわずらわした河合武夫氏に御礼申上げる。

一九四六年八月三十日 橋本 梧郎

増田健次郎

斉藤 広志

（「コロニア文学」再録使用図版パーシー・ラウ）

一、サンパウロを出発し、アピアイへ向うこと

六月二十四日、晴天

未明六時に出発。深い霧のこめた街路を疾走して近郊へ出る。夜も明けてコチア付近にかかると、霧も次第に晴れ、しばらくして右方に陽光をあびたサン・ロッケ Sao Roqueの連山を見る。ピエダーデに着いたのが八時十五分。町を流れる小川の岸には柳がたれ、桃の花が満開でうらかな小春の風景だ。ここは各方面へ通ずるバスの休み場になっている宿場町だから、カフェーを飲む。なかなか粋なお内儀さんがいるが飲食代の高いのに驚いた。

ピラール・ド・スール Pilar do Sulあたりよりだんだん植物相のちがってくるのが眼につく。なだらかな草原にはシャシンが簇生し、雄大なパラナ松の林がそこそこに見えだす。サン・ミゲール Sao Miguel Arcanjoを中心として広漠とした平原で、見渡す限り冬枯れの野原である。坦々とした道路はよく手入れが行き届いてバスは非常なスピードで走る。行きかう自動車の数はいたって少なく、クリチーバ通いのトラックが炭を満載したトラックくらいのものだ。路傍にはそここ草原のまっただ中にポツンと製材所が建っている。設備の新しいところからみると何れ道路が完成してから建ったものだろうが、僅かなパラナ松を伐りつくしてしまえばあとには単調な草原を残すばかりで、風趣をそぐこと甚だしい。炭焼きはこの地方の重要な

産業らしいが、見渡したところ森らしいものは谷間にあるのみだから、パラナ松を板にひき森を伐って炭を焼けばたとえランゲ氏の「森の精」ではなくとも、今後幾何を出でずして、泣かねばなるまい。

旅をして我々が愉快に感ずるのは、その土地の風景がそれぞれ趣きを異にしている見る者の目にいつも新鮮な感を抱かせる、ということが一つの条件であるが、風景を構成する主要な分子としてその地その地の植物相が変化していくことがその内に含まれている。

こうした目から見るとき、サンパウロから三二〇軒以上も離れているアピアイーに至る途中の植物相は、疾走するバスの窓からもその大体を知ることができる。サンパウロからピエダーデに至る地帯は大体サンパウロの近郊に見られるような相を示しているが、自動車道路の両側から見える範囲は殆ど開拓された土地ばかりであって、人為の加えられた後に生えた植物がその大半を占めているから、人工の跡を見るに過ぎず敢えて記すようなものもないが、サン・ミゲールに達すると広い原野が展けていて今までとはその面目を一新する。

このような原野も夏草の時と冬枯れの今とではその相観を著しく異にしているが、今を盛りと冬枯れの野原を埋めつくしているのはカッピン・ゴルゾーラ Capin Gordura の紅紫色の穂波である。この草は中南部ブラジルの冬を飾る非常に特徴の

ある牧草として有名であるが、日本のススキの穂波の如く、ブラジルで美しい穂波を見せる草は外には見られない。

原野の乾燥した場所にはワラビが多い。ブラジルではシダ類を一般にサマンバイア *Samambaiá* と総称しているが、ワラビには特にサマンバイア・タペッテ *S. Tapeete* の佳名が俗称として用いられている。このワラビは日本のワラビと同一種に属しているが、殊に日本の中部地方のものと同一で、日本にひろく見られるワラビはこの変種と見られている。シダ類の特色としてその葉は冬も緑色を失わないで場所によつては一面に緑の葉で敷き詰められており、殊に焼け跡に出たものが美しい。

低みにはノボタン科の草が二、三種、美しい桃色の花をつけているが、こうした所にはまたよくアンジッコ *Angico* やヴオキシア科 *Vochysia* *areae* の大木が自生しているし、河でもあればインガー *Ingá* の白い花が見られる。

この外、木ではナス科、キク科、クスノキ科、タカトウダイ科の灌木が目につき易い。カブシンギ *Cabixinguí* (タカトウダイ科) の半ば黄葉した姿はサンパウロの冬を告げる最も代表的な種類で雅趣のあるもので、花のあるものではキク科のヴァツソーラ *Vassourá* と俗に総称する一種で *Vernonia* *Petiolária* *DC.* *Vor.* *Appendiculata* *Bah* の白い花が断然優勢である。それにヤシの種類が三種ばかり見られたが、その中の一種は確かにジェリヴァ *Geriva* ヤシであった。

赤い焰のような花をつけて冬のサンパウロ高原を飾る蔓になる木本にシッポー・デ・サン・ジヨアンCipode S. Joãoというのがある。筆者は今から十二年前、ブラジルで初めて落ち着いたサンパウロ郊外エメボイの丘でこの花を初めて図解して名称を調べたことがあって、なつかしさをおぼえるが、普通の野原にあると別に美しいと思わぬこの植物も庭の生垣とし、又は東屋に這わせると誠に野趣のあるもので、一九世紀の終わり既にイギリスにては園芸植物として輸入し温室栽培している。その花は筒花で火焰のような赤さであるので、学名（pyrostegia ignea Presl.）にまでIgnéa（火焰）とつけられている。

サンパウロでも時にこの植物を生垣としてはわせているが筆者の知っている範囲では、セントラル線のタウバテーTaubaté駅のものとはブータンタンButanta研究所内にあるレストランのヴェランダの上にまつわせたものが美しい。

このように外国にまで知られて園芸植物にまでなったものが、尚ふんだんにサンパウロ州に見られることはその道の者には殊に面白く且つ有益な研究材料でもある。ノウゼンカズラ科に属する。

十一時過ぎ、カポーン・ボニートCapão Bonitoに着く、町を見てくれというようにバスは広場を一巡してからホテルの前にとまる。広場の公園は市長の自慢の種かも知れないが、およそこの田舎町には似つかわしくないければしい色彩のもの

だ。広場を囲んだ建物は新しいが、ちよつと裏の方を見ると家に古ぼけた家並みがある。草原の片隅に何百年も眠っていたような田舎町が、道路が完備してまっ赤なガソリン・ポストでも出来る、にわかにならぬ文明に色氣づいて田舎娘のお化粧のような近代化をするのを見ると、何かいたましいような気がする。

大体この地方の町はうなぎの寝床式に道に沿ってひよろひよろと家並みがあり、恐ろしく古い家と新しい建物とが隣り合っていて中間的な古さは見られないが、このことは過去を見ると容易にうなづかれる。時代から言うところの地方はサンパウロ州でも古い方であつて、かつて植民期の時代、ソロカーバに大きな牛馬の市が毎年季節を定めて開かれた頃には、リオ・グランデのパンパ地帯からおびただしい畜群を追つて来たその通路になっているし、更にそれ以前、南部に進出したバンデイラの通路でもあつたらしい。

この一帯は又、産金でも古くから有名なところで、カツポーン・ボニートなども一七三八年まではここに産金五分一税の税務所があつたりしてパラナパネマParanapanema上流一帯の中心地になつていたのだが、アピアイApiaí方面の採金が盛んになるに伴いお株を取られて衰微し、一七七四年には金の出た場所から少し離れてアルマAlma河右岸に新しく教会を建て、この部落をNossa Senhora da Conceição de Parapanemaと呼んだが、これが現在のカツポーン・ボニート市である。だからこのあたりの町では二世紀を

経た家とここ数年間に建った新しい家とが、それぞれの時代の皮肉な対照をなしている。然し飛躍は家のみにとどまらず、目にこそみえね何百年の伝統でつくられた住民の心にも亦はげしい革命を起こしていることであろう。

パラナ松



PINHALL

ホテルで朝食をする。バスに揺られて空腹だから食事がうまい。それに量の豊富なのが我々にはいい。約一時間休んだのちに出発。行く程に、次第に谷が深く森がそびえて、谷間には音もなく清流が奔っている。釣り心あって流れある毎に窓から首を出してみていると、増田君も劣らず同感だとみえて盛んに見入っている。橋本君はわれ関せずと、しきりに鉛筆を動かして草木の名を書いているが、揺れる自動車の中で字を書く芸当は相当なものである。

グアピアーラGuapiraを通る。古い軒並みがごみごみと両側にたてこみ、今までの町に輪をかけたような古めかしさだ。町を出外れるところに、半ば傾いたような家があつて“Hotel Guapira Conforto Familiaridade”と崩れかかった壁に大書してある。これから次第に森林が深くなり、鬱蒼として遂に道に迫り、サンパウロ付近では見られぬ大森林である。山の起伏ははげしく、バスは曲り曲つた道を速力をゆるめずに疾走する。

午後二時、アピアイーに着く。海拔九二〇米の高地で、サンパウロから三二〇軒の距離にあるがバスは正味六時間で走破したから時速五〇軒であり、ソロカバナ線の急行オウロ・ヴェルデよりも速い。そこらの小僧に案内させてホテル・テイシエイラに落ち着く。眼色毛色の変つたのが三人、毛布を縛りつけたリュック・サックを背に負い水筒や雑嚢を斜めに手には絵具箱や採集用の胴乱をぶらさげて縛り歩くと、さなくとも話題がなくて困っている田舎町の住民は物珍らしげに見ている。

宿屋でしばらく休んでから、筋向かいにある郡役所Prefeitura Municipalを訪問する。折あしく郡長は留守なので書記に面接し、大体我々の旅行の目的を告げて諒解を求めたところが、書記は非常な好意を以てアピアイー郡の地図を出したり種々な資料を提供してくれた。そのうちに増田君はスケッチに出かけたので、橋本君と二人で四時ごろから町外れに出

る。

二時頃はかなり蒸し暑かったが、日の傾く頃になると颯然として東から涼風が吹き初め、ブルーザ一枚ではちよつと肌寒けと思っているうちに、町を谷にはさんでその西側にそびえている山の頂きには早や白い雲霧が走りはじめた。パラナ松の散在する岡の上を霧が動いていくのは、如何にも高原らしい風景である。

帰路、町の入口まで来ると、黒の乗用車が我々の傍に寄つて来てギーととまる。降り立ったのは、警察署長で「写真を撮ってはいかん、写真機をよこせ」ときつい御訊問だ。

写真機を取りあげられては一大事だからいろいろ問答しているうちに、こりやあどうも我々の風態が異様だから何やら連盟の残党とでも間違われたのではあるまいかとひそかに考え、かねてこんな場合の用心にスエーデン領事館の森田君の好意による一礼を差し出したところが、俄かに署長は態度を和らげ「いや、警察官として、一応不審をただすまでのことで……」と話がわかつてすらすらと解決し、別れる時はお互いに談笑すら交わすようになった。出発前、この事については河合さんからも注意があった。多分、郡役所に挨拶にいつて警察署に敬意を表することを怠ったから、向うで少しつむじを曲げたのかも分らない。宿に帰ってから分ったが、増田君もスケッチしているところを訊問され、つむじの曲げついでもあったらうか、「セウ・デゼーニョ・ノーン・エー・ナーダ・アルチスチコ」といわれたとかですこぶる憤慨していた。ホテル・テイシェイラは此の町に多く見られる家のように何の

変哲もないひよろ長い平家で、この町の過去を語るかのように屋根がゆがんで波状形になっている。とてつもなく広いサロンがありそれに続くせまい廊下の両側にずらりと小さな部屋が並んでいるが、泊り客が少ないので森閑と静まりかえっている。恐らくこの地方の鉱山が活発に操業していた頃には大きなサロンを埋めるような満員だったであろうが、現在ではサンパウロ・クリチーバ間を往復するトラックの運転手の定宿となって尾羽うち枯らしているありさまだ。金や鉛の鉱山が近年殆ど休止状態になってから町はぐつとさびれたのだという。言い伝えによると昔さかんに金が出た好景気の頃には、バイレなどで若い衆は好きな女の髪にザラザラと砂金を撒いたものだといひ、また一五、六十年前までは金粒が貨幣として通用され、お祭りの日などで人の出が多い時は、金粒を秤ではかるのに店の番頭はテンテコ舞いをしたものとクルークも記している。

夕食後、宿にいても芸がないから連れだって散歩に出る。

どうせ鉱山町のことだから景気のいい頃に流れて来た他国人もいようし、人柄の悪いところだろうと考えていたが、注意して住民を見るとそうでもない。殆どが土着人で、ムラートより肌色のちよつと明るいくらいのメスチーソ、つまりローケッテ・ピントのいうカボークロ型なのだ。他国人といってもせいぜいパラナ州から来た者が多いとのことだ。従って住民はサンパウロの街を歩いている群衆よりも、遥かに統一された特徴をもっており、それ

だけに住民全体からある整った美しさ、気安さといったようなものを感じる。いずれ何百年か前にこの地方にバンデイランテが侵入した頃に、蟠居していた先住民カリジョーCarrijo土人の血も混つていようし、更にポルトガル人が連れて来て金を掘らした黒人奴隷の血も一層多量に浸潤していることであろう。

夜、蚤の多いのに閉口した。携帯のDDT殺虫剤を多量に使えばよかったのだが……

アピアイーの山地は、パラナピアカーバの山脈中であつて、標高一千米に垂んとし、緯度から言えばサンパウロ市より、ずっと南に位置するのと相俟つて、南ブラジルを代表するパラナ松Pinheiro do Paranaがよく繁茂しているのが、この山間の町の周囲に一種特別の風景を添えることは見逃すことのできぬことである。従つて、この地帯は、Dr. C. Hoehneの、所謂アラウカリランジャArancaria Angustifolia Otto Ktzeより来る――に属すると見てよい。

アピアイーでは二十四日の午後、ほんの僅かの時間しかその植物を記す時間がなかつたのは誠に残念であつたが、総体的にみて、サンパウロ南部の高原植物地帯に大体所属するものと見てさしつかえないと思う。

殊に、カンポス・ド・ジョルドンと同一の種類がかなり見うけられる。例えばブリンコ・デ・プリンセーザBrincode

Princesa 日本でフクシア *Fuchsia* といって温室栽培しているものの種類（ツキミソウ科）、クワレズマの木、*Quaresmeira* の一種 *Tibonchina* *Fothergilla* *Cogn*（ノボタン科）、ブラジルタウゲシバ、*Aspicarpa*（共にヒカゲノカヅラ科）や *Barcharis*（キク科）の種類の多いことなどはそれで、一方では堂カンポス・ド・ジオルドンとは異って気候の暖い証拠には、ヤシの種類が見られ、この付近の原始林中に多数のパリミット *Palmito*—*Euterpe*—*Edule Martius* が見られる。



クワズレマ

アピアイーの付近には尚広く原始林が見られて多くの研究材料

が蔵されているが、ラン科やアナス科の着生植物の多いことは湿度のかなり高いことを示しているし、殊にアナス科のバルバ・デ・ヴェーリヨ *Barbadevelho* と呼ばれる草は地衣のようなかつこうで大木の枝に無数に垂下しているが、これはサンパウロ州の奥地にては殆ど見られない光景である。この植物は北米のフロリダ辺から南米全土に分布しており、その国々で種々の名称で呼ばれているが、その外観は一見これがアバカシー *Abacaxi* と同じ科のものかと疑われる程に、この科のものではとび離れている。ランの栽培には、時にミズゴゲの代用として使用して又妙なものである。

ランの種類には樹上着生のものと同時に、岩生 *Rupicola* のものが見られる。赤い花つける。

Epidendrum ellipticum は元来地生であるが、ここではよく岩の上に見られるし、その他 *Miltoria*, *Zygopetalum*, *Pleuronthallis*, *Bijrenaria* の諸属のものが見られるが、花期ではないので美しい花は見られなかった。

二、フルナスの鉛山に至り、道なき道を進むこと。

二十五日、晴天

未明に起きて用意を整え、寝静まった町を後に出発する。町全体を被いかくすように朝霧がこめている。イポランガ

I p o r a n g a 行きの道路を、小川に沿って進む。小一時間歩いてから溪流の畔で休み、冷い清水で顔を洗う。ふと見ると、川べりに若々しいアグリオンが一面に茂っている。噛んでみると、強烈な辛味が鼻にツーンと来る。一度に目がさめるようだった。欲を出して、朝食の用意にうんと採集して胴乱に入れる。

荷物は一人当たり二十斤を超えているので、なかなか重い。昨夜の予定では五斤ずつ歩いて休止することだったが、歩いてみて無理なことがわかった。「まだ、肩ならしきー」と自ら慰めて、二斤毎に小休止することに決する。依然として雲霧がはしり、ちよつと晴れそうにもない。路傍には到るところに岩肌が露出し、興味深い断層がみられ、いよいよ鉦山地帯に入るの感がある。道路は手入れが行届いて思ったよりもいい道だ。大理石を搬出する為に、毎日一台のトラックが往復するという。四斤ほどいったところに官有の鉛の精錬所があるが、今は休んでいる。

パラナ松が岡の上に林をなして、実にいい風景のところだ。

更に二斤ほど歩いて路傍で休んでいると、一日に一台往復するというその一台のトラックが我々の傍でとまり、親切に勧めてくれるのでフルナスの鉛山まで便乗することにした。

山の起伏はいよいよはげしくなり、急斜面の横っ腹に岩石を崩して開けられた道は曲り曲って上って行き、下方に視線をやると谷が深いから、森林が雑草か何かのように平たく見える。我々は既にパラナヒアカーバ P a r a n a p i a c a b a 山脈越えの険路にさしかかっているのだ。誰がかぞえたかは知らぬがこの山

を越えてしまうのに道は四百余りの曲りがあるというから、およそその難路が想像されよう。殆ど頂上へ上りつめるところで、俄かに視界が展け重畳たる連山を眼下にする。東方海岸の方角に向かつては、果てしもなく山なみがつづきその峯をかすめて悠々と雲霧が去来する。その壮大な眺望は、此所につけられたボーア・ヴィスタBoa Vistaの如き平凡な言葉を以てしては到底言いつくすことができない。

山頂からひたくだりにくだって行くと、深い山峡にフルナスの鉛山Minade Furnasがある。鉛山へ通じる道の岐れめでトラックを降り、息もつかずにリュックを背負って鉛山に向かう。周囲の森林は静まり返っている。半籽もいくと家が五、六軒あって、案内を乞うと痩せた小犬と殆ど真っ裸の半黒の小僧が出て来たが、子供は驚いて家に駆けこんだ。それと入れちがいに白髪の老人が出てきた。鉱山は今休業しているので、留守番のカボクロなのだ。老人といっても逞しい肉づきをした長身の男で、ただカボクロのタイプによくあるように下腹が垂下するように出っ張っている。顔は柔和で、それに話してみるとおどろくほどやさしい声を出す人なっこい男だ。サルバドル・エンリーケSarvador Henriqueという。

何しろフルナスの鉛山が開かれた二十四年前、最初の人夫として入ってから今日までこの鉱山で暮らし、その間調査に来た技師たちの案内役をつとめた男だから、学術調査のことはそこの町の人よりもよっぽど呑みこみが早く、我々の意図も終りまで聞か

ずに了解した風であつた。鍾乳洞のことも詳しく、特に洞中にいる珍しい盲魚 *Peixe Cego*, *Typhlobagrus* を米国からの注文で採集して行つたことなども知っていた。招じられるままに家の中に入ると、部屋中に玉蜀黍の皮が散らかり片隅には荒削りのメーザがあるが、甘藷やマンヂオカがごろごろと積んであつて腰をかける場所もない。この玉蜀黍の皮は、夜寝る時に藁蒲団の

代りであることが後でわかつた。まだ若い大柄のムラータの妻女がカフェーを淹れてくれたが、砂糖代りにラパヅーラ *Rapadura* を使っているから色がどす黒くて臭気がぷつと走る。これから先はどこでもこれを飲まされるかと思うと、いささか辟易した。

午後、サルバドールを伴つて、周囲の高地を歩き坑口に至る。鉛と亜鉛の鉱石が山積みしたまま打ち棄ててある。

我々にはわからないがカロージェラス *Calogeras* によると、ここの鉛鉱は鉛含有率七〇%、銀四%の高品位鉱であるという。同じく *Sociedade Mineracao Furnas* は付近にも多くの金の鉱脈を所有しているが、特にベタリー河 *Rio Betari* に沿つての鉱脈は、一トンあたり四〇六グラムの含有だという。

それから森の中の細道を辿つて山奥の住家に向かう。道というも名ばかり、せまい上に草はのび放題で泥んこである。一体この

辺の住民は徑を何だと心得ているのか、道の手入れということをしていない。ほとんど牛馬を持たず、従って荷車というものを有たないから、結局道といえばカボークロが素足でびよんぴよんと歩くだけの巾で、初めてこれを見た人は野放しの豚の散歩道くらいにしか思えまい。しかし、住家が近くなると、道のところだけに丸太を組み合したポルテイラらしいものがあって、それは人間や豚が通るのに一向さしつかえないが、唯プリミチーヴな所有権の意志表示をしている。

しばらく行くと倒れかかった茅屋が見える。ジョアキン・ボルジェス Joaquim Borges の家だ。みると家族総がかきで手製のあやしげな道具を使って甘庶汁 Garapa をしぼっているところだ。かつて名僧アンシエータが土人に種々の器具を考案してやったところが、その器具のいくつかは四百年を経た今日でもカボークロの間に伝わっているという話があるが、これもその一つではあるまいかと思える程のしろ物で、丸太をシポーで縛り汁の滴り落ちるところにはブリキ罐の一片があてがってあるが、それがもう錆びて穴だらけになっているので、その下には更に剥げつちよろの瀬戸びきの皿が置いてある。いっそブリキを取り去って皿だけにすればよさそうなものだがそれをしないところにカボークロの心理的なコンプレクスがあるのだろう。我々は、何回もお代りをして御馳走にあずかった。

屋根にはどうやら茅がのっかっているが、壁土は殆ど落ちつくして網代のみが残し、家の中はまる見えだ。内部は二つに仕切っ

て、一方が寝間他方が台所になっており、寝間の方には土間に玉蜀黍の皮が敷いてあり、台所の道具といえはシポーで編んだかごとか素焼きの土器のたぐいである。



ジョアキンは此のへんとしては珍しい赤の毛髪に白い皮膚、短頭、中身で、イベリアの北部か中欧人の血を思わせるが、ひよつとしたら何百年か前に海岸地方に定着したオランダ人の落し子の子孫に再びそのゲンが結合してこんな型の人間を生んだのではないかと、独りで勝手に想像したが、もちろん本人は一向そんなことは知ろう筈もない。

細君は直毛の黒髪に小麦色の皮膚、その骨格は明らかに土人との混血を思わせる。子共は十六、七の小娘をかしらに七人いる。

かつて河合さんがこの地方の地質調査に歩いた頃、一夜カボークロの家に泊めてもらい夜半にふと目をさますと、顔に何か霧らしきものが降りかかるので、はて雨洩りがするのかと天井を見上げたが、屋根の穴から星が見えるので雨の降る筈もなし、おかしいと思っていたら、家の主人が屋外に出て壁にむかってやったところ壁土がないから、網代を通って土間に寝ていた河合さんの顔にその飛沫が来た、という話があるが、此の家などはさしずめそんな手合いであろう。

付近の森林で採集をしてから、サルバドールの家に引き返す。落日霧は晴れない。夕食は皿や鍋などを我々の方から出して、サルバドールの妻女にととのえてもらう。豚の塩漬け肉がある。畜牛は居らぬからこの辺では牛肉が食えない。裏の小川には雑草のようにアグリオンが茂っているのだが住民はそれを食おうとしない。きくと「ああ、あれかね。あれア旦那、いい肝臓の薬でさあ」飯がすんでから老人と世間話をする。齢は六九才だというが、まだ乳呑児がいる。

「儂あ、妻を三度ももらいましたかね、みな正式の嫁だから、女も幸せなんで、子供は死んだのを入れると二十六人となりますが、生き残ったのは十人です。何あに、独りで育って行くから世話ありませんさ」

長子は四十五才で、末子は三か月だという。代々イポランガ土着の家すじなのだ。

アピアイーからイポランガに至る四十軒に余る山道は、パラナピアカーバ山脈を横断するけわしい道路であるが、元来その地質はデヴォン紀以前に属しており、四億年を超える地質年齢を有し、それは中央エウロッパやヒマラヤ山系アルプス山脈のできる以前であつて、その岩石は砂岩、石英岩、緑泥岩に石灰岩を加え、その中に含まれる鉱物はその数多く従つてサンパウロ州南部にては、岩石鉱物学者にとって最も豊富な材料を提供してくれる得難い場所である。

その地形はフルナス鉱山より数キロ、アピアイーに寄つた所で最も雄大な風景を呈しているが、即ちボーア・ヴィスタといつて、この街道中最も峻険な地で重畳とした山の頂は常に雲をいただき、谷は山の背にそつて覗いて見ても遙かに遠く、遂には森林に被われてうかがうことすらもできないで、底知れぬ谷底という感を抱かせる。フルナスの名がよくそれを表わふている。

大半がまだ原始林のまま残されておつて、植物もよく此のフルナスにては繁茂しておりその地質学上の複雑さと共に、必ず新しい知識を提供してくれる場所であり、未来の若い学徒のよき研究場所である。

樹木の主なものには、カネーラ、セードロ、イングイア、サツサfras、グアタングー、ペローバ、アレクリン、クワレズマ、カブシンギー、カビウーナ、アラルーバ、ヴァソウラの類があり、パルミットもその中に群生している。

この中で、特別の風景を形造るものには、インバウーバ Im

b a u b a がある。その大きい葉は、天狗のウチワを想わせるような特殊な形で白い真直ぐな幹と共に、遠方からでもよく見分けがつく。この木は有名な蟻植物の一種であつて、マルチウスのブラジル旅行記にも、もつとそれ以前にエケロッパから来た学者のものにも、特に注意せられた植物の一つであるが、これを蟻植物として初めて詳細な研究をしたのは十九世紀後半、約四〇年にわたつてサンタ・カタリーナ州に生涯を終えたドイツ人の有名な博物学者フリッツ・ミューラーであつて、此の植物の葉柄にはその基部外面にミューラー氏小体と名づけられている白色肉塊状のものが付着しているが、これは蟻の食物に供せられるものであつて、アズテツカ *A z t e c a s* 属の蟻がこの空洞の幹の中に棲んでいる。日本ではこれをアリノスノキと称しているが、クワ科に属し花は円筒状の十五纏に達する穂状をなし、他のクワ科の植物とは著しく趣を異にしているので、むしろコセウ科のものを思わせる。この花穂は灰色をしていて、そのまま果実となり、熟するとイチヂク（クワ科）に似た甘味があり、美味である。このアリノスノキには、芽が赤いものと白いものとがあり、白いものは瘦地に、赤いものは肥えた土地に生ずると言われている。

この辺には、コセウ科の植物も亦多い。この科のものには灌木と草状のものがあり、草状のものでも、アナナス科の如く大木に着生しているものもあり、原始林中の岩上に生えているものもある。

コセウ科は、アリノスノキの属するクワ科と共に種子植物では

原始的な科であって、地球上に出現したのも古い訳である。その他過去に繁茂した歴史を語るシダ類も甚だよく茂って、原始林の下草をなしているが、木生シダ、俗にシャシンXaximと呼ばれてラン栽培の鉢に用いられる種類も多く見られるが、これは石炭紀以来栄えた植物だから三億年を超える生命の息吹きを見るわけである。

草にはベゴニアBegoniaの種類が多いし、カヤツリグサ科の萱状のものも下草として茂り、テンナンショウ科のものは蔓状を呈して大木にはい上っている。サルバドルという案内の老人に聞いたら、それをこの辺ではJoao Henriqueというのだそうだ。

清流の右べには自生のアグリオンAgriaが、素晴らしい群落をなしているが、丁度伊豆の天城山麓のワサビ（アグリオンと同じ十字花科）の清流に生えているのを思い出させた。食べてみると辛味の強い野生らしい味がする。日本でミズタネツケバナと称しているものと同一種である。

この外に分布上面白いと思ったのは、カンポス・ド・ジヨルドンの高原に見るBaccharis Crisolada DC, Chujuiragua Regnellii Bainesの在ったことで、共にキク科に属するか、前者はヴァツソウラと俗称するものの一種で小灌木で、後者は刺のある小灌木である。

着生植物はアピアイー以来、殊に多いが、フルナス鉛山一帯にもよく見られる。ラン科、アナナス科、コセウ科、オホイハキリ

サウ科、テンナンショウ科、ツクサ科に属するものが主であるが、ラン科の種類にはRodriguesia—Pleurot
hallis, Octomeria, Capanemia, W
arszewiczella, ……、の諸属に入るものを見た。

三、鐘乳洞を見、ベタリー河上流を進むこと

二十六日。晴天なれど霧深し。

早朝、サルバドルを案内として、イポランガへの本道を進む。フルナスにもう一日滞在したい気持ちもあったが、先を急ぐのでそうもいかぬ。昨夜は土間に寝たせいか、背中が痛い。夜半、橋本君が腹痛を起こしたので心配したが、朝は痛みも薄らいだ様子なので安心する。老人にも少し荷を担いでもらったから少しは軽くなった筈だが、昨日からの肩の痛みで重さは同じくらいに感じられる。

道は昨日ほど険しくはないが、矢張り崖の中腹をうがって開けられ、曲りつつ稍上ってから下り坂になる。下りつめたところが、谷間の盆地になっていて、セーラSerraという七、八軒の小部落がある。フルナスから九軒ぐらいだ。

ゴンサーロGoncaloという人の家に荷をおろし、朝食をとる。

橋本君は食慾不振で大分疲れていたが、住民から蜜柑を分けてもらい、それを食べてからやや元気づいた。そしてサルバドル

をそこから帰し、代りにジョアンという半黒の案内人をやとい、軽装して近くの鍾乳洞調査に行く。左は三人して書いたその記録である。

『セーラの鍾乳洞』 Grute da Serra

「アピアイー、イポランガ道路のサンパウロ市より三五一軒にあたる地点より約一軒北方、森林でおおわれた山岳の中腹に位置する。洞の入口は南々西に向き、入口の巾約八米高さ三米位で、左右に行くに従って漸次低まる。

入るに従い四五度の傾斜を以って下降する広間があり、向かつて右方は巾二米、奥行二〇米の平坦な部分となる。

左方は次第に高まり、その斜面に特殊な植物、苔類の一種 *Asplenium* 属の一種、矮小な *Begonia* の一種、*piperr* 属の二種を見る。斜面の最も奥まつたところにやや平らな一米四方位の部分があり、そこにカラムージョ *Caramujo* 大小三種類、カラコール *Caracol* 一種と共に、獣類の骨片とおぼしきもの三個を見出す。この部分をフォイセにて掘りたるも別に珍稀なものは見られず。

広間は白色乳頭状の鍾乳石 *Stalactite* の壁である。広間の中央からは巨大な鍾乳石が垂下するを見る。広間は進むに従って狭ばまり、入口より一五米のところで左方より岩が突出する。その奥は益々狭く光線が非常に不足し、既に植物を見ず。尚、

広間の入口の向かつて左側、約五分二のところに空に抜けたる穴あり、広間のつきるところ二つの隘路あり。右側は中狭くして到底人は通られぬが、左側はやや広くして巾六〇糎、高さ二米位にして、入るに位って窟状の室をなす。窩状の室の出口は再び狭ばまり、そこを抜けて左方にひろがった広間に出る。

この部屋も乳頭状の鍾乳石が壁面全部を覆う。地面は湿潤にして諸所に水溜りあり、石筍 *Satallagmite* 及び石柱を見ず。更に地上を検したるも、そこには何ら動物及び人類の棲息せる痕跡を認めず。

入口の向かつて左側に細い蜘蛛の糸が無数に下がり、此の糸の下方には微小な露が珠数状に付着し、その水滴の中に長さ三糎、褐色、糸状のカウガヒ蛭の一種が多く棲息するを見る。このカウガヒ蛭は、中央に白色透明な條を有し、又横にも半耗位の間隔にて透明なる模機を有す。

鍾乳洞の入口正面は垂直の壁をなし、その高さ約五米にして *Cardamomo* の一種が橙々色の可憐な花をつけており、 *Begonia* の種類三種、 *Araceae* 一種、 *peperomia* 三種、その他小灌木が着生せるを見る。更にこの洞窟付近を見るに、此の外には石灰岩質特有とおぼしきものは見られず」

イポランガからシリリカ一帯にかけて判明している鍾乳洞は六〇を超えるというが、大小区々で、タパージェン、*Tapagem* (シリリカ郡) モンジョリンニヨ *Monjolinho* (イポ

ランガ郡）等は中でも大きくて有名であるが、今後詳細に調査すれば面白いことが判明すると思う。

鍾乳洞付近の植物はその草本に特に興味を惹かれる、というのは、草状のものは石灰岩上に着生する所謂岩生であるが、樹木は多く腐葉土ができてから発生したものであるからである。しかし、石灰岩も森林におおわれている場所では、他の場所と大体においてその植物に差はなく、むしろ、種類は少ないが洞窟の入口に生ずる蘚苔やコセウ科ベゴニア科等の草本で特に日光を余り必要とせぬもの、即ち陰光植物に興味の中心が移るわけである。特に、洞窟の中に水溜りでもあれば、ヒカリモ（光藻）の発生が予想されるが、我々の調査した鍾乳洞には水溜りもなかったのでその発生を知ることはできなかった。

植物が日光に対して敏感な如く動物も光りに対しては実に鋭敏で、時に著しい適応作用を呈するものであるが、その一例が洞窟の中に棲む魚類である。

イポランガ付近の鍾乳洞には、その洞窟の底に小川が流れているところがあつて、その中に眼の極端に退化した魚類の見出されることがある。その始めて見出されたのはイポランガのアレイアスの洞窟 *Caverna das Areias* 中に棲んでいるものであるが、その学名は、*Typhlobagrus Krontei Ribeiro* と名づけられている。一九世紀から今世紀にかけて、リベイラ流域で人類、考古学、洞窟学の研究をしていた有名なりカルド・クローネ氏 *Ricardo Kronte* の発

見を記念して、リオの国立博物館の魚類学者アリピオ・デ・ミランダ・リベイロ氏が研究、命名し同博物館のボレツチンに発表になっているが、この魚はその外形バーグレに似て、同じ科に属し長さは数センチを出ない。俗にバーグレ・セギンニヨ B a g r e C e g u i n h o と称している。

クルーク氏によれば、「この魚は初め、イポランガの教師デシオ Decio 氏が採り、それをクローネ氏の手を経てクルーク氏に送ったのを、クローネ氏が途中リオのアリピオ氏に送致したものである」と言っているが、這般の事情は兎も角として、カレイやヒラメの目が片側に移っているとないように、魚類の仲間にはこうして光に対して極端な適応を遂げるもののあることは興味深いことである。尚、この小魚はその後ミナス・ジェライス州のリオ・ダス・ヴェーリヤス Rio das Velhas にも見出された。

洞窟から帰ったのが、午後三時過ぎだったが、無理をした故か、橋本君の調子がすぐれず、頑張り屋だから弱音こそ吐かね、傍で見えてきついのはそれとわかる。アメーバかも知れぬと、用意のエメチンを打って一休みする。案内人のジョアンや主人のゴンサーロと雑談を交す。ゴンサーロは四〇才ぐらいの壮年だが、顔色は蒼白くからだは痩せ細っていて、見るからに病身の男だ。何にでも文句のある神経質とみえて、会話中も落ちつきがない。可憐な七つ八つの子供らに毀れた壁のつくろいをやらせていて、会

話中の時折り、そそくさと起って窓から首を出しては、

「この餓鬼め、さっさと仕事をしろ」

と怒鳴りつけては席にかえる。

「まあ、童（わっぱ）のことだから余り怒鳴っても仕ようあるめえ」

と、傍からジョアンがなだめると

「いや、子供ってものは、躰けが大事でさあね」

と我々の方を見て愛想笑いをする。話がたまたま病氣のことに移ると、

「儂あね、旦那方、どんな因果か知らねえが、とんでもねえ持病がありやしてね」

と、両掌で自分の咽喉笛を押えるようにして、

「食事時には、ここんとこに腹の虫が上って来て、飯を食わさねえですよ」

と悲痛な声を絞って言う。恐らくひどい十二指腸虫にでもやられているのであろう。

家の主人は泊って行けと親切にすすめたが、行く先に水さえあれば野宿できるからと案内人をかえし、三人で荷をかついで出発したのがもう四時ごろのことで、陽はぐつと傾いている。部落を外れると、この盆地の出口をふさぐように左右から険しい山岳が迫って来て、道は崖づたいにうねっている。切り割ったような深い谷を覗けば、遙か下方を飛沫をあげて急流が奔っている。ベタリー河だ。急流を挟んで、谷の両側に磊々と露出した白雲石D。

l o m i t e は、美白な肌もあらわに、岩を噛んで奔る水や、鬱蒼とした森林と対照して眼にしみるように感じる。

景色はいいが、しかし、とんだところにさしかかったと思った。もう五時だというのに行けども行けども崖と谷で、天幕を張るような平地はおろか溪流の水を汲みに行けそうな場所すらない。肩の痛さも忘れ油汗をたらして行くうちに、山間から道をよぎってせせらぎが流れその畔はやや平地になって枯草がある。ホツとして荷をおろし、各自仕事を分担して大急ぎで天幕を張る。薪を集めて火を焚きつける。米をとぐ、パルミットを伐る。夕食の時は、もうとつぷり暮れて暗闇であつた。然し、橋本君が元気を恢復して食欲を出したのは、何よりの御馳走であつた。

少し余談になるが、此の旅行中、宿屋では三人同じ部屋に寝、天幕では共に仕事を分担して終始苦樂を共にしたというものの、自分と増田君とは不精者だから、班長とか何とかうまい敬称を橋本君に奉って面倒臭い仕事を押しつけ、結局橋本君が、黙々として最も活動したことを茲に特記して、後めたい申し訳とする。

寝につくと夜気は冷々として迫り、まっ白な夜霧につつまれた下方の溪流は海鳴りのようなひびきを立てて流れている。

二十七日、晴

枯わらびを厚く敷いたら丁度藁蒲団のように寝心地がよくて、昨夜は初めて熟睡した。早朝に起きて下の溪流で顔を洗う。急流の底の石ころが一つ一つ見える。鱗を閃めかしてランバリーの走

るのが目につく。川巾は二十米ぐらいだが、早瀬や小さな滝の連続で橋本君は木曾の上流にそっくりだという。この澄みに澄んだベタリー河は金の多いことで有名なのだが、この仙境の岩を掘りおこし砂をさらって黄金をあさるかと思うと、人間の悲哀を感じないでもない。

先で面倒臭くないように、朝食をすましてから荷をかつぐ。少なくとも毎日食って行く食糧の重さだけは軽くなる筈だが、それだけ肩の痛さが増すから、重いことは何時までたっても同じことだ。増田君は大いに頑張つて、リュックと天天幕と絵具箱をかつぐ。フォイセの柄を利用して天にし、「赤蛙売りにそっくりだろう」と自慢して、蛮声を張りあげ赤蛙売りの唄をどなりながら先頭に立つがあまり粹な姿でもなかった。

三軒ばかり行くと山を出外れて平地になり、今にも倒れそうな情ない茅葺きの家が四、五軒散在し、中に一軒だけ瓦屋根がある。道路管理人の家だそうで、ここに荷をおろして一休みする。ここを *P a s s a g e m d e m e i o* という。ここからイポランガまで九軒ほどだが、どうしても今日のうちに歩かねばならない。こここの小川辺にもアグリオンが密生している。肝臓の薬には多過ぎて採りきれないであろう。

土地は肥沃らしく樹木も雑草も勢よく伸びているが、畑というものがない。此の地方を歩いて気のつくことは、人家の周囲は多く沖積土の低地であるにもかかわらず、人間の営為を示す畑がないということだ。見上げると険しい山岳の中腹を伐って、畑らし

いものが点在する。セーラの部落でも矢張り同様だったので、我々は初め不審に堪えなかったが、判ってみれば雑作もない話なのである。カボークロに言わせると、家畜がいるから家の周囲は物ができぬという。家畜って牛や馬がいるのかと問えば、それには牧場として面積が足らぬと答える。家畜というのは庭の樹蔭に遊んでいる二、三頭の山羊と鶏のことなのである。それでは家畜を囲えばいいだろうと言うと、隣りの豚が来て畑を荒すから駄目だと頭を振る。たかが四、五軒の住民が協力して山羊をつなぐことをせずに、険しい岩石の道をよじって、見上げるような山岳の上に物を植えるから、畑に行くのが自然臆劫になって、種子を蒔く時と収穫の時と二回だけ畑に行くということが習慣になる。親切気を出して、こうしたらどうです、と言えば、「いや祖父の時代から、こうしているのだから」と答えるにちがいない。全く牛馬を針金で囲った牧場に放ち、豚を柵で囲う話はなかなか信用されない。

真昼の日のひた照る道を行くことしばしでベタリー河を渡り、今度は川の左岸に沿って道が進んでいる。ここらはもう標高もよほど低いのであろうか、仲々暑さがひどく、リュックを背負う背中では汗でぐっしよりだ。道の両側の断層も今までとちがって礫土となる。道がベタリーの流れから離れるに従って上り坂になり、約一軒上ったところで大きく山の中腹を迂回するが、その時展望とみに展け、眼下に白く光ったりベイラ Ribeira の清流を見る。途が下方を見渡すと、イポランガの教会の尖塔らしきもの

が見え、煙　があがっているのが目につく。

四、イポランガの町で優雅な滞在をすること

四時過ぎ、イポランガに着く。この古風な町は、リベイラの流
れに臨んだなだらかな斜面の上に立っている。道路からおりてい
くと、ゴヂックを思わせる古めかしい寺院が中央の広場にそびえ、
これを囲んで小さな横町が四方に走ってゴミゴミと家が並んでい
る。殆ど平家で二階建ては二軒しかない。この広場の横町にある
ドーナ・セシリア D o n a C e c i l i a の宿屋に落ち着く。

一八五二年から五四年、つまりざっと百年前に、この地方の地
質を調査したドイツ人の技師ラッソ K a r l R a t h は当時の
イポランガについて、「この町はおよそ百軒ばかりの人家と寺院が
一つと留置場が一つある。目ぼしい通りは一つあるのみで、あと
は人家が散在しているに過ぎない」と印象を記しているが、これ
は今でも殆どそのまま当てはまるようである。只百年前とちがっ
ていることは、町に住人のない空家が殖えている位のものである
う。

宿屋のあるじは七〇才のお婆さんだが、齢に以合わず物腰がは
きはきと活発で、黒人の女中と孫の小娘を指図して忽ち珈琲を淹
れ、夕飯は五時半だからと我々に言い渡した。

この宿もラッソの言う一世紀前の百軒のうちの二軒なのだから、
古びた床板が鳴り屋根がゆがんでいるのは当然のことだが、部屋

の掃除が行き届いているので気持ちがいい。

アピアイーでこりたから、今度は手回しよく挨拶回りをすべく、先ず寺院の下手にある郡役所へ行く。

平家の小さな家で、戸口に告示めいた多くの貼り紙があるから、初めてでもそれとわかる。案内を乞うと中肉中背の四十格好の人が気さくに出て来た。郡長とお話したいというと、「私が郡長です」という。見たが外には誰もいない。「書記は、今日は壁塗りをやっています。ここは何でも兼職ですから……」と気楽そうに笑うとても親切な人で、我々の意図をよく了解してくれ「郡の地図もあります。外に寺院や町の歴史についていくらかの文書もありますから、明日でもこの事務所を使つて調べたら如何ですか」と言ってくれた。もらつた名刺には、Benjanin de Sentos Lisboaとある。雑談ののち辞して、警察署長の私宅へ回る。役人といつても、何れも土着の旧家の出身なのだから、非常に親切で、かえつてこちらが恐縮するようなことが多い。

ゆるやかに音もなく流れるリベイラの河畔を散歩しながら宿に帰る。上にも下にも早瀬があるのだが、町の下だけは川面も静かに流れがゆるい。家々のつくりは丁度イタペセリカ ItapeERICAと同様に、厚いひさしが六十糎ほどもぐつと突き出ている。どの家も壁は厚いタイパTaipa でつくられ、教会の如きはタイパの厚さが約六十糎もある。

街路に並ぶ家並みは別々に作ったものなのだが、同じ恰好の屋根

同じ作りの家がくつつきあつて見たところ長屋のようになり、多年の風雨と共に、或はたるみ、或は突き出て横から見ると山なみのような波状形を呈している。街路は両側の軒下に当たるところ、約四十糎ぐらい高く積んだ切石の歩道があり、中央は地面になっている。モウリスク、Mouriscaの窓が全く見られないことは、此の町をつくったポルトガル人のエスノグラフイーを知る上にいくらか役に立とう。唯、カーザ・グランデ風の二階建てが一軒あり、これは写真にとつた。また主な町角には一世紀前の巴里の絵にあるようなガス燈が立ち、夕方には、お爺さんが点火してまわるのだが、光りが弱いので馴れない者は懷中電灯でも持たぬと歩けないし、それに住民は早寝の習慣で九時ごろには街路もひっそりして了い間もなくガス灯を消して歩く。

二十八日

午前中に、町の横を流れるイポランガ川 Ribeirão Iporanga に行つてみる。途中で住民に行きあうと必ず丁寧に挨拶をされ、念の入つたのは、「アテ・ア・ヴォルタ」といつて握手して行く。実に流儀ばつたものだ。それに、一度道ですれちがうと、相手は決して忘れずにいてその次、またどこかで顔を合わすこともあれば旧知のような親しい物言いだ。こんなことが何回もあつて、思い出せずに面喰つた。然し驚くほど皆親切であり、道を尋ねてカボクロの家にでも寄ろうものなら無理にでも家に招じ入れて、ラパヅーラの珈琲を飲まされる。物を盗まれるという

心配はない。

午後、増田君は朝から引き続いてせつせと画描きに忙しいので、橋本君と連れだつて郡役所に行き、地図や文書をコピーした。終つてから郡長と四方山話を交わす。書記は今日も左官で働いているので、役所の中は人気もなく傾いた陽光がさしこんでうらかな小春だ。

「イポランガ郡は面積も広く、農耕に適した土地も多いのですが、殆ど未開発の状態で、イニシアチーブに乏しいカボクロの手に委ねられていますから、農業に堪能な外国人の家族にでも移住して開発してもらつたら、大いに発展すると思うんですがね」

そして、

「日本人によるレジストロRegistro方面の発展は羨望に堪えない」

とも言った。

郡長の嘆くのも無理はなく、一九四〇年の調査では、郡の人口僅かに七九一九人、キロ平方当り四人という稀薄さで、住民は小規模にトウモロコシ、米、サトウキビ等を栽培し、家畜としては豚が多いがそれもたかだか自給の程度を出ず、郡の外に移出される産物といえば少量のラパヅーラとラパツーラを蜜柑の皮と煮てつくつた菓子Rapadura de Cidra位のもので、全くお話にならない。今から六年前にアピアイーとイポランガをつなぐ州道が完成してからサンパウロ市へは三六三軒の良道で連絡できる訳だけど、州政府が巨費を投じて崖を崩し岩石を穿つてつ

くった道路は毎日を平均すれば一台のトラックすら通らず、第一此の町には一台の自動車もなく、自動車があつたところでサンパウロへ搬出するような産物がない。リベイラ上流の開発はまず道路から、という至極節の通った考え方から坦々たる自動車道路をつくつて与えたのだろうが、この辺の住民は依然として荷を担がせた馬を曳いて此の大通を悠々と往復している。

又、この辺の住民が籾を収穫するのに小刀でチョンチョンと穂先を切つてはそれを器用に片手の指の間に挟み、五本の指で持ち切れなくなると一か所に集め、又チョンチョンと指の間にはさんで行く、という原始的な収穫法は以前河合さんから聞いてまさかと思つていた位だったが、部長に尋ねたら、あるどころじゃなくてまだ全部がそれだそうだ。

今年などは喧嘩腰で住民にやかましく言つて「何故日本人のように鎌でやらぬか」とすすめたら「鎌がない」「鎌を買ったらよかるう」「いや、鎌があつても、籾を入れる袋がない」結局「頭がない」とは言わなかったらしいが、袋がないのでみんな小刀でチョンチョンと刈つた。しかし馴れた器用さはえらいもので、一日に一人で籾一俵を収穫するという。穫つた籾は精米所がないから、ピロンP i l a oでつく。宿屋で我々が食う米もこのピロンでコトリコトリと搗いたものである。ある国の婦人は洗濯をして一生を終わると言われるくらい年中洗濯ばかりしていて、それでいつも汚れた着物を着ている、という話だが、このカボークロの婦人も亦、三度々々気長にコトリコトリと米を搗き、珈琲の粒をえら

びフェイジョンの混り物を選び出して一生を終わるが、それでいて貧しいものを食わねばならない。精米所の一つぐらい建つてもよさそうだが、住民の話ではそれを建てるような資本家がないという。昨年、俗にシーコ・アレモンで通っているオウストリア人が、自分の穫った七十俵の粃を売りたいと、買い手を探したけど、結局それだけの現金の融通の利く商人がいなくて仕方なしに要りもせぬ程多い塩や石油やその他の生活用品と交換したと話していた。

現金で物資の流通が不活発だから、郡役所の収入も少ない。一年の予算三十五コントで、これじゃ町の掃除もろくに出来ないとかぼしていた。尚この町には医者はおるか薬局もない。大抵の病気は薬草ですますから多くは薬も要らぬようになっていくという。医薬品はカノアなら八十軒をへだてた下流のシリリカXiririca続路ならば四十余軒をへだてたアピアイーまで行かねばならぬから、何れにしても急場の間に合わない。

四時過ぎから郡長に案内されて、「イポランガの父」といわれる九十才の古老ペードロ・ダ・シルヴァ翁Pedro de Silv Pereira Jr.を訪れる。町を見おろした岡の上に果樹を植え込んだ広大な邸を構え、町の創設者という家門の旧さを示して土地の素封家といったような感じである。

博物館に陳列してある旧式家具が、ここではザラに見られる。いかつい鉄具をはめた日本のひつともいふべきアルカや肘かけやもたれのところを大きな鉄のびようで飾った椅子、カデイラ・デ・

エスパルダールなどが広間におかれている。翁も何回か郡長をとめているが、翁の父はイポランガに初めて郡役所ができた一八七四年の初代郡長であつた。さすが九十才の老翁も奴隸や採金の話は詳しく記憶していないが、それでも幼少の頃、翁の父はこの地方の奴隸を買い集めてはカンピーナスまで売りに出かけたそう
だ。

当時既にこのリベイラ一帯の産金は全くすたれていたし、外には奴隸を使うような農業も畜産もなかったであろう。一八五〇年から一八六〇年頃と言えば、サンパウロ州の珈琲栽培がようやく活況を呈し、最初パラíba流域におこつた珈琲栽培膨脹の要求に応じて当時は各地方からの住民の移動が見られたのであつた。そして珈琲地帯の戸口に当たっているカンピーナスが、奴隸売買の中心地であつたことも至極当然なことだ。然し珈琲熱の余波が、ここリベイラの上流までも伝わって、さなくとも人間が少なくて貧乏なこの土地から労力補充に一役買ったという話は、いよいよ食うに困つた両親がその娘を女工に売るといふ話と、どこか一筋似通つたところがある。この地方には奴隸に関する遺物は残っていない。

例の通り宿屋の夕飯には、フエジョンとファリンニャ・デ・ミールヨの外に、リングイサとパルミットがでていた。

この地方に来て全く野菜を食わしてもらえないのは物足りないが、せめてその代用をしてくれるのがこのパルミットである。これは付近の森林に沢山自生していて、宿では一本八十センチターボで

買っているという。

夜に入ると広場では騒々しく花火を鳴らし始めた。明日はサン・ペードロのお祭りだが、その前景気なのであろう。

お祭りを避ける訳でもないが、明日は一食分だけ携帯して、現在のイポランガの前身アライアル、Araialの旧趾を訪ねることに決めた。増田君がこのことを然るべく宿の婆さんに報告すべき役目を負わされた。ドーナ・セシリアは、我々に対する心づかいから特に食事時間を厳守し、時間どきに遅れようものなら、食物が冷めると言ってなかなか喧ましい。今日も午後のお茶時間に帰らなかったら、孫を叱るような調子の文句をくった。お婆さんのやさしい心づかいは分るが、こっちだって飯時に宿にばかり帰っていたのでは仕事にならない。

又風俗からいって、この地方のソロカバやパウリスタ等の新興地帯とちがうところは、職業的な娼家のないことであらう。レジストロは知らないが、このことはイポランガ、シリリカ、イグアペと、リベイラの全流域を通じて同様である。もともと住民の話によれば、稀にそういう傾向の女もあるというが、職業的な娼婦のいないことは確からしい。

これは、結婚前Pre Nupcialの性関係と結婚年齢とに大きな関連を有する一方、又カトリック的伝統と照らしあわせて興味深いことであるが、あいにく僧も居なかったし、時日も足らずでの確には調べられなかった。

五、森に埋った旧蹟をたづねて黄金狂と思われること

二十九日、雨模様

早朝に発つ。アライアールというのは、イポランガ川を約十キロばかり上ったところであつての町の旧蹟がある。

昨夜ひとしきり雨が降つたので、道はいよいよ泥沼みたいになかり、諸所に水溜りができてよく靴がすべる。時折、住民が荷を積んだ馬を曳いて来るのに出会う。道は絶えずイポランガ川の右岸に沿つて雑草の生い茂つた中や雑木林の中を進むが、時々木の間を通してちらちら見える川の流れは、あるいは大きく迂曲しあるいは二つに分れて中に小さな島を挟み、かつて砂金を掘り返した跡を見せている。

四キロほど行くと、路傍に小さなラプゾーラの工場があつて、機械を馬に曳かせながら夫婦で一心に甘庶をしぼっていた。道をたずねがてらまずひと休みと腰をおろす。主人は、この地方としては珍しくエウロッパ人、それもオーストリア人とかでフランス・ネストレーネル Franz Nestlehner をいうのだが、汚れて背中に大穴のあいたメリヤス一枚を着て顔には不精髭を一面に生やしている。金髪青眼で丸い頭をした中欧型特有の彼の体軀は小柄だが元気にみちている。細君はイポランガ土着の家の娘でモレーナだが、混血児の五人の子供のうち三人までは父の金髪をもらつて白い肌をしている。こんな山奥ではげしい環境にもめげずに悠々としてカボークロの生活をしているエウロッパ

人を見ると、ちよつと奇異な感じがする。

今から十三年前にエウロッパから移住して来るや、場所もあるうにいきなりこのイポランガに来てすぐその年に土着の娘をもらったというのだから、なかなか気の早い男だが、それからアピアイーに移つて商買を始め次第に繁昌して数年後には雜貨屋とパン屋とを經營するようになった。

漸く軌道に乗りかかったところへ欧州に戦乱が起き、更にブラジルも参戦することになって、アピアイーでドイツ人のクラブみたいになつていた彼の家には警察の目が光り、スパイの嫌疑で何か月間も收容される憂き目をみた。出獄してみると、貸しは踏み倒され、帳簿は紛失して、殆ど元の素寒貧同様の身となつてしまつた。終戦と共に僅かな残り金を握つてイポランガに舞い戻り、現在のところ荒地を借りて甘蔗を植え、米を作っているのだという。戦時中の苦しみは、我々として経験のあること、話のわかりが早いが、なんと逞しい意志であることか。不可抗とはいえ、戦争の影響で産を失し、祖国の敗戦という精神的打撃を受けながら、「何もかも新規蒔き直していくより、てはありませんや」と笑いながら、モレーナの妻に手伝わせ、乳呑子は姉娘に子守りをさせて、サン・ペードロの祭日という今日も朝からせつせと働いている。而も終戦と共に彼が植えた甘蔗はもう立派に成育して、ラパヅーラがつくれるようになってゐる。

更に同じような雜木林の道を二キロばかりいくと、右方に屋根は破れ壁は落ちたカボークロの一軒家があり、庭先にはサン・

ジョアン祭の名残りを止どめて竿の先に職がはためいている。道を尋ねようと寄ると、薄暗い土間の中にいざりの老人がかがんでいて、我々にはいれと手で招く。

喘息もちでもあろうか咳をしながらしやがれた声で、いろいろとアライアルにまつわる伝説を語るが、聞いてみると人名や年代についてはなかなか明快な話をする。やはりアライアル創設者の子孫で旧い家系が自慢そうであったが、かなり黒人の血を混じえている皮膚の色を見れば、黒人の奴隷女との庶子の血統でもあろうか。通称は、ジョゼー・フェイオだが本名はJ O s e D i a s d e Q u e i r o z 　　というのだと語尾に力を入れて言い足した。

「時に、旦那方は何をしに行きなさる」と改まって訊くから「草や木の種類を調べがてら、その旧蹟を見て昔のことなど知りたいと思ってね」と答えたら「へえ、そうですかい。素頓狂な方もあるもんだ」とニタニタ笑いをして「だけど、それだけじゃありませんまい」と、変に猜疑ぶかい目を光らし、「皆さんご承知だろうが、昔は教会の土間に死人の体を埋めたもんでしたな。いろいろな話がありますよ」と、思わせぶりな言い方だ。「どんな話かね」と、追っかけて訊くと、老人はふつつり口をつぐんで、もういくら積みかけても答えようとしなない。どうも話が死角に落ちたようだ。老人の話をついに、道をたどっていくと、この辺では珍しい白壁の家があつて野放しの豚が鶏とたわむれている。

寄って聞いたが、教会跡の在所はさっぱり要領を得ない。

どうやら教会の跡には何か怪奇な伝説でもあるのか、どのカボクロも尻ごみして案内してくれない。仕方がないからどんどん行くと、西側に桑の並木があったり低地には従横に溝が通じたりして、今こそ雑木や雑草が伸びているけど、かつての人間の営為の跡がはつきり見え、更に進むうちに道が次第に細くなって、森林に入るところに茅屋がある。手を叩くと半黒の男が出て来たから、アライアールの教会跡を知らぬかと訊くと、来過ぎているという。やれやれと情なくなつたが、仕方がないから黙って引き返す。

もと来た道を三キロばかりも引き返し、岡の傾斜や溝の方向を考えて大体の見当をつけ、用意のフォイセをふるってピカードをあけながら雑木林や草叢をあさること実に三時間余り、まだ残っているという教会の石壁はおろか土器の一片にすら出会わない。往時の河床とおぼしき低地には金を掘った溝や大穴が無数にあり、注意を怠るとどすんと落ちこんで這いあがるのが容易ではない。家屋の敷地だったらしく、切石を積んだところもある。太陽の直射と草いきれで、くたくたに疲れ、遂にあきらめて帰路につく。

町の祭りを見に行った帰りでもあろうか、妻子を後ろに連れた住民が、白い袋を肩にかつぎびよんぴよんと跣足で来るのに出会つたが、既に我々がアライアール調査に来たことを知っていて「どうですえ、見つかりましたか」と皮肉でもなく、半ばお世辞みたいに訊く。我々の噂はもう近傍一帯にひろまっているのだろう。それにしても、己が郷土の古蹟をば放置して草の茂るがままに委

せ、わざわざ調べに来る者があれば、「どうですえ、見つかりましたかい」と、他人事のように無関心にきく。これでは腹も立たない。後で郡長に聞いたたら、第一ここらの住民で教会跡を正確に知っている者は一人もないのだそうだ。恐らく彼らの子や孫の代になってから、誰か又調査に来ても、「どうですえ、見つかりましたかい」と無表情に、只ご愛想で繰り返し訊かれることであろう。イポランガの町の由来は、よくわかっていない。僅かばかりあつた教会側の文書も多くは散逸してしまい、頼るべき口碑や説話だつてまちまちである。嘘を伝える説話と、偽りを説く文献とが、その昔を知ろうとする者を欺くことが多い。兎に角、教会の縁起帳とも言うべき *Livro de Tombos* には、アライアルの起源について。

“一七五一年頃のこと、イポランガ川の砂金採集に従事していた住民の中でもおもだった者らが、それ以前から建っていた菅葺きの古いカペーラ *Capela* と同じ場所に、屋根を瓦で葺き、壁をタイパ作りにした、新しいカペーラを建て、祭祀としてサンタ・アンナの聖像を安置し、黄金づくりの光輪と冠を奉納し、これらの品は今日もなお残っている……”と、現在の町の教会が落成した一八一四年の記録に記してある。

アライアル付近の砂金をあさりつくした住民は、漸頃リベira河畔に移って米作りを始め、現在の町の近くに定着していた。初は“米搗き場” *Engenho de Pilar* で白米にしてからカノアに積んでリベiraの急流をくだり、イグアペまで

搬出した。アライアールは割りに平地ではあるが採金の為従横に掘り返した上に岩石が多くて農耕にむかず、かつは、イポランガ川の水深が浅くなってカノアが上らなくなってしまったので、殆どアライアールに住む人間もいなくなった。かくては葬式やミツサの為にわざわざアライアールまで行くことも容易ではなく、カペーラも手入れする住民が近くにいないので、荒れるに任せ、壁も崩れ落ちるといふ有様であつた。と説話は語り伝えている。そこで、一八一四年に、住民は連名で、新しい教会をリベイラ河畔に建つべく、その許可方をサンパウロの司教に願ひ出た。

翌年に司教の許可が下り、一八二一年に至つて、現在のイポランガの教会が開かれた。従つて、教会がアライアールからイポランガに移転したのは、一八二一年ということになるが、説話によると、その時既にアライアールのカペーラは崩れ去つていた。問題は、何時頃イポランガ川のアライアールに部落ができたろうかということだが、これについてクルークは、一七五一年頃という説を立てている。この推定は、多分上記の教会記録に拠つたものと思われるが、しかし、カペーラを建て直したのは一七五五年だとしても、その時既に萱葺きの古いカペーラが建つていたのだ。若しこれが土人の教化を目的とするジェスイットらのカペーラでもあれば、丁度サンパウロに市の起源がそうであるように、住民に先んじてカペーラが建つたわけであるが、ミナス地方でもゴヤス地方でも、鉾山地帯においては、新しく発見された鉾山を目指してどつと住民が移住してから初めて、住民の必要の為にカペー

ラの建つのが普通である。とすれば疑いもなく、砂金で生じたアライアールに於ても、部落ができてから主だった住民の手によって、カペーラの建ったことは当然のことである。この点からみても、クルークの説く一七五一年というのはさして根拠あるものと思えない。

更にリベイラ流域の産金の歴史からいくと、この事は一層明らかになる。リベイラ流域の金が発見されたのは古く一五七〇〜一五八四年の間のことで、Helivelo—Eobenの指揮するバンデイラが此の流域のカリジョー族土人の討伐に向かったのが、金発見の端緒になったことは既に定説がある。そしてイグアペよりパラナグアに至る海岸地帯の産金は一七世紀初葉より広く世に知られ、一六三六年にイタニヤエンItanháenの守護役としてVasco da—Mottaが赴任して以来リベイラ流域の産金は俄かに活況を呈したり、イポランガ川やイヴァプルンドーヴァ川Ivapunduvaの川床は物凄い黄金熱で掘り返され、その絶頂は一六四七〜一六九七年の五十年間であったと考えられる。

尚、ヤングE. G. Yangに依れば、一六三五年頃のイグアペの住民は、通貨として既に砂金を用いていたという。

時代から見ると一七〇〇年頃を境として産金の地帯が交替している。というのは一七〇〇年〜一七二〇年頃に、ゴヤス、ミナス、マツト・グロッソ地方に、続々と素晴らしい産金地帯が発見され、北部からも南部からもブラジル中央高原を目指して住民の大移動

が見られ、ブラジル経済史に一つの大きな時代を画する所謂 C i c l o d e M e n e r a c a o が始まってからリベイラ流域の産金は急激に衰微している。

リベイラの金とミナスの金とは勿論同日の談ではないが、しかし、当時を代表する鉱業という一つの歴史的な軸から見れば此の二つの地帯の産金は一見して非常な懸隔があるように見えながら、実はこの軸を中心として単に地帯の交替が行なわれたに過ぎず、従ってミナスの金が発見されたからリベイラの産金が衰微したという関連がそこに見出されるのである。

この時代的な両地帯の関連は、著名なバンデイランテの足跡をたどってみると、一層明瞭に首肯されるであろう。

こんな固苦しい談義はこの辺で止めるが、要するに真偽取り混ぜた説話の考証は別として歴史的な大きな動きから見ると、アライールの建設もイヴアプルンドウヴァの起源も一七世紀末葉であると思われるが、ここには一つの仮説として掲げておく。

帰り路もなかなかはかどらず、疲れた足をひきずるようにして町にはいった時はもう薄暗かった。サン・ペードロのお祭りなので町は賑やか花火がポンポンと喧ましくひびき、何時になく着飾った娘らがさざめいて寺院の裏の広場ではバイレをやるのだという。我々も招待されたが、何れも武骨者の面々なので敬遠した。酒店にいと、丁度バーラ・ド・ツルボ B a r r a d o T u r u v o に駐在する警兵が来合わせている。ツルボ地方のことは前から

きいていて大いに食指が動いていた折だから一杯のおつき合いで話を聞く。

ツルボというのはリベイラ河の大きな支流パルド河Rio Pardoの流域にある部落なのだが、イポランガ郡の管轄となつていてももう殆どパラナとの州境に接しておりその土地の肥沃なことと住民の原始的なことで有名なところだ。

何しろこの警兵がツルボ地方きつてのPessoa Distritoだと威張つて、「ツルボの住民の生活は、イポランガの町の間人よりも一五〇年以上遅れている」という。どこから、こんな勘定をしたかそれは知らぬが、イポランガの者がそういうのだから凡そ想像がつこう。

パルド河の流域にはジェスイットらの残した遺蹟もあり、土人の共同基地らしいものもあるということをももの本で読んでいるので、できれば行つて見たいと思つていたのだがイポランガから上流は早瀬や滝が多くて、カノアでは遡行できず三十五軒ほどの陸路を馬の背で行くより外術もない訳だけど、往復の日数と向うでの滞在日数を勘定すると残念ながら我々の時日が足りない。

帰宿してノートを整理する。今朝は雨模様で蒸し暑かったが、夕方南風が出て雲を吹き散らし俄かに涼味を加えた。

宿屋の待遇がどうも少し低下したようなので、用意の土産用の雑貨を係の増田君から女中に進呈する。土産係りはもうご免だと増田君は頑強に拒否したが、止められては今後が大変だから拝み倒して留任を乞うた。

イポランガはアピアイーに比べると、ずっと暖い。最高温度を比較すると、二八度のアピアイーに対してイポランガでは、三八度に達している。それに雨量の分布図を見ても、一年を通じてイポランガの方がずっと雨量は多い。緯度からいえばイポランガの方が南に位置しているが、標高が八五〇米以上も異なるから高度による温度の差が、緯度による差よりも著しく強いことがこの二点を比較した場合に見られるのである。

パラナ松の自生は全く見られず、其の他アピアイー付近では見ることの出来た南ブラジルの高原性の植物は殆ど影をひそめて見えず、下方より河辺に沿って分布の連結を見てせいる暖地の植物が著しく数を増している。

風景も今までの山岳重畳という眺めとは違って、一方にリベイラ河を控え周囲の山もずっと低くなっているし、古い町で一時パラグアイ戦争の時など棉作をやったこともあり、原始林らしいものは町の近くでは見られぬようになっていいる。

この付近が暖いことは、アバカシーがよく出来、マモンMa ma a oが立派な成育をとげていることでも領ける。しかし、この町の付近は一見したところ、栽培植物の数が頗る貧弱で筆者のノートに記したところでは果樹一〇種、草花六種、野菜二種、その他の観賞植物五種であるが、野菜といってもトマトも作らずレポリヨも食べない位で、アグリオンは薬草だぐらいに思つて普通は食べようとはしない。町には所々に又マラニョン栗C a s t a n

heirodo MaranhãoやマンガMangueiro
のあることは注目に価する。

リベイラ河辺に出るとクルース・デ・マルタCruz de
Martasツキミソウ科。アモール・セツコAmor Cec
oミソハギ科。カーチンガ・デボーデCattinga de B
odeキク科日本名クワクカウアザミ。スルクイーナCuruc
uinaキク科。

日本名タカサブロウ。カラシチシューCarachuchu 日
本名イヌホオズキ・ナス科。アゼデイーニャAzedinhaカ
タバミ科日本名ムラサキカタバミ。ベルドロエーガ・グランデ、B
eldroega Grande スベリヒユ科、日本名ザクロ
ソウ。エルバ・デ・ラットHervade Ratotウワタ科、
日本名トウワタ。ケブラ・ペードラQubra Pedrataカ
トウダイ科日本名コミカンソウ。その他なお十種に余る草が生え
ていて、カピン・デ・フォーリヤ・ラルガCapimde Fo
lha Largaイネ科、という南ブラジル特産の芝草が、そ
の所々に敷き詰められている。又河辺にはゴヤーバ（日本名バン
ジロウ）の老木が多いし、ウバーUba、（完全にはカンナ・ウ
バー、Cana Uba）イネ科。が河辺を埋めつくしている。

山地の植物は二十九日にアルイアールの旧跡を尋ねて約十軒の
道を往復した時に観察できたが、大木となるものにはFigue
ira Branco, Arariba, Peroba, Sas
safiraz, Canela, Cabrenva, Geduit

i b a, C e d r o, A n g e l i m, G u a p u r u v u, I
m b a u b e i r a, P e u v a, C a r n e d e V a c a
等を見た。又、ヤシには、ジェリヴァJ e r i v aインダイヤ
I n d a i aパルミットP a l m i t oが見られるが、パルミッ
トはここでも主要な食料品で、イポランガの宿屋に泊っている間
殆ど毎日食べさせられた。

又この地帯にはジャボチカーバJ a b o t i c a b e i r a
の原木が所々に見られるし、各の湿原を飾るのは程々花の花をつ
けているモンジョーロM o n j o l oマメ科の灌木で、この花を
つける時には葉は落葉して見られないが、三出複葉で幹には刺を
有する。

この他、河畔の湿地にはリリオ・ド・ブレージョL i r i o d
e B r e j o ショウガ科、日本名ジンジャといって、ミヨウ
ガの葉に酷似して花は純白で強い芳香を放つ草が密生しているが、
これをこのリベイラ流域ではナポレオンN a p o l e a oといっ
ているが、冬には橙紅色の果実をつけそれが裂けてナポレオンの
帽子を思い出させる。この植物はインドの原産と普通いつている
が、現在は河辺に沿って非常に広布しており、筆者はそのインド
原産に非常な疑問を持っている一人である。日本では温室栽培を
し切花としてデパートの地下室の店頭を飾ったものであるが、こ
こでは余りにはびこり過ぎてどうにもなくなっている。

この他、下草にはカエテー・バナナC a e t e B a n a n a
クサ イチゴ、ヘビイチゴ、シダ類、キツネノマゴ科二種、ゴ

マノハグサ一種、カノコソウ、ウニクサ、チゴザサ、ヌスビトハギ等が見られ、月桃（げつとう）という台湾に見られるクズウコン科の三米もあるような大きな草を見出したのは意外であったし、イポランガの町の対岸に行った時にはミモーザの種類でオジギソウ *Dormideira* という同種、非常に敏感な睡眠運動をする大葉の種類をみつけたのは新知見であった。これはオジギソウの如く小さい草ではなく、稍蔓状にはい茎全体に逆刺を有っていて花は紅紫色で美しいが、その葉の運動の敏感なことはオジギソウ以上に良い研究材料であると思う。

イポランガ付近は河辺の植物、即ち暖地の要素の多いものと、一方パラナピアカーバ山脈の南麓として南ブラジル高原の要素とをも尚もついているところが、その山地に入ってみると見られることからして、植物地理学上極めて興味ある地帯にして将来斯学に志す者に残された豊庫であると思う。

三十日、快晴

朝、船着場に降り、カノアを頼んで対岸に渡してもらう。この船着場は大河からちよつと入りこんだ淀みにあって町の住民は大仰にポルトと呼んでいるが、朽ちて沈みかかったカノアが二、三艘岸につないであるだけで何の設備もなく、日中は黒人の洗濯女らがのどかそうに笑いながら洗い物をしている。船頭はもの十才ぐらいの膝小僧をおできだらけにした童（わっぱ）だが、大人の我々でもちよつと扱いかねるような長い竿を鮮かにさばいて流

石に河に育った子供だと思わされる。向う岸に渡ると河を隔てた町は森閑として、悠長な鶴の鳴声が流れを渡って聞えてくる。対岸にはバナナが自生していたり甘蔗畑があるけど、人家は一軒もない、

宿に帰っていると、午過ぎにコレトール・フェデラルが挨拶に来て当方少なからず恐縮しているうちに、この町の伝統的なお祭りとして毎年大晦日から元日に亘って作される *Nossa Senhora da Livramento* の写真を置いて行ってくれた。リベイラ流域の町々には昔から例年のお祭りがあって、その時には常日頃山奥に隔絶の状態にある住民が四方から集まって来て大変な賑わいだと言っている。特にイグアペのお祭りは有名である。祭祀は大抵何とかの奇蹟をあらわしたサントなのだが、各町に一つずつ奇蹟のあったことが面白い。我々の宿のお婆さんも、もう先が短いから今のうちにイグアペにお詣りに行きたいと話していたから、丁度一生に一度のお伊勢きま詣りのようなものだろう。明日はいよいよリベイラを下船する予定なので、橋本君は標本の整理に忙しい。

日暮れどき、裏のイポランガ川の淀みにランバリー釣りに出掛ける。住民は今は時期でないから何も釣れないと言って笑ったが、兎に角、軽妙なウバーの釣り竿を借りて携帯の綸や鉤をつける。ウバーの竿は竹ほどの強みこそないが、かなりに先調子の弾力があつて小魚釣りにもつて来いだが特に軽いので扱いが自在にいく。ウバーも葉ばかりついている茎でなくやや枯れかかった穂の下を

用いるのがよい。水が澄み切っているのでかなりの深さがあっても魚の餌にくいついて鱗を光らすのがよく見える。小一時間のうちに、各自ランバリーとマンヂーとを十五、六匹ずつ、それにカラーとリスボン若干をあげた、リスボン（註ピャーバの地方名）は自分ははじめて見たのだけど、余り姿のいい魚ではなく丁度トライーラの鋭い歯を取って横腹に模様を入れたようなもので、喰った時はアカラーみたいに頼りないが、唯引き寄せて水の上にあげる時にぐっと暴れる。

特に橋本君が最も大きいリスボンをあげたから敢えてこれをケナスわけではない。後からわかったのだが、住民が今は釣れないというのは水が澄んでいるので、彼らのように太い木綿糸など使っては特に敏感なランバリーは余り喰いついて来ないものらしい。細い人造テグスならよく喰う。

もつともあまり大きな口は叩けない。ペスカ通のお歴々が沢山居られることだから、口幅ったいことは言わないことにする。

明日は下航できるようカノアと漕ぎ手を依頼してあったのだが、空いたカノアは一艘もないという。困ったと思ったが、一週間に一度イポランガとシリリカとを往復する発動機船が折よく明日下航するので、ひとまずそれに便乗してカステリヤーノCasteilhanoに下り、そこからカノアを仕立てて下ることに一決した。そこで夜、郡長を私宅に訪ねてお別れの挨拶をし旁々イポランガの将来について種々語り合い、殊に我々の気にかかっていたアライアールの教会の旧蹟ぐらいは何とか草でも刈り払っ

て保存する方法はあるまいかと具申しておいた。又郡長の親切でシリリカの知人あての紹介状をもらった。

六、急流をカヌーで降り、二日目にシリリカに着くこと

七月一日、晴、

いよいよイポランガにもお別れだ。宿のお婆さんは「また来ることもないだろう。わっちはもう齢だし、体はこの通り弱いし、又と会えることもあるまい」と名残り惜しそうに眼をしょぼつかせる。僅か四日ばかりの滞在だったが、別れの人情はどこの世界でもどんな人種でも同じことだ。

船着き場へ下りる。発動機船というのも大げさな話で普通のカノアの艫ヘジョンソンの小さなモーターを据えつけただけのもので、乗ってから、余り体を動かすと今にも覆えるかと思うほどに揺れるから、行儀よく坐って身動きの出来る窮屈さは普通のカノアと同じことだが、ただ低い腰掛けがあつてノートの書けることは有難い。八時半出発の話だったが運転手と助手と、かわるがわる用事を思い出しては乗ったり降ったり、互いに悪罵をつきあつて仕事をなすりつけ合ったりなかなか出発の運びに至らない。他に乗客もないとみえて我々三人のんきに待たされる。

増田君はしきりにスケッチをしている。じつと動かないで行儀よく坐っていると、出発を待つ間に、もう腰が痛くなつてきそうだった。こんな調子で二、三日も乗らされたらやり切れまいと思

う。十時近くなってようやく出発。

町が見えなくなる頃から悠長なりベイラの流れは俄かに怒って白波を立て、兩岸が迫って急流となる。シリリカまで約八十軒の間に F u m i l', C a r a c o l P e c o', G r a n d e といふ三つの早瀬が最も危険で、昔からよくカノアが岩石に衝突して砕けた話はものの本にも載っているが、その外にも小さな早瀬は多数にある。むしろ瀬と淀みとの連結といってもいい位で、一つの瀬を越えると、淀んだような実に静かな流れになり、と思うとすぐ又下手には白波を立てて瀬が来るといふ具合に川床の傾斜が一定していない。

瀬にさしかかるとモーターを止め、パイロットが舳先に立って岩を避けながら舟を左右にみちびく。乗客は両手でカノアの縁をしつかりと掴んで舟が揺れぬようにするが、船べりに当たって碎ける波はどつと飛沫をあげ両肩にも胸にも水をかぶる。時には舟底を岩石がかすめてぐぐぐつと舟全体がきしむように変に震動するのは、余り気持ちのよいものではない。

約二十分にして、フニールに着く。人家が一軒あり、半黒の小娘がまだ掘りたてらしく黒い土のついた自然生のアラルータ A r a r u t a を船着き場に積んでいる。フニールの瀬を越えると、小さな島が二つばかりあつて直ぐ又カラコールにさしかかる。河の兩岸は殆ど急傾斜の森林だが、ちよつとした低地にはバナナやマモーナが自生し特にウバーが多い、イポランガまでの河辺にはウバーの絶えることがない。左岸か右岸か何れかにウバーが続い

ているがその一際ぬきでた花穂が風になびいているさまは旗でも振っているように見える。正午過ぎにカステリヤーノに着く。石垣をめぐらした小高い丘の上に白壁の家が四軒ほど並び、その横にラパヅーラの工場があつて、水車が動き子らがたわむれている風景は今まで森林と水ばかり眺めてきた眼に人里らしい平和な感じを与える。ここでもカノアは一そうも空いていないので仕方がないから、又モーター船に乗りこんですぐ下手のパスサージュン P a s s a j e m まで行く。

パスサージュンについたのは一時頃で、朝から何も飲み食いしていないから腹はペコペコだし、もうカノアはあつても無くても兎に角ひと休みして腰を伸ばさねば動かぬぞという気持ちで、河に臨んだ人家に上っていく。人家と思つたのは小さな雑貨屋で、多くの住民が日用品を買いに来ている。この一帯では唯一の商家とみえて、カノアや駄馬で買い出しに来ている住民の多くは十軒、十五軒の遠方から来たのだと言う。何れも縁の広いパーリヤの帽子をかぶり、日に灼けた顔には無精髯ともカイゼル髯ともつかぬ偉大な髯をたくわえ、腰に四、五十糎もあろうかと思われる長い山刀をぶちこんで、ズボンの裾をまくりあげ毛脛もあらわに、店先の石を積んだところに腰をおろして気の長い無駄話をやっている。たまさかにしか顔を合わすこともない彼らにとってこの雑貨屋は一つの社交場なのであろう。

昼食ののち店の主人と交渉してカノアを仕立ててもらい船頭を雇う。この辺ではカノアと船頭とは別々に契約するのが普通であ

る。「船頭のロベルトは十七年間もリベイラを往復している男だから、大船に乗ったつもりで、安心していいですよ」と店の主人はいったが、船頭というのは半黒というより殆ど黒人に近い小柄の男で、顔面に無精髯を伸ばし落ち着きのない血走った目をぎよろつかせ、どうみても好感の持てる風体はしていないが、これも仕方がない。

三時頃、そのカノアで出発する。船頭は一人だしどっちみち急ぐ旅ではないと言い渡してあるので、無駄口をたたきパイプをくわえてだるそうに櫂を動かすことだから、船足はすこぶるのろい、いくつもの早瀬を越え、リベイラの流れが中に島を挟んで大きく迂回するところ、その瀬に臨んだ小高い丘の上にイヴァプルンゾーヴァの部落がある。部落といってもカペーラを左端にして右の方へ萱葺きの小さな家が四軒ばかり並び、少し彼方に二軒ほど散在するから、合せて六軒ばかりの里で、勿論店もなくラパゾーラの工場もなく何もない。カノアをつないであがっていくとぞろぞろ住民が集まってくるが、何れもムラートだ、話すと盛んにヴオセ・メルセと言う、ここではSenhorとは言わずにVosse Merce というのだ。こんな言葉は古文書で読んだところとそあれ、実際には今の人間の口から聞くのは初めてのことだから、二世紀前のバンデイレランテの時代に還ったような気がする。大人はさすがにズボンもシャツとをまともに着ているが、そこらを走り回っている子供らは殆ど着物らしい着物を着ていない。アパイーからこちらずいぶん多くの住民を見たが、しかしこんな

に粗野でこんなに自然で、そして、こんなに物質的にみじめな村は始めてである。

この貧しい一寒村、文字通りの一寒村が、割り合いに有名なのは、ここに建っているカペーラのお蔭なのだが、住民にカペーラの内部を見せて欲しいと言うと飛ぶようにして鍵を取って来て重い扉をぎいっと開けてくれた。毎年十月一日にお祭りがあつて、その時はシリリカから司祭が来るが、普通は僧もおらず住民が鍵を持って掃除などするわけだ。祭祀はNossa Senhora da de Rosárioといって、黒人の崇める神である。内部は祭壇に近い方の約半分が板張りになつて長い腰掛けが数脚あり、他の半分は土間のままになっている。壁はタイプですいぶん分厚いが、普通の寺院なら鐘楼ともいうべき屋根裏のところに、最近繕った個所がありここには練瓦を用いている。大小二つの鐘が吊られ、大をい方は一八三二年と刻んであるが、史実によればこのカペーラの起工されたのは、一七九一年のことだから、小さい鐘が最初からのもので大きい方のはあとから作つたものであろう。案内の住民に教会の由来についていろいろ聞いたけど、さっぱり要領を得ない。終いには「このカペーラはブラジル最古のもので、もう五百年以上も経っている……」と言うから、そんな筈はないと答えて使つてある木材や瓦や壁を示してそれが比較的に新しいことを説明したら、その男はじつと考えこんで黙ってしまった。大体この辺の住民はいずれもそうだが、相手にしゃべらせてこちらが只黙ってきいてるとでんで出放題なことを言うし、業を

煮やして、少し語調強く質問すると怒られた子供のようにシン・セニョールといってしよげかえて、もうものも言わない。カボクロから物を聞き出すのは実に容易なことではなく、これは相当の根気とコツを要するものだと思う。只住民との接触折衝についてはつきり言えることは、変に文明に馴染んだようなシリリカやアビアイーは別だとしても、少なくともイポランガ付近からこのイヴアプルンドウヴァの一带は、我々が日本人だからといって差別したり異人視したり又は蔑視、敵視したり、兎に角、人種的な差別感に基づく態度は見られない。特にこの村の住民などは我々が日本人であることを意識していないようにすら見える。このことは、日常我々が都会などに住んで絶えず周囲から有形無形の差別感を以て遇されて良い意味にも悪い意味にも異人視されるところから、絶えずこの周囲に拮抗し反撥する為のある心構えを持つように馴らされた考え方からみると、一種の奇異な感にすら打たれる。特に最近騒々しい世の中から出て行って、殊更に強く感じたのかも知れない。

聖像には青い服を着せ大きな純金のボタンで止めてある。説話に依ればもともとボタンは二つあったのだが、何時か聖像を外へ持ち出した時、一つは盗まれたのだそうだ。此の女神は雨乞いの名手で、旱魃がつづいて作物の枯れそうになる時、この聖像を河畔に持ち出して雨乞いの祈祷をすると必ず慈雨が降ったものだ。そうだが、何でもボタンが一つ盗まれて以来サンタがつむじを曲げてしまったものか最近はこちらとも雨を降らせてくれないという。

又この付近から多量に金を産した好景気の頃、貞女のほまれ高い一婦人がいて一七九一年にこのカペーラが建つまではその婦人が司祭をした。その司祭願いを出したのが一七七〇年のことだと、文書に見えるから、部落のできたのはそのずっと以前イポランガの旧蹟とほぼ時代を同じくするものと思われる。

シリリカの教会の *Livro de Tombo* には年代は未詳だが、イヴァプルンドウヴァについて次のような記述がみえる。

ちよつと面白いから引用してみよう。

「イヴァプルンドウヴァの部落はもと *Arraial de Minas* といわれ、シリリカよりもずっと古くから住民がいたと伝えられる。しかも、今は早、かつて昼も夜も人の往来の絶えることなく賑わった河畔、数レグアの地域はしばらく言わずにも、多く住家の寄り集っていた場所すらも、既にして往時のおもかげ見るによしなく、草の茂るに任せ家の倒るるに任せて、昔多かつた家畜の姿も見えず、金のお蔭で栄えた住民と外界との商いも廃れ、砂金採取者が各々その多きを誇った奴隷も影を消し部落をつくった古い住民の名も多くは忘れられて、今この火の消えたような岡の上に、ノッサ・セニョーラ・デ・ロザリオを慕う黒人らの努力で建ったカペーラがひとりおき忘れられたように残っているのは、まさにかつてこの地に注がれた多くの労作と多くの疲労とを語る最後の嘆息のような気がする……」

かつて繁栄と隆盛を偲んでのこの溜息は、恐らく五十年前も今も変りがあるまい。村の横手を流れるイヴァプルンドウヴァの小

川は、リベイラ流域を通じて早くから著名な産金地であつた。カロージェラスに依れば、ここの金はリベイラ随一の称があり、黒人の数の多かつたところからコロニア・ドス・プレトスとも呼ばれた。

黄金に魅せられてリベイラの奔流も物ともせず軽妙なカノアを操つてカリジョー土人を駆逐し、代りに多数の黒人奴隷を引き連れて来て砂金を採つたバンデイランテも、金の切れめが縁の切れめ、何処へとも知れず金を追つて移動し、あとには主人の情で自由人になっていた老いた黒人や、キロンボ Quilombo から舞い戻ってきた逃亡黒人がこの地にささやかな生活をつづけ、黄金の夢の名残りの教会を大事に世の風潮から遠ざかつて今日に至つたものであらう。

甲斐性のある若者はこの平和な里を見捨てて出稼ぎに行つてしまふのか、今住んでいる五、六家族には満足な体と頭を持った者はいないように見える。住民の間には水疱瘡が流行していて、三人も罹患者がいる。何故種痘をしないかと問うたら、疱瘡も一度かかると二度はかからぬから種痘と同じだ、というところは呑気なものだ。

カペーラの下手早瀬を一目に見下る草原に天幕を張る。

住民が採つてくれた薪で夕飯を炊く。船頭は住民の家に泊ることになった。さすがに、夜に入ると物好きな住民も一人減り、二人減つて皆、家に帰つてしまい、我々三人だけになってやれやれと

足腰を伸ばす。全く手を一つ動かすにもヴオセメツセーで攻められて、果ては黒人の吃りまで出て来てカボクロを通訳にして話さねばならぬ始末にほとほと閉口した。夜寝ていると瀬の音がすぐ下に聞える。よく聞けば解放された黒人の歓喜の声にも聞え、又鞭の下に呻く奴隷の声とも聞える。しかし、多くの黄金の夢をのせてリベイラの流れは二世紀前も今も悠久に尽くるところを知らぬ。駄作三首

黄金の夢もあえなく果てしかば平和なる村あとに残りぬ
歎びて奴隷らが建てし古寺はゆかりなき鐘も触りつつ見る
黒人の建てしとう寺の壁荒れて破れたる床に虫も鳴くべし

二日、快晴

早朝天幕の外に出ると四囲の山岳には低く雲霧が垂れている。少し冷えるが寒いという程ではない。見るともうロベルトは火を焚きつけたり、洗い物をしている。見かけは山男だが案外によく働く。彼はどんな時にも大きなファコーンと古めかしい先込めの鉄砲を身边から離さない。かといって我々を脅すつもりもないのだが、猛悪な自然というものへの対抗から何百年もの間にある本能的なものを承け継いだのであろう。天幕をたたんで八時頃に出発する。

イヴァプルンドウヴァから下流は流れが極めて緩やかになり、兩岸にもやや平地が多くなってバナナや甘庶を植えた人家がちらほら散在する。このあたりから風景はいとも単調で退屈してくる。

九時四十分頃、船頭が言うに、河より約四軒距った山岳の中腹に大きな鍾乳洞ありと。後から調べたらこの地方で最も大きいといわれる有名なタップージェンTapiagemの洞窟のことで、時間の都合で見られなかったのは残念だった。しきりにアラボンガArapongaの金属的な鳴き声が兩岸にひびく。鷹も鳴いている。ジョゼー・パウラJose Paulaというところで昼食をとる。

更に下ると、流れはいよいよ緩やかになり、河中も広く兩岸には低地がつづいて、白壁のやや豊からしい農家が点在し、ゴヤバありバナナあり、冬というにまっ青な牧場には草を食む牛の群が見え、全くの平和郷である。風景が単調になると坐ったまま身動きもせずに、何の芸も無いカノアの旅は退屈する。二時過ぎにバーラ・デ・バタール、Barra de Batatalという小さな町を通過する。このバタールの支流を六軒ほどカノアで溯り更に山一つ、越えたところに、バイーロ・デ・ブラースBairro de Braz という村落があるが、それからパラナ州との境界にかけて実に広漠とした草原がひろがり高台になっている所、付近の住民はプラナルト、planaltoと呼んでいる。説話によると、その草原の真ん中の山麗にジェズイットの建てたとおぼしき高い石塔がそびえ鹿狩りなどで、その高原に踏み入った住民の何人かがそれを見たことがあるという。もちろんこの話の真偽は請合えないが、これが単なる説話であるとしても、兎に角かつての巨人ジェズイットの足跡はイベイラを通じて遺跡

に説話に数多く残っており、ポンバール宰相がその独裁的な強行政策でブラジルのジエズイト布教団を全面的に駆逐してから既にもまる二世紀を経た今日でも、尚彼らの足跡が生き生きと住民の伝統の中に息吹いているということは、一面彼らの地方開発に与えた影響の如何に大きかったかを語る消息の一つであろう。特にイベイラ上流からパラナグア方面にかけて、ジエズイト僧の集中したのは一六九〇年頃であるから、矢張り此の地方の産金の隆盛と年代を同じくしているわけである。

河の水は青々と澄んで流れはあなきかの程々緩やか兩岸に緑の牧草が茂り点々と白壁の家があつて、変化といえば時折り竹藪があるくらいのも、平和といえばこれにまさる平和な風景もそうはあるまいが、それだけに単調すぎてカレンダーのスタンプでも毎日眺めているような退屈を感じて来る。船頭も瀬げにゆたりゆたりと権を動かしているからこの辺の船唄でもあつたら一つ聞かしてくれと言ったら、カノエイロは唄わずにグリータ（怒鳴る）するといふからいくら睡気ざましでもグリータは困ると降参する。河岸には目立ってグアプルブーの自然林が多くなり、その落葉して灰色の幹や枝を露出したのと波うつ旗のようにウハーの穂が風になびくのは、ちよつと冬らしい景色である。

四時頃イタウーナItaunaを通る。町は左岸の高みにあり家並みは土壁で、古びているから町全体がうす汚れたような暗い色をしている。ここからシリリカまではもうさした村落もない。特に見るべきものでもあれば途中で一泊する予定だったが、こん

な退屈な景色を何日見てもつまらないから少し位暗くなってもシリリカへ着こうということになった。船頭は、明るいうちに早瀬を一つ越せばあとは真っ暗でもシリリカへ着けるといふ。そこで俄かに我々も起き上って櫂を動かし暮れかかった河を下る。シリリカに着いた時は、もうとつぷり暮れた七時であつた。

イポランガからシリリカに至る河辺の植物の主なるものを拾つてみると、河辺の両側を埋めて著しい群落を成しているのはウバーとサランゾーバ *Saranduva* である。

ウバーは正しくはカンナ・ウバー *Canaba* といひ、日本のヨシを想わせる丈の高さ六、七米にも余るイネ科（禾本科）の植物であるが、学名を *Gyneryum Sagittatum* (*Aubl.*) *Beauvois* といひ、リベイラ河畔にはずっと上流まで実によく繁茂していて特殊の風景あづける。その花穂はヨシの如く、茎の頂に長く抽出して白色で、附近に植えてあるサトウキビと紛わしいが、花穂がずっと長いのですぐ見分けがつく。イポランガ辺では花穂の出た時に伐って釣竿とし、竹竿の代用としているが、この外に真つ直ぐで軽いので打上花火の尾に使われ、又此の地方の土人が盛んに矢に使用したものと思われるが、それは学名の *Sagittatum* (矢に使用せる意) にも残っている。

サランゾーバは河畔に多い灌木で、葉はコリヤナギの如き形で柔軟で水に対して非常に強い性質をもっており、タカトウダイ科

に属し、黄色い花は花期に河辺を彩って常に美しいという。

大木にはCedro, Angico, Paudalho, Peroba, Angelim, Juapuruvi, Caporoca, Capixinguí, Pineira等が見られるが、中でもGuapuruvuは特に多く、その特殊な樹勢によつて、目につき易い。この言葉は、ツピーグアラニー語で「風に折れ易い」という意であるが、この材は非常に軟かで細工しやすく、タマンコの用材として珍重され、幹は緑色で冬は落葉し夏に葉と共に黄色い花を咲かせ、リベイラ河流域ジュキア線一帯には野生が多いが、サンパウロ市付近にても諸所に栽培しているのを見る。

大木には又、諸所に例のバルバ・デ・ヴェーリョが垂れ下り、アナナス科、ラン科の種類の着生しているものが多く目立つ。

河の中の早瀬には所々に河床から岩が突出しているが、この岩には必ず鮮かな黄色の地衣が着生している。この岩の大きいのは又イワツバメの実に美しいのが巢を作っており、岸边には雪のよう白いガルサ（白鷺）が船を迎えてくれる。

チエテ河にはアグアペーAgapeミズアオイ科、日本名ホテイソウ）が浮草として実に沢山水面を流れているが、リベイラ河では非常に少なくイタウーナの手前で始めてこの草を見た。

七、平和郷をあちこち見物すること

普通は電燈があるそうだが、今年の大雨でダムが崩壊して以来電力が杜絶えていて、家々の窓から洩れるランプのかすかな光りでは町はうす暗い。もつとも、アピアイー以来電灯と別れているから別に不便とも思わない。イポランガから紹介状をもらっていたから船着場のすぐ上のポテル・パウリスタに行く。お内儀さんが出て来て主人は留守だといい、広間に通れとも言わぬから、仕方ないこちらは沢山の荷を廊下に担ぎこんで待っていると、やがて主人も帰り広間に入って夕食を待つ間、主人と四方山の話をする。

主人は元来イポランガの人間でもとは郡役所の書記をしていたとかで、この辺一帯の事情に明かるい。バツーケ踊り（B a t u p u e）のことを聞いたら、この辺ではピロンエス、P i l o e sの流域で今でも見られるということだから、何故ピロンエスに残っているのだろうかと重ねて訊くと、「あの辺はセルトーンだから」との答え、それはあたりまえのことだが、ピロンエスの上流にはかつてキロンボがあったという説話もあり黒人の多く定着した地方だから、バツーケも廃れずにその形を保って来たのかも知れない。バツーケ踊りもその昔からの風を保っているところは少なく、地方によると黒人の催すバイレを総てバツーケと総称することもあるから油断はできない。

この町にはドイツ人が五、六家族おり、日本人は一家族町の近くにいるという。リベイラの下流には日本人の集団地がありなが

ら、所用でもなければシリリカに集る者さえ少ないし、ましてイポランガ付近に至っては日本人で旅行したものは僅かしかない。

夕食後、自分は旅行者の話を持ち出して、一九三四年頃、有名な植物学者の Dr. Hoehne がシリリカまで来遊し、沢山の標本を担いでいたので荷の多いことから、宿の内儀さんに行商人と間違えられひどい待遇をうけて砂糖も入れてない珈琲をのまされたことが、彼の報告書に載っていると云ったところが、「それア、お気の毒なことでした。しかし、宿というのは別の宿のことでしょうよ。あいにくと今夜はスープもありますが明日からはスープも出します。珈琲も白砂糖を使っていますよ」と言い出したので当方恐縮した。「あんなこと言う奴があるか」、と後で増田君に大いにたしなめられた。あてがわれた部屋は二階の奥の方だが、窓からは、町も一目に見えた。部屋も大きいので我々には都合がよかった。

三日、快晴

午前中、シリリカ付近唯一の日本人を町から二軒のところにあるカラカター農場 Faz. Caraita に訪ねる。農場というのはサンパウロの豪商アルメイダ・パイヴァ氏の別荘で、北海道出身の大花氏はその管理人をしている。リベイラの烈しい陽光に挑むように赤や緑の強烈な色であくどく塗った建物が丘の上に並んでいる。農場は実に景色の美しい所だと外人に教えられた増田君は、日盛りの道を十軒近い絵具箱をかついで汗をふきふき

行ったが、この建物を見てはえもいわず「カボークロの美しいという場所には、もう行かぬ。ルガル・トリステという場所なら必ず……」とこぼしている。ブラジル語の真骨頂を会得したわけだ。

農場の下方、リベイラの河畔に臨んだところに、かつてのシリカの旧趾があつて崩れた教会の瓦壁が残っている。教会の跡を中心に四方へ蜜柑やその他の果樹があるのは、昔家並みのあつたところでもあろうか。残っている壁の厚さは約五十糎ばかりで、平らな切石を粘土で積んだものだ。石垣の中にフィゲイラの大木があり、橋本君の推定で百年以上の樹齢というから町の移転の古いことを語っている。

の 崩 文



こ 年

に建ったというから、イボランガあたりより年代から言つて少し後かも知れないもつとも、それ以前にジェズイッタらはここに土人の教化部落をつくつていたらしいが、詳かでない。

町は一八〇七―一八〇九年の間に現在の所、即ち二籽下流の地点に移転した。大体かつて部落のあつた場所は低くて、ひどい増水の時は水浸しになることが多かつたから、住民の間には早くより移転説があつた。ある事件から住民が二派に分れたのを切っかけに、一派は現在のところに移転して両派互いに対峙して譲らなかつたが、ある暴風雨の夜半、移転した派の者らが密かに教会に至り、聖像をかつさらつて行つて、俄かづくりの御堂に安道した。そこで、本尊を失つた教会は教会ではなくなり、住民も聖像のあとについて次第に現在のところに移住し、何時の間にか本当の町になつてしまつたという―これは郡長から聞いた話である。

午後は例の如く挨拶回りに行く。朝から町全体にたちこめていた霧は何処かへ行つて、午から空はみごとに晴れあがつたがさぶる暑い。標高は低いし海岸には近しで、大体高原の爽快な氣候に馴れた我々にはこの地方の温度と湿度とは何かこう体にそぐわない。七月といえは真冬なのだが、それがこう暑くては真夏の炎天と降雨時の鬱陶しさが思いやられる。

ここの郡役所は流石にイボランガとちがつてカボークロを威圧するに十分な格式と役所らしい臭味とがある。郡長専用の事務室には小粋な女秘書がタイプを叩いている外、吏員も四、五人いるらしい。ここは左官兼職ではない。郡長のフエルナンド・カルネ

イロ氏、S r . F e r n a n d o C a r n e i r o は、我々と同じ年輩らしい若さだが話しているうちに学識の深さが見え、殊に地質に関して何回となくリベイラの諸支流に歴史地理学会の依頼で調査を行ない、今は同学会の通信会員であるという。図書室には千数百部からの蔵書があり、自由に閲覧して下さいと自慢げに我々を案内した。田舎の郡役所などでは何所へ行ってもうるさい住民の反目や確執があつて、名誉職となるとかなり烈しい醜いポリチケイロなんかあるものらしいが、こういう活動力に燃えた少壮の郡長をもつシリリカはその点幸せとも言えるだろう。

既に陽が傾いてから、町から約二軒下方の河畔にあたるフオルモーザ F o r m o s a というところに行く。ここでは、大きな沼の水を利用して水車を動かし地方唯一の精米所が働いている。此の地点、リベイラの流れは二つに分かれて、真中に平らで草の茂った大きな島をはさんでいる。島の草っ原に遊ぶ牛の群に夕日が映え河の水は光りつつ流れて、何とも言えぬ和やかな眺めだ。実際、眺めの平和なことと言ったらイヴァプルンツ―ヴァ以来四囲の風景を見てもそれ以外に感じないくらいなのだが、リベイラの下流は唯これ平和というに尽きる。

夜は、宿の主人の兄で例のイポランガ通いの発動機船の持ち主であるマルセル氏に伴われて、此の町に在住するドイツ人の技師を訪問した。彼は此の地方に、かつてドイツ人の移住地を計画した人で、それが失敗に終わってからはずっとシリリカに定着し、今では発電所の工事などを指揮している。

ダニエール氏 S r . D a n i e l は、足に腫瘍ができてもう永らく臥せているとかで、少しやつれていたが暗いランプの下に輝くばかりの金髪をし北欧人特有のやや面長の顔にくぼんだ両眼は冷たくて鋭い感じをうける。枕許のランプ台にはドイツ語の書籍が積まれ、書きさしのノートも開けてある。我々の質問に、達者なポ語でぼつぼつと答えていく。

一九二三年にドイツから視察に来てリベイラ流域を調査し、シリカより約十軒ほど下方のカイアカンガ (C a i a c a n g a) に土地を選定して帰国し、翌二四年にはレナニア方面から二〇家族の植民者を率いて入植した。地代は年賦払いだったが、入植後欧州式の牧畜をやってみてうまくいかず、そのうちに植民者の間に不和を生じたりして、地代の払い込みも終わらぬうちに植民者の大半は帰国してしまい事業はかくして全く失敗に帰した。農業機具なども多量にドイツから持って来たのだが、それが当国の農耕に適しなかった為あるいは放棄しあるいは屑鉄として売り渡して、結局残ったものは何もないという。イベイラ流域における外人の移住計画は数多く試みられたが、ドイツ人のみの移住地としてはこのカイアカンガが後にも先にも唯一のようである。残った家族もシリカ地方に定着したものは僅か二、三家族に過ぎず、ダニエール氏自身、今は農業を断念して本職の土木工事に携わっているわけだ。

ダニエール氏は移住計画の失敗の原因について、欧州式の農耕法をそのままリベイラ流域に当てはめようとしたことと、持って

来た農具が役に立たなかったこと、予期したよりも土地が瘠せていて土地代が高かったこと（アルケール当たり三〇〇ミルレース）植民者の間に和を欠いたことなどを列挙した。これらの原因はいずれも一応貢肯できるとしても果して、これを以て全面的に説明し得るかどうか。

どうも失敗の原因は他の外国人の移住地にも多くの例があるように、もっと根本的なところに伏在しているようにも思われる。全くりベイラ流域は外国人移住地の試験場みたいなもので、いろいろな民族がここに移住を試みてその多くは失敗し、繁栄はいうもおろか、植民地の名をとどめておればよっぽどましな方である。日本人の移住地がレジストロ方面にいくつもあることはいわずもがなのことだし、オーストリア人を中心としたカナネイアのサンタ・マリア植民地、ポーランド人、イタリア人その他の外国人によるパリケーラ・アツスーの植民地、今は説話にすら伝えられぬ程消えてなくなったイグアツペのアメリカ人の植民地、数えてみればいくつも外国人移住の跡はあろう。

四日、晴

朝七時、窓から見る町には深い霧だ。珈琲もそこそこに、増田君を残して町を出る。今日は下流に住んでいるドイツ人の生活を見学かたがた付近の森を歩いて来ようという予定で、昨日の夕方に来たフォルモーザを通り、絶えず河畔に沿った小径を下って行く。精米所の少し向うに路傍にカーザ・グランデ風の二階建てが

あつて、壁に一八四二年と彫つてある。ちよつと珍らしいから写真をとっていると、家人が庭にいて「測量技師だろう」と我々に訊く、「否、草の採集に歩いているのだ」と答えたら、「草を採つて売るのか」「否、見本にするのだ」「見本にしたら売るのだろうか」もう解りそうもないから返事をしない。写真機を見て、「あの日本人は水準をとっている……」と私語するのが聞える。シリリカあたりではもう俗臭がみちていて、町の住民と話しても厭氣のさすことがある。

道は河に沿つて進むのだが、漸次細くなつて遂には牧場の牛の道のように細くなり、荷車はおろか駄馬の通るのがせいぜいだ。狭い牧場の中に果樹に囲まれてフーケー家があるが、この辺のカボークロの家と何の変わるところもなく、瓦は破れ壁土は網代もあらわに落ちかかっている。住民は発音のしにくいところから姓をフォゲーラ（花火）と呼んでいるが、本当はフーケー（Fouquet）といつてフランス人の系統を引いた東プロシヤ人だという。陽あたりのいい庭先に柵を持ち出し数人の息子や娘がしきりに唐箕を使っている。この家の主人は一九二四年に来国してこの農場を買い、矢張りカイアカンガに入植したドイツ人と同様に多くの農具や種子を携えて理想の農場経営を計画した人だが、計画のことごとくが実を結ばず数年前失意のうちに死亡して、今は七人の子と未亡人とが農場を守っている。

長子は二十七才だというが話は散漫として要領を得ず、分りにくいことはニヤニヤ笑つて言葉を濁してしまふ。父は欧州から農

具を取り寄せたりこちらでいろいろの器具を考案したり小時も休むことなき活動家だったらしいが、そんな活発なところは子供らには見られない。ドイツ語が読み書きできるかと訊ねると、日常の会話ならわかるが読み書きはできぬ、それにブラジル語の方が使い易いから家でも殆どドイツ語を用いないという。学校はシリカの町の小学校にしばらく通ったというけれども、試みに名を書いて貰うと、金釘流ですこぶる拙い。お祭りの日であっても滅多に町に遊びに出ることもないし、ブラジル人のバイレに行ってもつまらぬから行かないと言う。

父母の王国の言語もよく解らずかといってブラジル語も完全には解せず、ブラジル人の社会にも全くは馴染みきれない、謂わば、どの社会にも完全には属しない中間的な存在であって社会学でいうマーヂナル・マンである。この型は日本人間にも広く見られることだが、問題は同化に至るまでの中間的な過程としてのこのマーヂナルの状態が、何代ぐらいの世代に亘って続くかというテンポの問題であって、マーヂナリテイそのものは程度の差こそあれどこの移民にもついてまわる避けがたい現象であろう。これが南部のドイツ人の集団地のように同化に対する一つのレアクションとして、そこらの安っぽい日本精神主義にも比すべきドイツ主義 *Deutschtum* が鼓吹されたり、純血主義が唱えられたり、兎に角、何時までもドイツ人であらせようとする執拗な不断の刺戟があれば、一応マーヂナリテイの持続期間を伸ばすこともできようが、結局は環境に適應うるまでの一種の不自然な状態に

過ぎめにはあるまいか。シリリカあたりに孤立したドイツ人はこの過程をいとも迅速に飛躍するというだけの話で、恐らくは三世は稍完全なブラジル人になり経すことであろう。

かつて亡父が欧州から持って来た器具主として鋤の類は、既に古鉄となって小屋に積まれ、その子供らは結局カボークロこそはこの環境に最も適した生活であることを是認したかのように、エンシャーダー一本跣足で畑を耕すらしい。

唐箕は亡父がレヂストロの日本人から教えられて造ったものだというが、ドイツ文化は屑鉄となったけど、日本の文化はどうやら生きのびているということか、もともと文化の水準がそれだけ近いといえはそれまでだが……。

午後は快晴なので、橋本君は町の下の河原に出て、砂原に植物の標本を干す。今までの旅程の途次、充分に乾燥させる間がなかったから、最初採った分は黴がはえたり腐りかけたりしたものがあつて見る目も痛ましい。あるものは駄目だといって目をつぶるようにして捨てている。ずい分苦勞していることだし、又と同様な場所と同じ標本を採ることはできないのだから、橋本君の心中察すべきだ。

我々の旅程もいよいよ終りに近づいたから、今後の予定についてまっすぐに帰聖すべきや、バタタール奥の高原を踏査すべきや、或は足を伸ばしてイグアペを訪ぬべきや、の三つの場合が考えられたが、結局バタタール奥の高原とタッパージェンの鐘乳洞見学は相当の準備と時日とを要することだから残念だけれども断念し、

むしろイグアペを訪ねて一兩日滞在の上帰聖することに一決を見た。アピアイーから山岳地帯を抜けてリベイラ河上流に至り、それより下船してシリリカに出るといふ我々の期待した旅程はほぼ達したわけで、何しろ限られた時日と費用のことであるから、全く遺憾なしとはしないがそれでもリベイラの自然にきき過去をたずねその風物をめでる上に於て一応得るところはあった。特に橋本君はその採集せる植物標本五一科、一七五種に亘り、標本個数三四六に達し、未だ分類せねばならぬの中には幾つかの新種もある見込みらしい。写真は一六〇枚撮った。増田君は油画のスケッチ八枚、他に鉛筆のスケッチ数十枚を得た外、変わった風景の感覺を頭におさめたことであろう。自分は独いていえば、増田君の痛言のように「古寺では妖怪と鹿爪らしく話し、俗界に下りてはモレーナの色に目を奪われる曲者」であつた位のところだ。

シリリカから、リベイラ沿岸をイグアペまでの植物相の大体は、サンパウロ州立植物園長オエーネ博士の名著があつて、ここに敢えて蛇足を加える必要はないと思うが、我々の経路は河でなく自動車道路に依つた故、又多少異つた収獲を得ていると思う。従つて筆者の採集ノートの中から主要な事項を拾い出して記してみる。

シリリカにてはオエーネ博士の歩いた場所は大体歩いたと思うし、それ以外の場所にも行つていふと思うが、斉藤君の記しているカライター農場の旧跡に立つフィゲーラの大木は確かに価値のあるもので、その太さは地上二米の所にて四米の周囲があつた。

又付近には昔の町の跡らしくビワやミカン類。パラ栗などの果樹が残っていた。

河原の砂礫上の植物には今まで余り注意して発表したものをブラジルでは見ていないが、試みにシリリカの舟着場付近にて調べた結果では、一七科、二一種の草が見られた。

この中にフウテウソウと称する雅趣ある草があつて、丁度花盛りであつたが、従来この付近では一種しか知られていなかったけれども筆者は二種を見出している。フウテウソウは勿論「風島草」でフウラウソウ科という独立の科に属し、ダイコンやアブラナの属する十字科に近い種類であるが、花は紅紫色でオシベ、メシベが長くて、葉が掌状に切れていて美しく、日本でも立派な園芸植物としてこの仲間のものを待遇している。

シリリカの郊外にフォルモーザというところがあつてそこにかんりの湖沼があるが、ラゴア・デ・フォルモーザという、睡蓮の野生種などあり、夏が来たならば種々と面白い水生植物が見られることと思う。

八、終日歩き海岸に至ること

五日、早朝シリリカを發つて、イグアペへと向かう。ジャクピランガJacupirangaまでの道筋は殆ど森で被われているが、鬱蒼とした大森林は少なくて殆どがカポエイロンである。道路は非常にいい。小川の辺には道路の立派さをあざけるように

土壁、草葺きの貧しい住家が散在する。ジャクピランガからパリケーラ・アスー Pariqueira Assu の間は森が少なくなつて、地勢はややセラードがかり牧場の多いのが目につく。パリケーラは町も小さいし家並みも新しいが、夜通の要衝に当たるのでリベイラ流域としては珍らしく活気を呈した町だ。宿に一休して朝食をとったが、宿の内儀さんや住民の我々に対する言葉が目立つて乱暴なのに少なからず驚いた。「飯を食え」とか「部屋に荷物を投り込め」とかまるで命令的な語調なのでいささか腹にすえかねたが、それというのが我々は既に日本人の集団地の近くに来ているということをや迂調にも忘れていた。ここは日本人との接触が多いので、接続法の使い分けの下手な日本人と話すために簡単直載な一種の会話法と語調とが生まれたものであろうが、余り感心したものではない。パリケーラ・アスーは、ポーランド人やイタリー人の植民地から発展した町なので、住民には欧州人の型が多く見られる。

夕方イグアペに着く。最近破魔さんの関係する会社がここにバナナ乾燥と缶詰工場をつくる予定で、その準備の為に友人の川名君が来ているので大いに助かった。リベイラの他の町のようにイグアペも亦半ば死んだように衰微した町で、産業らしい産業というものはなく住民は壁の崩れ落ちた廃屋の中で付近の湿地から取って来る蚊帳吊り草の菰を編んでいる。

六日は川名君の案



じ、コンプリーダ島I

l h a C o m p r i d a に渡り、又イカパーラ I c a p a r a の漁村を訪ねた。ランチを快走させたことと、新鮮なボラをたらふく食った以外にはさして取り立てていうこともなくて甚だ申わけないが、工場支配人セルソ氏の案内でリカルド・クローネの子息のオラーヴォ・クローネ O l a v o K r o n e を訪ねたことは、思わぬ収穫であつた。"イグアペのナチュラリスト"と呼ばれたクローネはリベイラ流域の鐘乳洞や貝塚調査で有名な人で、その子が親の遺志をついだ自然愛好者であることは初耳だった。オラーヴォ氏はこの地の動物、主として鳥類の標本を熱心に蒐集しているが、理解者も少なく経済的にも恵まれないので、系統立った研究のできていないのは氏の熱意と努力の割合に郊果のあらぬ点で惜しむべきである。聞けば、亡きクローネの産書や標

本は遺族の不注意から全く散逸してしまい、今は何一つ残っていないという。

七日早朝、バスでイグアペを発しレヂストロ、ジュキアを経て、夜の十時、サンパウロに帰着した。

シリリカを発してジャクピランガに至る道路の両側には尚かなりの森林があつて、インガーの白い花が見え、セードロ、パウダーリヨ、カルネ・デ・ヴァツカ、ペローバ等の大木が茂り、その中にパルミットが濃い緑の葉を見せており、カポエイロンにはタマシケイラ *Tamandiqueira* クマツヅラ科ヴァツソーラの灌木が多く、湿地にはガマ (*Tabua* の俗称) があるが群落をなしており、道傍にはインバウーバやモンジョーロが多く見られる。又小形のヤシ類でブレジャウーバ *Brejauba* と称するものが日当りのよいカポエイロンに残っているが、このヤシは幹全体に刺をもっていて太さは直経五、六糎であるが、非常に柔軟性があり、土人はこれで盛んに弓を作ったものであるし矢にも使用している。

パリケラ・アスーでは暫く時間があつたので町の北方のカポエイロンに少しはいつてみたが、キツネノマゴ科の未知の種類があつて美しい紫の花を一ぱい咲かせていた、林中の木には、バルバ・ブランカ *Barba Branca* (ウマノアシガタ科) の長い蔓がまつわりついて白い長毛のある果実をつけていた。又ここでノボタン科の一種 *Tibouchina holosericea*

ea Baillieを見たが、この小灌木は残然たる海濱植物で、パ
リケーラ・アスーは海岸から約二〇呎あるが、恐らくこの種類と
しては海岸から最も遠く分布したものといえるであろう。

パリケーラ・アスーからサバウーナ港、Porto Sabau
naに至る自動車道路の西側は漸次海岸低地になるに従って湿
原に灌木林を形成しつつあるが、これは植物生態学上非常に興味
あることと思う。

即ち昔は、この辺が海の時代もあつたのであるが、それが砂浜
の時代を経て漸次灌木が生育して来たが、なを海岸低地であるか
ら湿気が非常に多いので灌木でもこの水分に対する抵抗力の強い
もののみが今のところは生育しているというわけである。恐らく
は此の前にマングローブMangrove（紅ホベニギ林と称す）
の時代があつたのである。

そして今後この湿地灌木林は喬木林に変遷していく運命にある。
道路のすぐ側にはノボタン科のTibouchina Aten
ocarpa Cogn, Tibouchina eello
wiana Cogniauxのとかが混生して何呎もつづいて
いる。その光のTibouchina Holosericea
が漸次多くなってくる。

サバウーナ港よりイグアペまでは既に海岸線に平行に進むので
あるが、殆ど同じ灌木林が続いて、時々乾燥した場所にはジェリ
ヴァ、インダイア、ジュサラセーマJussaracemabレ
ジャウーバ等のヤシを見、海濱植物が益々数を増してくるのがバ

スの窓からも散見する。

イグアペの東にはかなり高い山が連つていて樹木が非常によく繁茂しており、その植物相は残然たる亜熱帯の特徴を現わしており、ラン科、アナナス科の着生植物も豊富に見られこれの研究は将来大いになさねばならぬことである。

六日は、マール・デ・イグアペ *Mar de Iguape* を
バーラ・デ・イカパーラまで船で行き、コンプリーダ島の植物相の一部を見ることができたが、イグアペに近い地帯は一体に海浜でここでは南ブラジルの典型的な海浜植物群落が見られる。

この地域では植物は匍匐
中で最も普通なものはサル



が、その
da

Praia)と称するヒルガオ科の種類で、夏には非常に長い匍
技を展す。この他に多いのはキク科、それからチドメグサ(俗に
アカリソウバAcaricobaという)の種類、湿地にはカヤ
ツリグサ科、イネ科が多く、食虫植物のモウセンゴケ(Dro-
sera)の一種のみごとな群落を見たが、長さ三糎位のPres-
cottia属に入ると思われる地生菌をも採集した。

これは学界未知のものかも知れない。その他ではマメ科のもの
が多い。ヒメハギの種類でPolygala Cipariss-
ias St. Hil.という草はイタニヤエンItanhae-
nの海岸でも沢山見たが、ここにも分布しており匂いの高い薬草
である。これらの草の中にノボタン科、マメ科、テンニンクワ科
にマンゲの種類が灌木として諸所に見られる。

イカパーラの海水の洗う砂浜には沢山のホテイソウが打ち上げ
られているが、淡水の浮草であるこの草は浜に打ち上げられずと
も大西洋に押し出されれば細胞液濃度の関係で早晚枯れていく運
命にあるが、動物と異って積極的にその枯死から免れられぬ植物
の悲哀がここにある。植物自身は洋々たる河の流れに従って来た
り、人はそれを見て自分の感情で歌をうたい詩を作って来たが、
その落ち着く先は果て知れぬ大洋の中に身を沈めねばならぬとは
何か人の世の姿にも似たところがあるように思われる。

イグアペで他の地帯殊に今度旅行した地帯と非常に異って興味
深く感じたのは、温度と湿度が高いので屋根の上にまで草が沢山
生えていることである。ここは古い町ではあるし半壊の家が沢山

見られ一見廃墟という感じのするところであるが、厚い家の壁には地衣が密着しており、アナナス科の小型の種類さえも見られる。ノートに記してあるこれらの屋根の上に生えている植物をあげると、ウラボシ科二種、ビユ科一種、ベンケイソウ科二種、ヘンルウダ科一種、キク科一種、アナナス科一種、ラン科一種、計九種は普通であるが、時にはマモンの大木の生えていることがあつて驚かされるし、夏にはイネ科の草が沢山はえることと思う。この外町の廃屋の廃にはマンガベイラ *Manga Beira* ジャボチカーバ、肉桂、ニクヅク *Cravode India* が藪の中に淋しく見捨てられているのが見える。

この町の唯一の産物として漁業以外に現在見るべきものは、マール・デ・イグアペの浅いところに一面に生えているペリペリ *Peri Peri* (この辺では略して *Peri* という *Peri* といひ *Peri* とも言う) というカヤツリグサ科の大草であるがこの草の三角形の茎は三米にも達するのでこれを乾燥して蓆を作るのである。この草は南部西部のブラジルの河川にはどこにもよく繁茂しているが、イグアペの如く半鹹半水 (*Salobr*) の地によく生育し、彼の有名な古代エジプトで使用した紙の原料植物 *Papyrus* (学名 *Cyperus Papyrus* *Lin.*) に酷似している。この外、イグアペにはリベイラ河本流の海に出るバーラ・デリベイラ方面にはレスチンが *Restinga* のみごとなものがあると聞いたが今度の旅行では訪問の機を得なかった。

イグアペからサンパウロへの帰路バスの車窓から見たもので尚一つ加えておきたいのは、レヂストロ近くにしばしばバナナ・フロールBanana Flor（又は、バナナ・デ・セメンテBanana de Sementeのあることで、このバナナは紅紫色の美しい苞を有しその中に黄色い花があるが、元来輸入された種類であり、果実は小型黄色で甘味があるが種子は発芽力をもっている。このバナナが今この地帯に相当広まっているが、何時頃輸入されたものかまだ疑問となっている。

〔本文終り〕

付、一私見（イポランガについて）

和やかな水郷イポランガ町に、少し脹れ気味の肩から重い荷をおろして三日程、ゴッホの絵のように曲りくねった屋根を持ち、水彩画家の好みに合いそうな石垣や石段、カノアの舟着き場に洗濯女、画材豊富なびやかなこの町が今度の旅行で一番気に入りました。

こののびやかな町を近代風に染ませる為に、この地方の開発を考えることは、画家末に連なる私としては、余り感心しませんが、郡長ベンジャミン氏が、非常な熱意を以て、彼にとって生まれ故郷であるこの地方の開発に尽力しておられ、レヂストロ植民地を例にあげて、邦人農家の協力を希望しておられましたので、一寸見て感じたままのことを書いて、ベンジャミン氏に口約した

賣の一部をはたしたいと思います。

イポランガ郡は二〇一五平方粁あり、人口七千余といふのですから、実に稀薄な人口です。町のあるあたりは、イポランガ川の流域に沢地混じりになった平地があり、茅ぶき荒壁の貧しい住屋が点々としております。私たちの歩いた時期には、殆ど作物らしい作物を見ませんでした。唯、枯れ倒れたまま収穫もしないミリーヨ畑と、僅かなカンナ畑を見たに過ぎません。

イポランガ川は、昔沢山砂金が出たことがあり、又現に採金できるといふのですが、今はひきあわぬのか、金は取っていないようです。この地帯は、サンパウロ州では、最も鉱物に恵まれた地方だそうですから、新しい鉱脈の発見とか、新しい鉱石の処理法の移入などによって、華やかであつたこの町が往昔の夢を取り戻すことがあるかも知れません、しかし、この方面のことは、専門的でもあり、鉱脈を見つけたとか、大きな資本団が動いてしかの話であつて、ベンジャミン氏のいう、農業の開発とは別個の趣きをもつておりますし、私にも全く知識がありませんから、触れないことにしますが、大変有望だとのことでした。

カンナは、馬の力や、水車程度の装置で、煉瓦砂糖（ラパズーラ）や、ミカンの皮を炊きこんだラパズーラ・デシードラという、ひなびた菓子を作つて、川下の方へ売り出しております。これとても僅かな金高で、ミリーヨの皮に包んだ半キロ程のものが、一、五から三クルゼイロで売られています。丸木舟に積んで出す額を一寸胸算用しますと、三、四〇〇クルゼイロ位のが、石油箱

に入れられて、大の男二人の漕ぎ手が、往復三日がかりで、下川の町シリリカに出しているのを見ても、大した産業とはいえませんが。然し、これが唯一の輸出品です。

その外では、米がよく取れるそうです。私たちも、シッコ・アレモン家で、その穂や米粒も見ましたが、よく実っており、質もかなりなものと思いました。品種は、イグアペあたりのものらしく、半長てのものです。この辺では、米穂を小刀で刈り、穂のまま積んでおいて、食べるだけ臼でつくので、積みである間に大分いたむようがあります。宿で食べさせた米は、つきの悪い米で、色が灰色で、水分の多い米のようでした。聞けば、この町には、米のマキナがなく、シリリカ町まで、丸木舟で、つきに持っていくのだそうです。郡長は、米のマキナを設置する計画をたてていましたが、小さなもので、六〇コントスも要るので、金がないとコボしていました。小型の精米機だけなら、そんなに掛かるまいといって不審すれば、町には電力がないので、蒸汽の動力の設備にかかるのだとのことでした。

郡長が開発しようとする場所は、郡の南方のリベイラの上を渡った先で、バーラ・デ・ツルポという地方であって、是非見ていってくれとの話であったのを、日程の関係その他で、実行できませんでしたが、この地は大分平地のようであります。現在は、豚の原始的な放し飼いが産業で、今は豚の値がよいので、住民の懐は温いとのことでした。バ

ーラ・デ・ツルポに隣接して、シリリカ郡に属する地帯に、六千

アルケールの大平原があるのを、シリリカのマルセール氏は、植民地にどうかと、盛んに私達に説いていましたが、この辺は平地のようです。土地は非常に肥沃であるといわれています。イポラング町から、シリリカ町まで自動車道路が開通する時には、右岸に通るでしょうから、その暁には、一応考えられてよい地帯だと思います。

日記の方にありますように、この辺の人たちは、村人に特有の頑固さから、一向新しい農法や作物を試みることなく、依然として小刀で稲を刈っている有様なので、郡長は、これをなんとか指導するには、目のあたりに勤勉かつ合理的な農法が、如何に実収をあげるかを見せてやらねば駄目だから、是非邦人農家を四、五家族世話して欲しいとの話ですが、さて、邦人農家がここに来て何をするかと、一応考えてみますと、まず米作が考えられます。郡南方バーラ・デ・ツルボの平原地帯で、機械的な農法ができるかどうかは疑問ですが、末はできるでありましょう。もし、二、三〇アルケール位のまとまった土地が、少なくとも牛馬耕できるのであればいいが、町付近の地勢では、そんなにまとまった土地は見当たらないので、いきおい家族的な小農法を取らざるを得ないでしょう。何年かに一ペンは洪水もある沢地が多く、これに米を作るとすれば、耕耘除草に相当な苦労を要すると思います。反面旱魃の被害は少なく、稲の育ちはいいでしょうから、農業の性質は小にして堅実なものでしょう。

次にカンナ栽培です。これも地勢の上から、モヂアナ線イガラ

パーヴァ付近のユニオン製糖工場にあるような規模大なるカンナ園を形成して、製糖業を行なうことは成り立たないが、目下住民が小さく植え、原始的な搾汁機を使つて、粗糖を造っているのを基礎とし、手取り早くはピング製造（勿論既に行なわれ、一寸吞めるピングが市販されている）更には、まずカンナ栽培を奨励して、これを集め、製糖業にいたる企業は、小規模なものなら可能でしょう。

ニュース映画の知識で、甚だおぼつかないのですが、北伯地方で、相当な丘陵地帯を開き、山間の高い所に貯水し、カンナ栽培を合理化している農場がありました。が、灌水という点からは、山腹の高い所に水源を多く持っているこの辺を上手に利用すれば、良きカンナ園の経営もあながち、腕々起伏する大原始林を前に見て、夢物語りではないと思います。なお、こうして拓き得た農場が、ノロ線、ソロ線奥平原のそれよりも、恒久性を有するであろうことは考えられます。

そこで、食う程の米を作った邦人農家が、生活発展の産物を求める場合に、その得意とする蔬菜栽培を考えると、誠に面白いものがあるのではないかと期待します。サンパウロ市までの三六三軒が州道によつて繁かれていますのですから、朝早く出荷した野菜を聖市の夕食の間に合わせることもできれば、午後明るい間にアパイーまで出せば、これを夜中に聖市まで運んで、朝の市に出すこともできましよう。聖市近郊との季節の差を利用して出荷すれば、意外な利を得るのではないかと思います。バタタ栽培は、ソ

ロカバナ奥六〇〇粁以上の地点からどしどしカミニヨン便で出荷されている位だから、病菌のないこの処女地に、充分菌に対する予防を行なえば、無肥料と相俟つて、十分採算がとれるでしょう。雑菜の方はアピアイーまで出して、これをアピアイー、聖市間の定期的な運輸と連絡をとって出すことも一方法と思います。その他、郡役所で、現に栽培しているアバカシーなどの果実類も有望でしょう。兎に角、興味ある人は、一応考えて調査されることを、切望いたします。

概観して、この地方が開発されるであろうことは、アピアイーとの州道が完成し、既にシリリカとの自動車道路の開通も問題とされている今日、残るは時日の問題であります。これは他の未開地との関係があり、そこにいろいろな要素が考えられます。直感的に言えば、この地方は種々な産業上の諸条件による以外に、所謂一搬の人氣に於て、見落とされた地帯だと考えられ、この点大いに他の新開地を考えるのとは趣きを異にしている、それだけは興味が持てるのではないかと思ひます。

尚、産業以外に、今度私たちが通つて来た道筋は、一つのドライブ・ウェーとして賞味されてもよく、サンパウロ州内では稀な変化をもった道程であり、自動車旅行には快適な風光を備えていると思ひます。イポランガよりシリリカまでを、もう少し上等な発動機船（たとえばプロペラ船の機械のような）を準備して、下るようにするのもよし、道路ができれば、レヂストロ、ジュキア

を回って、一巡して来る僅々四日程の道程は、都会の息抜きとして結構なものでありましょう。現にシリリカ近郊のカライター農場は豪商パイバ閥の経営で、サン・ジョアン祭には、多数の都人が集まった由で、これなどは、事業と別荘の二者を兼ねています。

雲湧く連山の眺望とリベイラの流れを都人士に紹介しようという話は、既に有識者間に真剣に考えられており、新聞紙上に論ぜられたこともありますから、この点に対する期待をも添えて、将来を卜することもできましょう。現在の如く同胞の気持ちさが、真の意味に於て、この国に第二の故郷を造ろう、造りたいと希念している時はないと思います。この際に、私としては、この風光明媚であり、落ち着きのあるこの地方が、諸賢に依って、研究調査の対照に取り上げられることを願望する次第です。

もし、二、三家族でも出掛けられるようなことがあり、又植民地経営の計画でも進行するような場合には、従来の涉った轍を踏まず、まず土地人と協調、例えば、共同出荷などの場合に、まず土地人に意見を求めるが如き、あるいは、新作物を独占するようなことなく、住民に対して、手を取って教え、共に栄えんとする気持ちをもってやって戴きたく、従来の如く、他郷からの移住が、忽ち住民を日雇いの地位に陥入らせ、かつての平和を破り、その結果として、地方人のうらみを買うが如きことのないようにしたいと思います。

商業方面にしても、要らざる競争や、顧客の独占をして、地元商人を苦境に陥入れるなどは、避けねばならぬでしょう。レヂス

トロでは、この商業方面に於ける住民の悪感情があると聞かされました。更に森林やパルミットなどを無責任に伐り、土壌の流失を早めるばかりか、風致をも害するが如きは慎みたいと思います。又反面、この地方の入植者は、相当財的に豊かな農家を以て始むべきで、バラバラな無資本の農家がいっては、周囲の生活様式に吞まれ、カボクロ化してしまうでしょう。

郡の方から、農業学校や師範学校の設置を、政府に申請しており、農業学校の方は、政府でも考慮することになっているそうです。この事情は、政府当局が相当に、此の地方の開発に関心を持っている証左でもあります。

このようにおいおいと文化的設備を整って来るでしょうから、新しい植民地の候補地として、十分顧慮の価値がありましたよう。

○

○

屋根傾き、壁落ちた町ながら、夕べには三色の鐘をつき、ほのぐらい川面に、水音しのびやかな丸木舟を、古きヴェニスのように似た街灯のゆらめく灯に迎える詩的な町や、遊子を迎える故里の人の如きすなおな心を持つ町人をしのびつつ、この蕪雑な一文を草する罪を謝します。

☆

☆

おわり

俳句

寝酒

渡部 南仙子

寒夕焼鰯のからだなまぐさし

寝酒して恋ふ喪ひしもののすべて

熱爛に寡夫の貞操水のごとし

寝酒して夢に見たるは妻ならず

着ぶくれて今逆縁の妻妬む

寝酒して仏の妻に信じられ

雨期 深む

武藤 霞城

雨季の夜 泣くも笑ふも妻羸弱（ろいじゃく）

「倅せに」幽かな絶句 雨季の夜

棺の中まで雨季深む 呼び居らん

薔薇のかけらを墓に奉ぐか葉切蟻

接吻（くちづ）けて墓地の石十字（クルス）や季雨の裡

てふてふのみ言葉通じる異国の墓

黄落期

佐藤文六

ひととせの風の祭典黄落期

殻をふむ音身にひびく黄落期

尼の歩の道たしかなり黄落す

黄落期乙女歩はこぶ運動靴

昼月の涙となりて黄落す

黄落期男のハイヒール詩とならず

ア
ガ
タ

長谷川 清水

避難者が戻るデルタのヘリコニア

七滝の壺でしアガタの秘を探る

はらからに遭えり異邦の次郎柿

肌寒の声の変調ヴンテビー

泡立草地権争ひいつ果つる

岩塩を厩舎に頒つシャビエル忌

三粒の新米

鈴木 光 威

夏逝くや沈黙の貝 商品です

ミーリヨの黄はや混血の筋立たす

薇を飼う男 朱筆の失恋記

世の動静 顔にひろげて葡萄吸う

ピポカ売る名優 日焼けの子ら集む

皿に乾く三粒の新米 離婚以後

飲まず吸はず石ともならず耕す父

マルゴーズ遠くの罪へ女佇つ

川 柳

安 藤 魔 門

郷愁を断ち切る ― 曝し首

北辺の浪の高さよひもじさよ

天が破れても唄いつづける蛙

歴史の曲り角で失礼する男

残照を裏切る僕のぼんのくぼ

人権に慰斗つけようかはがそうか

天を憎み地を憎みたった一人

憧れと悲みと腹の立つ五月

創作 八句

森 山 天 拝

褒められ乍ら活け花で虚脱する

影法師の枕でのたれ死んだ夢

振り止まぬ尻尾に吊っているドラマ

冷えているレールばかりを敷く暦

拳骨を生かした骨の痛む夜

春の絵に酔って落葉の枝を張り

ちぎれ雲春を写して流される

逃亡も出来ず無題を撫でている

岡村 鈴蘭

雲と行く流浪の旅もたそがれる

急がねば夕陽が包むおんな坂

ふまれても小さな花にあるいのち

てのひらにジギルとハイド踊らせる

子と親の歩巾へ時差にあるもつれ

茄子漬けておんなひとりの静かな日

ひとり居て心の窓を明けてみる

母の鈴子等の背後で振りつづけ

“コロニア文学新人賞”

応募作品について

尾 関 興之助

今年の“コロニア文学新人賞”に応募した作品は二十一篇あったが、その大方はコロニア文学界のベテランで、新人とよぶには、ふさわしくない。一人や二人は新しい顔が出てともという期待を裏切って、いずれも古顔ばかり、これでは新人賞とはいいがたい。いまのところ新人は頭打ちというところか。

以下、わたしの採った数篇について選考後記を付してみたい。

「血の地所」

山口道夫

ストーリーは多少甘い、読み応えのある作品である。たきという従順な働き者の女が、段々魔性を帯び、遂には精神錯乱した娘に殺害されるというかなり鬼気を含んだ終結である。このラストシーンはよく描けている。女主人公の精神的変化の推移描写には無理がない。推したい作品である。

「樹 傷」

藤光 決

なかなかの力作である。よく書きこんでいるが、ややだらだらと描写したため作品が冗長に流れ、のびたものとなり、意味を弱めている。むしろ簡略法を生かし、きりつとまとめたかった。

特務機関の出現は唐突だが、全体を壊しているとはおもえない。幼稚な心理描写は避けたいところだが、このような作品も近頃珍しい。

「大根の花」

矢島健作

時子という女性を通じて、フアゼンダ時代の思い出を題材としたものだが耕地の生活描写がくどくどしく、転結のないことが、作品を弱め、魅力に乏しいものとなった。もつと印象的に捉えて省略した手法を入れないと、他の類型的な作品と大差ないものとなる。

大きな焦点のない凡作である。

「折れる葦」

滝井康民

冠状動脈硬化に罹った病人の闘病日記である。感傷に溺れず、淡々と自己を客観するのはいいが、パスカルの葦がそのまま出て来たり、エリコを読んでブラジル文学研究云々というのも気負い過ぎた感じである。文章も悪くないし一応読ませる迫力をもった作品だが言葉の奥に広い世界がない。

「青いカビ」

新井知里

身边雑記、一応まとまっているが、まだ作品を構成する重要な書割に乏しい。表現も目が粗く感性的にもぺったりなところがある。ユーモラスな精神は買うが、作品が平板である。

この外、大岩由美子「ロウロの旅」という童話はおもしろかった。

石城秀節の「偽装狂態」や西幸夫の「死弾を教える」などの通俗ものも、それぞれよいところもあるが、作品の底が浅いところが大きな欠陥である。

文章が練れていないため読みにくいということも二人の共通点である。

全体にいえることは、短篇という形式の中に一つの長い人生の全過程を印きこもうとする無理な手法をとるということである。一寸した事件なり行為から広く人生が見え、作者の世界観に誘いこむことが、作品のおもしろさということである。

新人の台頭を待つことにしよう。

（回想記）

私の中のアrianサ

武 本 由 夫

まえに

先頃、弓場さんか、事故でなくなった。彼の友人・知己が、邦字新聞紙上で、業跡や人柄を語り、その死を悼み惜んだ。それらの文章を読んで、彼の歩んだ人生を追想し、その性格と時代と環境に思いをめぐらせた。こういう人物は、今後二人とコロニアに現われることはあるまい、というような感想をもった。

私は、弓場さんの豪放、あるいは放埒、または強引とも思われる生き方について、その背景となった、アrianサ村、特に移住初期時代の気風といったものを関連させて考えてみた。勿論弓場さんの生き方は、その性格と思想の規制するところが大きい。しかし、その独自の生き方を以て生涯を貫ぬき、周囲の人々を納得させていたというのも、アrianサという、少々風がわりな環境と、戦前のブラジルのあの伸びやかな時代であったからではないか、ということも考えられた。というのは、私が創設初期の第一アrianサの出身で、短期間ながら居住した。そのささやかな体験からも、何となく、そうした思いもわくのである。

このような感触に誘発されて、私は、これから、そのささやか

な経験の二、三を思い出し、当時の「村の気風」といったものに触れてみたい。所謂「弓場式」の生き方が、それほどの不自然さもなく、受け容れられ、ある面では、むしろ称賛されたことも、「どこかでうなずけるのではあるまいか。」

世間知らずの（今でも、こうだが）青二才時代の、しかもグウタラな生きザマを書く、というのは、愉快なことではないが、少しく綴ってみることにする。

（一） 麻雀夫婦

私は、同郷といっても、渡伯に当面して、初めて見知った川田氏（仮名）家族の一員ということで、第一アリアンサの三区に入植した。川田氏は、同地の多数入植者同様、日本で土地を買い、多少の資金を持って入植した人であった。若夫婦と幼女一人の家族で、その中に、世の中の事は、何も知らない、田舎アンチヤンの私が加わったわけである。

幾許かの資金を持つ川田氏は、入植すぐに新家屋の建築に取りかかった。

農園の仕事はカマラダ委せ、カミニヨンを買って運転手をやとい、運搬業をはじめた。といっても、車は夫婦で、A市などに遊びに出る足のようなもので、仕事の方には、熱心でなかった。

私の仕事は、農園や庭まわりの除草少々、買い物、その他の使い走り、時に子守りなども、というぐあいであった。

朝起きて、庭に立っていると、夫人も出て来て、空を眺めている。

「ちよつと、ちよつと、あの雲どっちへ動いてるッ」

「そうですね、此方へ来てるみたいですね」

「でしょう、昼から雨ですよ、きつと」

「さあ、どうですか」

「降りますよ、ひどく。草取り仕事などしても無駄ですよ。みんなついちゃって」

話は、最初からわかっているのである。

「だから、麻雀しましょうよ」とくるに決っているのである。

川田夫妻は、渡伯するまで、外地に住んでいた。夫婦揃って麻雀好きである。特に夫人の方が熱心であった。土曜、日曜は欠かさず同好を集めて、朝からやっていた。休日であっても、雨の日、いや雨でなくても、降ることに決めて、やっていた。

私たちの入植は、開植四、五年後であつたが、アリアンサでは、当時、若者の間に、麻雀が流行していた。力行会、植民学校など出身の独身青年が多かったので、セマナでも、声をかければ、すぐに馳せつける若者に事欠かなかった。どうにもメンバーが揃わない時に、私が狩り出される。オカゲで、私も、日ならずして覚えてしまった。

川田夫婦は、あまり仲のよい方ではなかつたが、麻雀に限って、夫唱婦随、婦唱夫随で、すぐに、完全に意見が一致するのであつた。

これでは、仕事になるわけがない。

二年余りの間に、手持ちの金を使い果たし、土地を売りとばして、さっさと帰国してしまった。帰る時、「君の両親から、預かって来たのだから、自分たちと一緒に帰国しよう」と言ってくれた。しかし、私は、もう少し、この国が見たかったので、「一足遅れて帰るから」というような事で、踏みとどまった。「ひと足」のつもりが、ずるずると遅れ、いや病気だ、戦争だといっている間に、とうとう動けなくなつて、何となく居着いてしまった。その為か、未だに「心ならずも」といった気持ちだが、心底に残っているようである。

（二） 買い物物の帰りで、

川田氏夫婦は、外地の、それも都会人であるから、食べ物に贅沢であつた。

いきなり、ノロエステのマットの中に放りこまれた（もつとも、自分で選んで）のであるから、入植その日から、不平たらたらであつた。米、フェジョン、バカリヤウ、カルネ、当時、その外には、殆ど何もない。何かないかと、三日おきくらいに、私を買い物に行かせた。半日ばかりで、赤土埃りの街道を、中央区の組合売店まで往復するのである。なにしろ、金はあるのだが、物が無いのであるから、齒がゆいのだろう。ちよつと珍らしければ、どう考えても不要と思われるものまで、買って来いという。主命で

あるからして仕方ない。買いには出るが、途中で遊んで時間をつぶす。頃合いを見はからつて帰ってくる。”あれは、もう売り切れだった”などと嘘を言う。バカバカしくて、まともに聞いてられないのである。

ある日、その買い物。何時もは、三区から四区に出て、次に移住地縦貫街道を往復するのである。だが、この日は帰途だけ、近道をした。墓地の前からマットの中の細道を通って、四区のはずれに出れば、すぐに三区である。

この日、売店に、購入下命の品物が切れていた。白い空サッコを肩にかけ、マットの中にはいつていった。かなり道中が長いので少々気味悪いが、小走りで通り抜け、ぱっと明かるい珈琲園の端に出た。ひと息ついて、あたりを見まわすと”園辺の低地にある野菜畑が目に入った。よほど丹精な園主とみえていろいろな野菜を立派につくっている。

川田氏は、もとより、私も野菜のつくり方は知らない。主命なれば誰もなく、ひとに教わり教わり、私がつくってみる。だが、なかなかうまくいかないのです、ワガ家は常に慢性野菜不足症を呈していた。

私は、すぐそこに豊かな野菜畑を見て”天の与え”と感じた。トマテ、レポリーヨ、ダイコン、ニンジン等々、白サッコいっぱいに詰めこんで、うんさかかついで帰ってきた。意気揚々、”これ見よ”と台所に放り出して、汗をふいていた。

「アラまあ、こんなに沢山、どこから頂いたの」

「貰ったんじゃないです」

「買ったの」

「いいえ」

「じゃ、どうしたのよ」

「途中の畑から、取って来ました」

「どこをうちのを」

「知らないです」

「ま、あきれた。黙って取って……、大丈夫なの」

「いつか、隣りのおばさん、黙って取っていいって、言ってたでしょう」

「お隣りのは、許可貰ってあるけど、よその駄目よ。大変だわ」
後で、おわびに行かせられた。それは四区のK氏の野菜畑であつた。「どうも」と頭をさげた。K氏は、最初、怪訝な顔をしていたが、事の次第がわかると、破顔一笑、片手を眼の前で二、三度振って、快く許してくれた。

この村の人たちの、物の遣り取りを見ていると、まったく、くつたぐがない。自由で寛大で、実におおらかである。だから私は、野菜などというものは、何所の誰が、黙って取ってもよい、というのか不文律になっているのか、と合点していたのである。この村の雰囲気に乗って、私はごくごく自然な気持ちで白昼常々と、他家の野菜を盗んできたのであつた。

雨期には、よく道路修理をする。各戸から一人ずつ人夫を出す。私はいつも、川田家代表で出ていた。低地にかかっている土橋をなおしたり、崩れた土手を繕ったりする。みんなの仕事振りを見ていると、悠々と気楽に、働いている。むしろ、たまの会合を娛んででもいるようにさえ見える。鍬を動かしてはいるが、しきりに話しあっている。日本の政治、経済の話、日本や外国の演劇、映画の話、私は、ただ黙々と働き、ただ開いているばかりで、話の仲間入りをしたことはなかった。

昼食の時間になると、はやばやと木蔭に車座をつくる。各自持参の弁当をひろげる。

「オットット、忘れるところだった」

などと言って、区長が、藪かげから、ガラフオンを提げてくる。「それそれ、それがタイセツたい」などと、九州弁で、もったいそうに受けとる人がいる。

そして、各自持参の湯呑みについで回るのである。

私も、入植はじめての道路修繕に出て、いきなり、この湯呑みの洗礼をうけた。かいでみると、妙に強い香気がする。

「何ですか」

「知らんかね。ピングという酒だ」

「酒ですか」

「ちよつと強いが、うまいぞ」

見まわすと、殆どの人が、きゆうつとやっている。中には、立

て続けに二杯目を勝手にガラフオンからついでいる人もいた。

私の家は、代々飲ん兵衛で、祖父も父もかなり強かった。私も、まだ酔うほど飲んだことはなかったが、飲める口とは、かねがね思っていた。

「さあ、ぐつとやれ、ぐつと」

「いただきます。」

一口含むと、鋭い痛みが喉に突き刺さり、強烈な臭いが鼻を貫いた。思わず吐き出して両手で口を覆って、かがみ込んでしまった。すると、周囲からどつと笑い声がおこった。

「どうだ」

「いやあ、きついですね」

「なあに、あと二、三ばいで馴れるよ」

「もう、要りません」

「まあ、そういうな。」

誰かが、私の手から湯呑みを取りあげ、又ついで、むりに持たせてくれた。捨てるのも失礼、みな飲んでいるのに、独り飲めないというのも業腹、決心して、ぐつとやったら、今度は少しばかり食道を通過した。すると、じつと、私は集中していたみんなの眼が、ほつと一様にほころびた。

「おつ、いける、いける。立派に及落」

何が及落なのか、わからない。しかし、みなが手を叩かんばかりに褒めてくれたので、うれしくなった。これが、そもそもで、その後道路修理に出る度に飲まされた。いや、しばらくすると飲む

ようになった。飲む度に、褒めてくれるので、得意になって飲んだ。そして、だんだん手があがり、後年、いろいろ酒の上の失敗を重ねながら今日に及んでいる。思えば、これら不祥事の源流をたずねるとが第一アリアンサ三区に発していか知られるのである。

この三区というのは、第一アリアンサ切つての酒豪区であると聞いた。なるほど、軒並み、どの家でも客間には、デンとピンガ樽が据えつけてあった。

ただし、川田家は、夫婦ながら甘党で、酒の気はなく、私も家で飲むことはなかった。

区内各戸回り持ちの布令役番で、一軒々々回ることがある。門口で口上を述べ、
“ハイお次ぎ”というわけには絶対いかない。

門口で「今日は」と声をかけると、主人公が飛び出してくる。
「さ、さあ、さあ……」と家の内に引っぱりこまれる。腰かけさせられる。

間髪を入れず、樽のトルネーラがひねられる。コップにピンガがなみなみ。

こちらが、一口飲むのを見届けてから

“さて、御用件は”と来る。それまでは、当方、何一つ喋る暇が与えられないのである。

わずか二〇戸足らずの区内を一巡するに朝から晩まで、下手すると二日ばかりになってしまうことさえあるという始末。

私は、もともと丸で愛橋のない唐変木であるが、酒が飲めると

いう一事だけで、村の衆の末席に坐ることができるようになった。

(四) 鹿を飼う

私のいる川田家と、谷を隔てた東隣りは岩本珈琲園である。園主の岩本氏は、退役海軍少佐とかで、威厳にみちた長身瘦軀の方であつた。私たちより、二、三年早く入植していて、最近御病身とか。私は見たことがなかつた。夫人は大柄な美人で、子供も男女二、三人いるようであつた。この農園も、仕事は殆どカマラダ委せで、夫人が時々美しく着飾って出かけるのを見かけた。

月の美しい夜など、御主人が尺八、夫人が琴、キンシツ相和す演奏がおこなわれた。私など、谷を渡つて来る、その鰯々たる妙なる音色に、そぞろ郷愁をそられたものである。

この美人奥様は、村の若者たちになかなか人気があつた。教養豊かで、物柔かく、しかも少々コケツシユでもあつた。青年会の会合などのあと、二、四人の若者が、時々同家に流れていった。陽気に騒ぐ声が、宵ふけるまで、聞えて来ることもあつた。

私も入植三か月ほど過ぎて、青年会への入会を要請された。別に断る理由もないので、加入させて貰つた。ある日集会が終わり、常連が、美人奥様訪問に流れていった。私も家が近所なので、その尻にくつついて行つてみた。

常連は、勝手にレコードをかけたり、トランプを持ち出したりして、まるで我が家のように無遠慮にふるまっていた。みんなに

むかって、奥様が、ふと話しかけた。

「そうそう、昨日、どこの仔山羊か知らないけど、うちに逃げてきたの。門先で倒れて息も絶え絶えなんです」

「つかまえてありますッ」

「それがねえ、足が弱いのに、死物狂いで逃げまわるのよ」

「どこのかなあ、つないだッ」

「それが、つかまらないの、子供たちも手伝わせて、やっとシツケイロに追いこんであるわ。」

「この辺で山羊飼ってるの、知らないか」

「知らんなあ、行ってみるか」

奥様の案内で、ぞろぞろ裏の豚小屋の方へ回っていった。見るとシツケイロの上まで板で塞ぎ、嚴重に押し込めてあった。薄暗い中を板の透間から覗いていた一人が、突然素っ頓狂な声をあげた。

「こ、こりや、山羊じゃないがあ」

「ほんと」

「奥さん、これ鹿、鹿ですよ。ヴェアードです。わあ、こりや凄いい」

「えッ、これ鹿ですか、初めて見た。　　パパ、パパ、鹿ですつてよ、」

奥様は、大声で叫びながら御主人を呼びに行った。若者たちは、腹をかかえて大笑いをした。鹿を飼う必要ないと、若者たちは、さっそく大騒ぎをして仔鹿を屠殺した。その夜は、思いがけない

大御馳走の大宴会となった。奥様ばかりではない。私も初めてヴェアードなるものを見、その肉の相伴にあずかった。

(五) 隣家の好意

日本に帰る川田一家を見送って、サントスにくだった。さらば、さらばと船に別れをつけて、サンパウロに上って来た。あちこち、ぎっと見物して、私は、さっさとアリアンサに取って返した。

何のココロザシを樹ててブラジルに來たわけでもなく、つい風の誘うに委せてやって來た私である。田舎者のアンチャンには、目まぐるしい都会など、何の魅力も感じられなかった。谷の蛙の声を聞きながら、静かに読書を楽しみ、ゆっくりと眠ることのできる、アリアンサは、既に第二の故郷という感じであつた。

川田一家を送って出る時、トランク一個の荷物を預けておいた、前隣りの中谷家に立ち寄つた。

「只今、かえりました。」

「よく歸つたなあ、もう歸つて來まいと思つていたよ」

「どうしてッ」

「若いもんが、こんな山の中にいても、つまらんからなあ」

「僕、アリアンサが好きですよ」

「ふうん、」

中谷氏は、不思議、といった目になったが、すぐに、いつもの顔で、

「いい所へ来た。これから飯だ。食べながらサンパウロの話でもきこう」

昼食後一服しながら、サンパウロ旅行の話の続きをしていた。中谷氏は、じつと私の顔を見ていたが、

「……で、これから、何所へ行くんかね」

「まだ、決めてないんです」

「おい、おい、まだって、どうするんかね」

「中央区に出て、ペンソンにでも泊ろうと思います。それから、行き先を探します。いろいろお世話になりました。」

「そうかい、行くかね。……しかし」

私は、何か言いさして、口を閉じた中谷氏のそばを離れ、夫人や、子息の明君、中谷氏の実弟で、青年会では仲間の一人、信治君のところへ挨拶にいった。いよいよお別れというので、

「じゃあ、また」と腰をあげようとした時、夫人が、中谷氏に言いかけた。

「うちでも、もうすぐ、米作るのに荒山伐るでしょう。ちよつと、武本さんに手伝って貰ったらッ」

「そうだ。山伐りがあったなあ。小面積だし、人夫に渡さないで、うちで伐るか。君手伝ってくれるかい」

「そうしようよ。わたし山伐りの黒ん坊が出入りするの、いやですよ」

「まったくだ。君たのむよ」

こんな事で、いったん持ち出したトランクを家の中にかつぎこ

み、しばらく中谷家に止どまる事になった。

中谷氏は、日本の故郷では、村長までやった人とかで、なかなか素養の深い、抱擁力のある人であった。夫人は温和な苦勞人で、よく氣のつく人であった。信治君、明君は、若者同志で、氣心も知っており、別に氣兼ねのいる家でもないものであった。私は、至極自然な気持ちで、しばらく中谷家の世話になることにした。

珈琲園の方の仕事を片づけ、山伐り、枝打ちを済まし、米の蒔きつけも手伝って、私は日々を愉しく働いてきた。

私は、別に何も言わなかったが、実は知っていたのである。中谷家として、新たな山伐り、米蒔きも、小面積であって、本当は、家内四人で労働力は足りるのであった。何も、わざわざ私を雇い入れる必要はないのであった。ただただ、独り遠く異郷に在って、いずこを宛となく、さまよい出ようとする私への同情、憐憫の情にたえず、救いの手を伸べてくれたのである。それは、中谷一家が、見捨てておくに忍びぬほどに、私という人間が、世間知らずのデクノボウで、心もとない存在であった、ということでもあろう。中谷一家の好意は、しみじみと、胸にしみ、私は今も忘れない。

（六） 倒れた方へ

アリアンサでは、創設時から十年位の間、入植者は、現金を持たなかった。

入植と同時に所持資金は、組合事務所に預けることになっていた。

そして現金の代りに、組合の発行する金券を以て、預金中から必要額を引き出し、組合売店から、必需品を購入する、というシステムになっていた。この金券は俗にカスクードといわれ、移住の最盛期には、近隣植民地から、遠くA市の伯人商店でも通用したといわれている。

しかし、その後、金券は回収され、物品売買は、現金制となったという。

私のいた頃は、この金券時代であって、アリアンサを出るまで、現金を見ることはなかった。私は、別にこれという事業を興す目的も持たず、まして、移住の理想実現などという大それた望みも抱いてはいない。風に飛ぶ穂わたのように、一所不住の浪人である。それに経済観念に乏しく（これは、現在も、そのままであるが）囊中無一物であっても、身にしみて不自由を感じるということとはなかった。今日を飢えることなく。今夜を眠るに寝床あれば、それで足りているのである。移住については、無目的、無理想であって、野の鳥獣とかわらない生活態度を持していた。いわゆる「極楽トンボ」もいいところである。

中谷家の米蒔きが終わると、私が同家に止どまっている理由はなくなっている。にもかかわらず、居心地のよいままに、終日をぶらりとして暮らしていた。中谷氏が、いくら度量の人とはいえ、むだ飯を食い、終日書物に目をさらしている人間を、何時までも放図しておけないのは当然である。

「武本君、君、どこかに行く宛あるんかね」

「別に宛てなんかないですよ。」

「このまま、家にいるのかね」

「どこへ行くかなあ、都会はきらいだし、」

「どこへも行きたくないなら、居てもいいよ。しかし、どこかで働いて、食費ぐらい入れてくれよ。そうでないと、君自身、居づらいだろう」

「どこか、カマラダに雇ってくれる家、あるかなあ、」

「聞いてやってもいいが、自分で探す方が早いよ」

「じゃ、明日から探してみるか」

中谷氏も、私の呑気さ、社会意識の低さにはあきれたようである。「変な奴だなあ」というような、”妙な人間だ。まるで馬鹿とも思えないのだが”といった顔で、私をじっと見ていた。

次の日から、少し早目に起き出して、エンシャーダをかつぎ、西に東に、近所の農園に仕事をさがしに行った。行ってみると、どこかで、結構仕事にありつくことができ、最低食費くらい稼ぐことができた。一日だけ働かせてくれる家もあれば、一週間続けて来い、といってくれる家もある。マングロン作りだ、家の壁塗りだ、というような仕事もある。井戸掘りもやった。しばらくすると、一種の名物男のように思われているフシも感じられた。

「おう、今日は、うちに来てくれたかい。そうかい、そうかい。エート、何をやってもらうかなあ……」

考え考え、何か仕事をさせてくれた。多少無理をして、私に仕事をくれているような感じのすることもあったが、どこでも、気

持ちよく働くことができ、楽しかった。

気ままに労働し、夜は読書し眠る、こういう生活がしばらく続いた。アリアンサは、いわゆる文化人村で、どの家を覗いても、客間の棚には書物がぎっしり詰っていた。借覧を申しこむと、みんな快く許してくれるので、読書に不自由は全く感じなかった。私のアリアンサを去り難てにしたのは、これも一つの理由であった。アリアンサには、私などのボンクラ頭ではこなし切れない、相高度な書物もあって、歯は立たないが、見るだけでも楽しかった。そうした書物が、その後、どんな運命をたどっているだろう、というような事を、今も考えることがある。

ある日、これまで、仕事をたずねて行ったことのない家に行ってみた。大変気持よく働かせてくれ、親切に、いろいろな事をたずねたりしてくれた。

昼食の時、夫人が、クスツと笑ってうかがうような目をした。

「なんで、今日うちに来てくれたッ」

「なんとなく……」

「武本さん、何時、うちに来てくれるか、思っ、待ってたんよ」

「そうですか、お宅は少し遠いから、」

「武本さん、毎朝、エンシャード、まっ直ぐに立てて、その倒れた方向に出ていくんだそうね、ほんとう？」

「そんなことないです」

「でも、村の人、みんなそう言ってるもの、評判よ」

「へえー、知りませんでしたね」

「朝、武本さん見て」 あっ今日は、うちの方向に、エンシャーダ倒れたんだな」 思ったらおかしかったわ」

「これは、どうも、」

御飯をたべながら、みんな笑ってしまった。村の人々は、さして薬にもならないが、毒にもならぬ奴、という風に見てくれていたらしく、余り労働力のない私のような者でも、何となく、目をかけてくれたようである。

その頃、二十才過ぎの若者なのに、私は、労働と契約の関係を、明確に把握していなかったように思う。労働の前の契約があるということとは、知っていた。だが、それは会社などの場合で、農業労働は、その場、その場で契約すればよいとばかり思っていた。その後、私はアリアンサを出て、他郷にさまよい、自分のアリアンサ時代の行動が、如何に非常識なものであり、滑稽で、遇かであつたか、ということ进行を思い知った。だが、そういう、世間知らずの若者が演ずる奇矯な行動や、遇行なども、寛大に見過し、気まま勝手にふるまわせるおおらかさが、創設初期のアリアンサにあつたことにもよると、思われる。

アリアンサには力行会員が多く入植していた。力行会々長の永田稠先生は、移住者に、「コーヒーをつくるよりも、人を作れ」と言われそうである。キリスト教が、村の中心思想であつたことなど、考えあわせると、村人の宏寛さ、清明さ、そうした気風もわかるのである。この暖かく、おおらかな気風に便乗して、私など、どうみても感心できない、グウタラ暮らしをしたことは、ま

ことに申しわけないことであつた。

弓場さんが“弓場式人生観”に徹し、“弓場式処世観”で押し通し、その生き方を、多くの人に肯定させたのは、立派であつた。生涯、無目的、無理想、不徹底な人生を歩んで来た私など、只々感じ入るばかりである。

私が、ここに、アリアンサ時代の恥多き、思い出を書いたのも、弓場さんに、人生と方向を決定させた創設当時のアリアンサを忘れかねればこそである。

〈註〉 弓場氏と私以外の登場人物はみな仮名を用いた。

流 離 の 歌

わがふるさとに椰子ありて

サビアひた啼くそのかげに

ここにして聴くさへづりの

似るによしなきうれいかな

わが大空は星に富み

ひろ野に花の咲きまさり

いのちあふるる森ありて

愛（めぐみ） ゆたけきわが生活（たづき）

夕べさみしく偲びみる

幸多かりしかのくによ

わがふるさとに椰子ありて

サビアひた啼くそのかげに

ふるさとにのみあまたなる

妙なるもののここになし

夕べさみしく偲びみる

事多かりしかのくによ

わがふるさとに椰子ありて

サビアひた啼くそのかげに

な召しそ神よ わが魂を

ふるさとにわが帰るなく

このくに見むすべもなき

うるわしきものえ待もせで

サビアひた啼くかの椰子に

また逢ふこともあらずして

ゴンサルヴェス ギラス

古野菊生訳



創作

青いカビ

新井 知里

先程から知子はベットのの上にすわり込んだまま、肩を落としてしくしくと泣いていた。

夕暮れが寝室の小さな窓を包んでいた。

窓には黒ずんだ桃色のカーテンが、あせた花びらのように揺れている。

「ママ、どうしたの？」

末子の健が入って来て、おどおどした目でたずねた。

「パパがね、ずっと前、友達からお金借りてまだ払ってないんだって、馬鹿だね。パパは、本当に馬鹿だね」

「うん……??」

九才の健に、こんな話を話しても解らないと知りつつ、知子は目尻にたまった涙をパツパツと指ではじきとばした。

「兄ちゃん兄ちゃん、パパがね、お金払ってないんだって、ママがね、泣いてるよ」

健の大きな声に驚いて、二人の兄が次々に夕暮れの部屋に入ってきた。

「パパがどうしたって？」

中学生の長男はどんな時にも落着いている。

「パパが五年前の借金まだ払ってないのよ、ほら日本に帰った田口さん、知っているでしょう。あの田口さんからこんなに厚い手紙が来たのよ」

「五年前って、僕達が日本に行った時の借金？」

「そうよ、あの時田口さんが貸して下さって、ママはずっとそのお借りしたお金が気になっていつもパパに聞いていたの、そしてらもう払ったと言ったのが二年前かしら、すっかり安心してたのに……」

「もう一度はつきり。パパに聞いてみた方がいいよ」

落ち着いた長男をよそに、顔こそ父親似だが神経の細かいことでは母親似の次男はもう青くなっている。

「ごめんね、あなた達の心配する事ではなかった。もう向うに行きなさい」

知子は子供達と追いたてて、もう一度便箋にびっしり書き込まれた田口の手紙を読みなおした。

「奥さん、私はウソをつかれていました。あの金は家内が仲居まですて働いた、大事な大事な金なんです。それを今だに返す返すと言いながらウソをつかれています……」こういう書き出しで始まった長い手紙の終りには、夫の清が最近田口に送った手紙のコピーまで入っている。

夫が五年も借金をそのままにしておくはずがない。

確かに二年前にすっかり払ったと言ったのだ。彼女は結婚して今日まで夫を疑った事がなかった。だがこのコピーには「これか

ら毎月払って行きます」などと書いてある。これは今月になって書いたものだから、ひよっとすると今だに払ってないのではないかと彼女の胸ににがい疑惑がとめどもなく湧いてくる。

金銭にあまり執着を持たない夫を、ある時は齒がゆく思ったりある時はそれだけ心が清いのだなどと思つて来た彼女だが、こんなショックを受けたことは結婚してかつてなかった事である。たゞ夫のウソがうらめしく無性に悲しくなってくる。

彼女にとってせめてもの救いは、田口の手紙の字がかなくぎ流でひどく品格がない事と、最後に「バイバイ」と書かれてあることである。四十を過ぎた男がバイバイなどと書くのはあまりにおそまつ過ぎる。

田口と清の仲は、同じ日系会社の同じ課にたまたま同じ年の一世同志がいたことから始まっていた。

西山清一家が訪日する時、その旅費の一部を心よく貸してくれた田口に、彼女は少なからず感謝していたが、あれほど金に執着の強い田口が、ただの友情から貸したのではないことを彼女はよく知っていた。

この訪日は、いわば清がサラリーマン生活から脱出して何か独立した仕事をみつけることにあった。

妻の知子が単純に故郷恋しさに同行したのとはわけが違っていた。その為三カ月の帯在中彼は計画した事業を調査する為、妻や子供達を故郷に残しそのほとんどを東京で過ごした。

何か自分で仕事をしてみたい、倦怠と惰性で毎晩友人と酒を飲んで帰る十年のサラリーマン生活から、清はぼつぼつぬけ出したいと思った。二日酔いの朝など、ふと我れに返って考えると過ぎた月日がこの上なく軽いものに思われるのだった。何か自分で独立して仕事がしたい。こんな思いにかられている清を、一緒にいる田口も同じ思いで見つめていた。

そしてある日、突然自分も彼と共に、その独立という男の夢を追いはじめていた。その日から田口の夢は日増しに華かに色ずきはじめた。「そうだ、もうこんなみじめな薄給のサラリーマン生活とはおさらばさ、よく今まで我慢して来たものだよ、妻の公子まで働かし、家賃の安いこのポロン生活ともおさらばさ、二人の若い息子達もこんな暮らしはつらいだろう、よし、この際食事まで切りつめて貯えた虎の子の金を清に貸そう、なにすぐ元を取るだろう。貿易会社東洋商事、すてきだナア、さしずめ清が社長、俺が専務というところかナ」

田口の夢は次からからえと広がって果てしがない。

清に金を貸す頃には、田口の夢の方が清の漠然としたそれよりずっと大きくふくらんでいた。

そして清がブラジルに帰った次の日には、もう都心のビルの中に事務所をみつけた。

清の丸い軀つきと違い、田口はスラーと細長くその白い顔はよくシナ人に間違われた。外形が違ふとおろ、この二人はことごと

にその性分も違っていた。

何事もおっとりして、率先して自分でやり進める事のない清とは反対に、田口はなにかにつけて手早かった。事務所を見つけた次の日には、中古車を月賦で買い入れ、四組の机も用意し、その上に、これも中古のタイプライターをちゃんと置いて、一応の事務所の格好をつけてしまった。その間、清のした事は、部屋の床をきれいに磨き、白い壁にカレンダーなど配置よく掛けることであつた。

法的な手続きがすむのを待つて、田口はこれも素早く妻の弟と、その友人の青年を連れて来て社員にした。

「西山くん、これでいよいよ会社が出来たよ、後は君が日本の兄さんと連絡をつけ、ブラジルにめずらしい物をどんどん送ってもらう、運転資金は当座は僕の虎の子の金を当てるとして、それは社に貸す形をとるよ、給料はお互い最低限度の生活が出来るだけしか持ち出さない。儲けた金はみな運転資金に廻す、いいね」

「そうしよう」

こんな形で始まった東洋商事は、五カ月後には電話も買いいれ、一応調子良いスタートを切ったのだった。

あつという間に一年が過ぎ二年過ぎた。

清は家の中では仕事の話はいつさいしない夫である。十年のサラリーマン生活も彼女は、ほとんど夫の勤め先の事など知らずに過ごした。時には他の奥さん達のように、少しは夫の仕事の事も

知りたいと思ったが、彼はおっとりした性分とはよそにそうした自分の仕事のことは頑として話さない。

妻は家の中をしつかり守り、子供の小さいうちは子育てに誠心すべしと言うのが彼の持論である。

「あなた会社はうまくいっているの」

「あゝ」

「この二年間、終戦時代のような耐乏生活だったわ、その為食べざかりの子供達にも充分食べさせてやれず、子供達の心まで卑屈になるようで、悲しくなってしまう」

「子供は耐乏生活の中で育つのが理想なんだよ、みてごらん、家の子供達はそのことでかえって発憤して育っているから」

「それはそうかも知れないけれど、本当に会社はちゃんと儲っているの」

「くどいねえ」

清は不機嫌な顔をして小柄な妻を見おろしている。

「会社に自分達の自動車があるのに、あなた一つも運転しないから、みんなあの若い青年達のナモーラ用になっているんでしよう」

「仕事のことに女が口出すのは嫌だと常々言っているだろう」

「この家も家賃がいらないからいいようなものの、一週間に五十コント百コント渡してくれるだけでは精神的にまいってしまいうわ」
知子はお米を一キロ買いするような生活に疲れて来ている。肉など半キロ買うのもこの一年に何度あった事だろう。

こんな生活をしていると、つくづく十年間のサラリーマン生活

が懐かしく想われる。あの頃は肉ぐらい買えた。

この頃はスーパーマーケットの肉を買う人々の行列を羨望の眼（まなこ）でながめているのである。

都会のサラリーマンが一番苦勞するのが家賃である。知子達が二年間の田舎の生活からサンパウロに引越して来た頃は、月収の半分以上が家賃に取られた。

あの頃彼女は毎日自分の家がほしいと切実に思った。お百姓が自分の農地を持つと落ち着くように、彼女には家を持つことが何よりこゝブラジルに落ち着く先決問題と思われた。だが彼の安いサラリーだけではなかなかどんな家でも買うことは無理であった。なんとかしなくては、彼女はこゝブラジルまで一人で来たのだから、これからはどんな事にも自分に忠実に行動しようと思った。隣りの奥さんがコンニャクを作っているのを見ると、すぐ教えてもらってそれを作って売った。

遠い所から買って来たコンニャク芋を、やわらかくなるまで茹で、それをミキサーにかけて、ニガリを入れて型に流す、町育ちの彼女は二回に一度は失敗してしまう。漬物も作って売った。これはなかなか評判が良かったが、味付けに金をかけたから、たいした儲けにはならなかった。次は行商をした。近所に住む三十人の奥さんから、服や布地を借りて来て、それに十%ほどの利益をかけて、金のありそうな奥さんに売るのである。

彼女に商品を貸してくれるその肥ったシナ人は、私でも売れない物をよくあんたは売ってくるねえとよく三人の幼い息子達に菓

子などふるまってくれたが、彼女は別に言葉で売るのではなかった。ここの言葉などほとんど知らないのである。

教育者の家系の清と違い、知子の父方の祖母は髪結いであったし、母方の祖父は一代で十軒の借家を作った商人であった。この祖父は人と同じようでは金は儲からないと、毎朝四時にはもう起きて働いていた。なぜかこの祖父は沢山いる孫の中でも知子を特別愛した。日曜のたび訪れる知子を待ちうけていて、よく昔話をしてくれた。

中でも一番印象に強かったのは、こんな話である。

冬の寒いある日、祖父は友達と一緒に木曾の御岳山に登った。ふもとも寒かったが頂上に近づくにつれ、身が凍るほど寒くなった。やっと頂上に着いた二人は、広い道場の中で人々が三々五々火鉢にあたっているのを見て、自分達もその行者に火鉢を所望した。すると霊験あらたかであるはずの木曾の行者は、金を出した祖父だけに小さな一人用の火鉢を与え、金のない友達には何度頼んでもくれなかったそうである。

「知子や、地獄の沙汰も金次第とはよく言ったものだよ、よく覚えておおき」

祖父はもうその頃は隠居していたから、少女の知子が訪れるとカナリアに餌などやりながら、この話を何度も聞かせてくれた。

田舎から出て来た知子達が借りた家は、小さな息子と夫婦だけの家族には広過ぎたから下宿も始めた。

その頃は町のあちこちに新来青年と呼ばれる、日本から来たばかり

りの青年がうろうろしていた。

彼女の家にはそんな青年達がいつも、二、三人いた。

その青年の一人が日本から嫁さんと呼んだ。文通だけで知った花嫁であつた。外国に行くのだからと黒髪を金髪に染めて、晴れてやって来た花嫁は、船上から小柄で見栄えのしない婿を見下して、フンとそっぽを向いてしまった。結局サントス港からサンパウロまで二人一緒に車に乗った二時間程が、この青年にとって、待ちに待った結婚であつた。

青年のことは邦字新聞の三面記事のよい材料になり、それを讀んだ宗教家は次々に彼女の家を訪れて、この可哀そうな青年の為に大きな声でお経など讀んだり、歌を歌ったりした。青年はもうブラジルに住むのが辛くなり、働くのも嫌になった。

日本に帰りたい帰りたい青年のお経は毎日その言葉のみになった。この青年は朝帰りの夫に變つて、二年間昼食も知子と共にした青年である。その上、長男のおしりの世話までしてくれた心のやさしい青年である。知子はひどく同情した。

花嫁はどこかに行つてしまつたが、青年の親が嫁に持たせた茶箱が五つも知子の家に着いた。

「ねえこの中に何が入っているの」

「僕も一寸見たんだけど赤坊の毛布だの鍋だの世帯道具が全部そろっていますよ」

「なら、あなたに日本行きの旅費をこれで作って上げましょうか」

「奥さん、そんなに簡単に作れるのですか」

「ええ、すぐには出来ないけど、向う三カ月待っていて、そうしたら船賃から小使いまで作ってあげるから、まかしといて」

青年といつても知子よりずっと年長の吉本さんは急に元気を取りもどした。

知子はその日のうちに近所の奥さん達をかき集め、五つの茶箱を引っくり返して売ってしまった。

この体験はこの家を買う時、おおいに役だった。

頭金の足しにする為、彼女は日本から持参した沢山の着物や帯などみんなおしげもなく売り払った。これは娘時代お茶やお花を習っていた時の物である。

訪日した時、その話を両親にすると、情の細かい父親など涙をためて、女が着物を売るなんて可哀そうだと言ったが、彼女は別に悲しくなかった。このわずかなお金がブラジルに落ち着く大事な要素の一部になると思うと、かえって嬉しくさえあった。

清の仕事はうまくいっているのかいないのか、とにかく耐乏生活は続いていた。

彼女は訪日から帰ってから手内職をしていたが、その他に近所の子供を集めて日本語の塾を始めた。

はじめ六、七人の子供を集めるのに、先生の経験などない彼女は、ずい分の苦勞であった。

「私にお宅の子供さんをおまかせ下さい。きっと御満足いただけ

るようお教えしますから」

こう言つて子供達の友達の家を歩いた。次男は母親に似て、こうしたことはなかなかの才があり、三人も自分の友達を連れて来て知子を喜ろこばした。

こつこつと無心に手を動かせば事足りる内職と違い、程度のさまざまに違う子供達に日本語という「外国語」を教えることは、なかなか骨の折れる仕事である。市の中心地より車で三十分のこの地域は、特別日本人が多く競争相手の学校が密集しているのである。

清は時間の都合がいくらでもつくのか、毎日バスに乗って昼食に帰ってくる。変った事といえば、あまり酒を飲んで遅く帰宅することが少なくなったことである。

そんな金がないのか、そんな気分にならぬのか、知子の知るところではなかった。

もつとも近頃の彼女は、たまに酒を飲んで帰宅すると、以前のように

「お酒も男の出世の為ですものね」などと言わなくなった。

その夜はいつもと違い十二時を過ぎても夫はなかなか帰ってこなかった。午前一時、二時大通りに面した彼女の寝室からは、外を走り去る車の音がだんだん少なくなっていくのがわかる。知子の頭に真夜中に外の車の音ばかり気にしていた嫌な十年間がよみがえってくる。あの頃はただ夫の無事を祈ったものだが、今は怒りだけが躰中を駆けめぐる。

ふと気がつくときツツと長い石段を上ぼる音がして、清の飲み過ぎて青くなった顔がそこにあった。

「よく食べるにもやっとなのに、暢気にお酒など飲めるわね」
知子はベットの从上から彼をにらみつけた。

「暢気になど飲んでいないよ、寝たらいいだろう」

「なに言ってるの人の苦労も知らずに、あなたまだあの時の借金も払ってないのでしょ」

「うるさいよ、あの借金は会社がうまくいってから払う事になっているよ、もう少し儲けたら払うよ」

「儲けるってあなた、いつまでこんな暮らしをするつもりなの」
「だんだんよくなって来ているんだよ、明日も結構金が入る約束になっているし」

「そんなこといつもあなたは言っているけど、あなたと私とはテンポが合わないのよ、一緒になってから蚊や蚤を可哀そうだと言って一度も取ったことのないあなたと、そばで一匹も逃さず取る私とではどうしても違うのよ。もう一年一年で何年こんな暮らしをするつもりなの」

彼女は何も仕事の話をしてくれずに、忍耐ばかり強いられるこんな暮らしが、たまらなく不安なのである。

「人が一生懸命働いているのに、好きなことばかり言って、日本に行きたいと言い出したのはオマエだろう、俺はどうでもよかったのだ」

「ウソ、あなただって、自分で仕事を始めるのだと意気込んで、

その為の日本行きだったのでしょう。好きな事言ってるのはあなたよ」

「うるさい、俺はオマエとなど寝ん」

清はさつさと毛布を持って奥の部屋に行ってしまった。

日頃穏やかな清だが、深酒した後などせきを切ったように、心の奥にくすぶっているものがドロドロと出てくる。

「馬鹿だよあいつは、あれがあなたとならどこまでもなどとしおらしい事を言った女かよ、ふん女なんてばけものだよ、俺がこんなに傷ついているのに、大きな口をきいて、本当にバカだよあいつは」

清は一人冷めたい寝所の中で、涙か鼻汁かわからぬものを、ねまきの袖でふき上げてつぶやいた。

「それにあの田口も同じだよ、俺のこと、一つも商売を知らぬ暢気者などと、あちこちに言い散らしているようだが、金儲けがなんだ、儲けきれぬ男は男でないような事を、あいつまで言いやがって、人間なんてみんな同じじゃないんだよ、儲けるのが上手な者もいりや儲けない奴もいる、あたり前の事をみんな知っていないんだから」

あくる日は一寸まだ酒が残っている感じだったが、コップに水道の水を一杯なみなみくんで一息に飲んで事務所に出かけた。二人の青年に給料を払う日である。自動車の月賦、電話の月賦、事務所の家賃、払うものが多過ぎる。

自分はこれでも一生懸命やっているつもりだが、儲けないとこ

ろをみれば、俺のこの性格に由来しているのだろうか、それともあつかう商品の選択に間違いがあったのだろうか、一番に言えることは俺には商売などほんとうに未経験のことだった。儲けないのは始めからわかっていたことだったのだ。

始めから、ブラジルに來た始めから、金儲けのことなど一つも考えていなかったのだ。たゞ俺には日本が窮屈だった。

日本以外の所に住めたら、それでよかったのだ。

まあ会社を作ったのだから、もう一年頑張ってみよう、石の上
に三年と言うではないか。

彼は氣をとりなおすと得意先に電話をかけはじめた。

それから半年が過ぎた、田口は日ごとにいらいらと二人の青年
達によくあたった。

あれほど夢みた自分達の会社が、どんどん色あせて、今では色
もなくなっているのである。専務氣取りで喜ろこんだのも、つか
の間のことだった。金など一寸も儲からぬ、俺はこれでもなかなか
商才があるのに、彼が暢氣者だからダメなんだ。いつもニコニ
コして、よく金も儲からぬのに、あんなにゆったりしておれたも
のだ。青年達にも一つも小言を言わぬから、みんな俺の方を毛嫌
いして、彼の味方につくのだ。俺は働くから文句も出るんだよ、彼
は飛び廻って働かないから、社長にしてすわらせておくには適役
だが、だめだよ、金儲けに頭がないんだから、それに俺の貸した

借金も今だに払えないありさま、彼は三年三年と言うが俺はそんなに気が長くないんだよ、腰が重いのをどっしりと落ち着いているなどと良く思ったのがいけなかったのだ」

田口は家に帰ればおとなしい妻に当りちらした。

そしてある日、知子の家にまで当りにやって来た。

「奥さん、彼はダメですね、一つも金儲けが出来ん暢気者ですよ」

「そうでしょうねえ」

「もうあれから二年半ですよ、いくらか儲かってもよい頃なのに、色々な払いをすますと残らんのですよ」

「そうですか、田口さんのような商売人がいてもだめですか」

「そりゃあ、僕は走り回っているんですがね、彼があゝの調子ではダメですよ」

「でも田口さん、清といると気がゆったりしていい気持になるでしょう」

「え、えええ、それは気持はねえ、だが金が儲からないんじや、しょうがありませんよ」

実際清といると、どんな人でもその寛容な人をとがめない暖かさに、ゆったりするのは確かである。

清自身、そうした自分の性分を良く知っていて、酔った後などよく俺は人の気やすめの人間だよ、などと言う。

しぶいお茶をすすりながら、田口はチラツと知子に色目を使う。子供達も出払った昼間の家の中は静かだ。

「奥さんと僕ならうまくいくんですがね、家の女房もあれもどくのぼうですよ」

「そんなことないわよ、お似合の夫婦だわ」

「いいえ、あれは何でも言われにや出来ん女ですよそれにひきかえ奥さんは商才がある僕と奥さんが結婚していれば丁度よかったですよ」

田口はしやあしやあとそんな事を言いながら茶受にだしたまんじゅうなどほおぼっているけれど、知子は昔からこの田口が嫌いだった。だいたい自分の奥さんを、よその女の前で悪く言うような男は嫌いである。やたらに愚痴を言ったり、簡単に女に甘い言葉を使う男を彼女はどうしても経蔑してしまう。何を思っているのかもどかしい男に、ひかれるのが女心である。

田口はそんな知子の気持など知らぬげに、よく話す。

「奥さん僕の姉は大阪で大きな菓子屋をやっているんですよ、姉は子供もいないし、僕もぼつぼつ日本に帰りたくなりましたよ、この姉は大金持ですからね、家の息子達の大学ぐらい簡単に出してくれと思いますよ」

大の男が姉の金をねらうとは、気性の激しい知子はほとほと田口に嫌気がさしてくる。こんな人にいつまでもつまらぬ事を言われていたらたまらない。

「何さこの男おんな、シナ人」彼女は口の中でこんな言葉を毒突きながら、表面はいと優しそうに、

「田口さん、あなた日本向きかも知れないわ日本に帰られた方が

いいような気がするわ」

と言った。

「僕も近頃そんな気がするんですよ、もう金の儲らぬブラジルなど嫌になりましたよ」

知子は田口が本当に自分達の囲りから遠くに離れてほしいと思った。

それから一週間ほどした夜、田口は清と共通の友人である山川を連れてやって来た。

「僕は日本に帰るよ」

「え！ 本当田口さん、それで奥さんや子供さんも賛成されたの」

「女房は嫌だ嫌だと騒ぐけど、もう旅券も頼んだし行きますよ」

「まあ」

知子は自分の言った言葉が、こんなに早く実現したことに、啞然としていた。

結局田口は家族四人の旅費と、みやげ物まで清のつけにして日本に帰っていった。八方寒がりになって帰った田口には、見送る誰もが同情しなかった。

田口のいなくなった東洋商事は、それでも続いていた。相変らず清は、生きてゆけるだけの金を少しずつ知子に渡した。

三度目のクリスマスが来た。

「あなた青年達にボーナス払ってあげたの」

「いや」

「可哀そうに、あなた払うお金がないの」

「オマエの知ったことではないよ」

「いいえこれは私の気持なの、今度の土曜日デパートの食堂でステーキでもみんなと一緒に食べましょうよ、私に少しお金があるから」

子供達もこの三年間食堂など連れて行ったことがない。節約節約で来たけれど、この際パツと派手にやらないことには、みんながかわいそうである。手元の内職などで貯めた金でなんとかなるだろう。

土曜日のデパートは子供達におもちゃをせがまれた人々でごつたがえしていた。

「ね、今日は焼ソバなんて言わずにステーキハウスで豪華にやりましょう」

「オマエ、金大丈夫かい」清は知子の耳元で小さな声でそつと言う。彼女は落ち着いた顔でニコツト笑って言った。

「みんな沢山食べて頂戴」

青年達も子供達もよく食べる、無理もない、三年も家の食事、それも粗食で我慢させていたんだから。

彼女はそんな青年や子供達を見ながら、自分は一寸ステーキにナイフを入れただけだった。大きなことを言ったものの、やはり財布の中のお金の事を考えると、味もわからぬほど心配になってくる。

夫は社員二人でも、れっきとした社長である。社長夫人も本当に楽ではない。又々平サラリーマン時代が懐かしく想われてくる。デザートのアイスクリームをなめて豪華な食事は終わった。家に帰って財布をのぞくと一クルゼイロがたった三枚残っていた。

「ねえ、あなたぼつぼつ会社しめた方がいいんじゃないの、私、石の上に三年と頑張つて来たけど、あなたにはやっぱりサラリーマンの方が合っているような気がするの、商売は無理だわ」

「無理か無理でないか、もう少し続けてみなくちゃわからないよ」

「もう少し少してうまくいくものなら、もう芽が出ているはずだわ」

「オマエまで田口と同じような事を言う」

清はすっかり機嫌を悪くしたようである。

知子は近頃少しの事でいらいらする、まして今日はあり金をはたいてしまったから、彼女の心はひどく空虚である。

「第一あなたはお金を軽蔑しているからいけないのよ、心が大事だ気持が大切だのと威張っているけれど、金がなかったら一日とて生きて行けないのよ、大きい事を言う前にお金を儲けたらいいでしょう」

「オマエは本当に現実主義者だよ、食べられんならともかく、ちゃんと食べているのに、その上つまらんことを言っちゃあいかなよ」

「食べると言っても最低の食べ方をしているのよ、もう少し余裕

がなかったら、人間らしい精神で生きられないわ、それに仕事の事を何も話してくれないから、いらいらするのだわ」

「いちいち話していたら、オマエは精神病院行きだよ」

「清さん、人の過去は尊いものよ、どんな事でも笑えないわ」

「うん、それはそうだけど、オマエがあんまりおかしな事を言うから、つい口に出たんだよ、森田君が会社から出たよ」

「それじゃあとうとうあなたの会社も、社長と社員二人だけになったのね」

「あゝ」

「私は三年待ったのよ、もう四年になるわ、あなた田口さんの借金はいみなきちんと払っているでしょうね」 「あゝ」

知子はもう夫は男の意地だけで、会社を続けているのではないか、自分にくれる少しのお金も、もしかすると銀行から高い利息で借りた金ではないかと、ふと思った。

田口の弟と二人きりになった東洋商事はまだ続いていた。

清の性格ではなかなか商売は無理である。彼の両親は大地主の上に教員をしていたから息子達には人に信用される人間になれと教えたが、金儲けの話もこつも一つと教えてなかった。農地改革以前は、小作人を大勢作ってのんびりしていた父親を見て育った彼が、いくらブラジル迄来たからと言って、知子がせかすようにそう簡単に物事はいかない。

知子は食べるだけではしょうがないなどと愚痴ばかりこぼすが、物には順序があるんだよ、あれは本当に慾が強いのだ。女なんて

慾の固りのようなものだ。好きなものを買って、美しく装っていたいだけ　なら、メカケになれば一番いいんだよ、俺は人間らしい生活とはそんなものではないと思うのだがナア。

清は銀行からの催促を手にしたまゝしばらくぼんやりと考えていた。

妻には何も言っていないが、青年に渡す給料がこのところどこおっている。田口に返す借金もまだだ、金がほしい東洋商事の俺の名義になっているから、これをつぶしたら、もう俺は一生会社など作れないだろう。どうしよう、思いきって又サラリーマンにもどろうか、幸い昔のよしみで、是非にと呼んでくれている会社がある。どうしよう。そうしたら給料の半分は借金にまわせるだろう。銀行からの催促状に頭を痛める事もなくなるだろう。

それにしても俺にくらべ妻の生活力はすさまじい。

十人程で始めた日本語塾も、もうその倍ぐらいになっているだろう。だがあれにあれ以上させたら俺の望んでいる主婦像から遠のいてしまうだろう。

清は今は広過ぎるほどの事務所で一人孤独と戦っていた。

家に帰ると妻が青い顔でしょんぼりソファにすわっていた。

「あなた次郎が今日もゼーゼーひどいのよ、私、ずっと考えていたのだけど、この子は小さい時から鼻が悪いのよ、鼻を手術したらこの病氣も少しは良くなるような気がするの」

「なら、なおしたらいいだろう」

「そんなにあなた簡単に言っても、大金がいるのよ」

「うん」

「だからいつも言っているでしょう。気持ち心も大切だけど、こうして生きて行くにはどんなにお金が大切か」

「又はしまった、そんなことは百も承知だよ」

清はプイと新聞を片手に部屋に入ってしまった。

知子はゼーゼーと苦しげに呼吸する次男を、たゞ祈る思いで見つめていた。この子は生まれた時からよく乳をはいた。あれはきつとどこかが悪かった為だろう。それとも神経が過敏な為かも知れない、あれを思い、これを思い考えていると悲しくなってくる。

それにつけてもお金がほしい、知子はそんなやるせない思いを流し台に立って、お鍋でも洗うことでまぎらわそうと無中でごしごしこすり始めた。

背後に人の気配がしたので振り返ると、ゆかたをぞろりと着た夫が立っていた。

「なにか用事？」

「別に」

「嫌ね、用事もないのに」

「俺はサラリーマンにもどるよ、生活があるからナ」

ぽつんと言う清を、知子は今は同情的な目で見つめていた。だが目とは反対に、

「それがいいわ、男の夢ももう五年もみたのだもの充分だわ」
とつれない返事をした、夜でなければなかなか優しい言葉を使

わぬ知子である。

あの日からどれほどの月日が立ったのだろう。今こうして田口からの借金の催促状を手にしつゝ、知子はなぜかこの日がいつかくるのではないかと、心のどこかで思っていた自分の勘を恐しく思った。

清が帰宅したら、仕事の事は何一つ話してくれずに、最後にはこんな嫌な思いをさせるこのくやしさを、何と言っていい表わそうか、妻に払ったよ、などと平気でだましていたこの大ウソつき、深夜迄酒を飲み続けた昔の事や、お金を儲けきれぬ事より、十五年も一緒に暮らしながら、ウソを言われていたと思うと、頭がくらくらするほど悲しく情けなくなってくる。

今まで大変な借金を払っていると思うから、最低の暮らしに齒をくいしばって我慢して来たのだ。

彼女はこんな時は少しでも落ち着くように、手でも動かしているにかぎると思った。丁度目の前の机の引き出しが開いたまゝになつていた。彼女は片っぱしから片づけ始めた。

古いクリスマスカードが出てくる。子供達が何年も前に書きなぐった、らくがき帳やら、日本に書いたまゝ思い直してそのまゝしまつてしまつた手紙やら、整理するものばかりである。

結局知子の家では主婦が腹を立てると、家の中が片づいてきれいになるのである。

あれこれ片付けていると、下の方から黒皮の小さな手帳が出て

来た。これは誰のものかしら、手に取って一寸ながめてパラパラとめくってみた。きちんとした細かい字がびっしり書き込んである。

それは知子が夫を知った頃の清の日記帳であつた。

もう十六年も前の日記帳は、表紙の皮の部分に青いかびのようなものまで生えている。なぜか気になる日記帳である。

知子は手のひらに持ち上げて、はじめからゆっくり読みはじめた。夫といえども人の持物だから気がとがめる。急に昔にもどつたような気分になり、そつとそつと読んでいった。

しばらく読み進んで行くうちに、彼女は突然ハツとその中の二三行に目をそそいだ。

そこには、

「十月七日、俺はあくまで一人でブラジルに行こうと思う。今夜も知子は俺にブラジル行きをせがんだ。俺がブラジルに行つて乞食をするかも知れぬと言うと、それでもいいと言う」こんな言葉が書かれていた。

十六年前知子は確かにそんな事を言つた覚えがよみがえつて来た。

それがなんということだ。この手帳に青いかびが生えたように、私の心の囲りにも沢山のかびが生えてしまった。

彼女は長い年月の間に驕つてしまった自分が恥かしくなった。

そうだ、理由がどうあろうと、この借金のことは言うまい、幸いつましい生活の中で、貯めて来たへそくりが、この借金を返す

ほどになっている。

知子は窓を開けてベランダに出た。高台の知子の家からは、サンパウロの街の灯火が、美しい宝石のように見えた。

あの数々の宝石の下で、人々は悲しみ、傷つき、苦しみ悦びあつて生きている。

知子は明日から又、清と子供達と、そして隣人達と一生懸命生きて行こうと思った。

(完)

〈随筆〉

醒めてもがけ

——遊子の自己中心的な南アジア体験——

石 朋 次

Sサン元気ですか。コー害だの、地震だのでゾクゾクさせる東京で、毎日どうやって生きていますか。東京の末路をよくみてい

てください。それともワシのように逃げだしますか。いまパリにいます。2度目のせいでもあります。ボサツとしているのがいちばんらしく、部屋で本を読んだり、世界地図をながめて、なんとなく考えごとをしています。いい年をしてなにもしないでいられるのも、たしかに東京でかせいだ金あつてのものです。いままでになかったようなヒマな時間がもてて、あせりだらけで刺激多かつた東京での生活が不思議に思われます。慣れとはじつに恐しいことなのかもしれません。

けれどもこのゆったりとした、だがへんに醒めている心境にどうしてなったのだろうと考えています。おぼろげながら東京を離れ、南アジアをまわってきたことにあるような気がします。

南アジアといっても、パキスタンのラホールから、アフガニスタンをへて、イランのテヘランにいたるキヨリを旅しただけですから、あまり大きいことはいえませんが。

ところで東京を離れたのはどうのいおうとワシが選びとつた自由ですが、南アジアの旅ではすっかり受身の自由になつてしまいました。この微妙ないまわしをSサンにわかつてほしいと思います。ワシは南アジアの風土にまかせきることに必死でした。4年前の同じころにインドにいったことがあります。そのときは拒絶反応にくらべるとエラクちがっていたようです。あるときワシは勝とう勝とうと思っていたわけで、その強迫的なごうまんさがノイローゼやノスタルジアをひきおこし、また日射病や食中毒となつたのかもしれません。

でも今回ははじめから負けを知っていました。そしてまた、よくいわれる加害者意識も無視することにつとめました。日本と第3世界との関係について本ではよく読みましたけれど感覚的にはなにも知っていませんでしたし、加害者意識をもつみじめさよりは反動さえ居直ったうえで、たとえばどんなことが待ちかまえていて、そのときワシがなにを考え、なにをするか、そっちのほうに興味があつたのです。同じように日本人という問題についても、たとえそれがどれほど深くワシ自身に根をおろしていようとも、これまた関係アラヘンてなことにしました。

それにしても南アジアはワシを勇気づけてくれたようでしたが、そここのところをいくらか考えてみたいと思います。Sサン、アンサンもまたこの地を旅しているのだと思いながら、どうかこの手紙を読んでください。つまり本をとおしてではなく、人間のささやかな行為から伝わってくる皮フ感覚を信頼してほしいのです。そしてこの経験はあくまでワシ自身のものであつたし、南アジア一般についてはなにもいえないこともわかってください。

× × ×

それにしてもあの夏はなんと暑かったことでしょうか。40度をラクにこえてしまえば、もうカンニンしてくれというわけです。飛行機でラホールに降りたときのムツとする大気は、黄色い大地とあいまって、最後までつきまとってくれました。オマケに雨はまったく降りませんでした。

人びとは薄い白地の服装をすっぽりとかぶり、大きくゆったり

とみえました。ワシのいで立ちはGパンにTシャツでしたから、身体にぴったりし、腕なんかむきだしで、かえって暑かったかもしれませぬ。街なかでは涼しいところをみつけて昼寝している人びとも多く、それだけに朝はずっと早く、暗くなれば外にベッドをだして寝入るわけです。

このベッドは、木というかワラというか、そんなもので組んだもので、上にマットを敷き、かけるシーツがあつたりなかったりです。ワシなんかも利用しましたが、ホテルの部屋は、そんなベッドしかないような、ボカーンとしたものです。安いのは魅力で、一〇〇円ぐらい、それで十分でした。それでも最近は旅行者がふえたとかで値上げになつてゐるらしく、きびしいもんです。

この暑さにくわえ、風景は哀しげでした。緑をみたのもわずかにインダス河流域とカスピ海沿岸だけだったようです。あとは荒野というのでしょうか。

こんなところに人間が生活しているのですから、貧しさもひとしおでした。

人びとは明日をどこまで意識して生きていくのでしょうか。他人事のようですが、考えてみれば東京もまたそんなものだったようです。

こうした風土のなかでは時間感覚、キヨリ感覚がはてしないものになり、これになりきることがワシの課題でもあつて、十数時間バスや汽車に乗らなければ大きな街にでないとなれば、もうあきらめなのです。まして分秒を争うなんてことはまったくなく、

もともと時計なしに旅していたワシではありました。そうはいってもべつにルーズになりもせず、規則正しく食い、寝起きしてました。そのうえこの暑さでは一日一仕事でなわけでもうノンビリせざるをえないのです。ただ誤解しないでほしいのですが、このノンビリとした毎日はワシにとって意味があつたわけで、ここに住む人びとがノンビリしていいかということにはならないのです。そいつは無責任ないかたで、この風土が人間をつくり、それに順応せざるをえない、ある種の悲哀があるわけです。

まして人びとがドルをほしがり、日本に憧れ、都市生活へと急に入っていくありさまは、この風土をどうするかといったことを考えますと、救いがたいように思われます。南と北の経済構造のひずみが固定されているかぎり、悲劇としてまだまだつづくのでしょうか。

そんな典型的な街テヘランでしょうが、近代的な建物があふれ、物価は高く、遊郭もあり、酒も飲め、そのくせ愚劣な国王の写真がマホメットのと同様に街に繁乱し、ああここもちかいうちに公害だ、なんだかんだとさわぎだすのにちがいないと思いました。近代化とはいったいなんなのですか。それでも女の姿が、ベールをとり、短いスカートに変っていくのはまちがいなくいいことのように思われるのですが。

人びとは必死に生活し、金をかせぐことを考え、ワシのような旅行者との出会いはいつもチグハグなのです。たとえばワシがか

これらの服装を飲み食いを習慣をマネし、かつてに中近東はいいと
のたまえば、かれらはかれらでカメラやお金に興味をもち、日本
はいい国だとのたまう。この食いちがいをどうすればいいのかワ
シにはまるつきりわかりません。南アジア自身の問題と、ワシ自
身の問題とが対照的に分裂していて、しばらくはそれぞれ内部で
解決していかなければならないことなのでしょう。

× × ×

話ははげしくかわって食いものについてですが、いろんなもの
を食ったけれど、情けないことにあれも食えん、これも食えんと
いうものでした。不潔は理由になりません。不潔といえば、たと
えばハエはいくらでもいるから、かれらと競争して食わねばなら
ないのはあたりまえで、人びとが平気なのをみればたしかにど
うってことないのです。こうした感覚はこちらにきてみないとま
ずわからないのです。

なんせ暑いから食いものは油っこいものや、死ぬほどからいも
のばかり。

なが年日本ではぐくまれたデリケートな味感をもつワシには苦
しいのです。

有名なカバブにしたって、ベターツ、としたチキンだって、腹
にはズシンとこたえるし、いささかシンドイのです。

そして豚だったか、牛だったか忘れましたが、食ってはならな
いことになっているし、羊やチキンも曜日によってダメなのです。

野菜類はといえば、玉ねぎにせよ多くはナマのままでした。

それでもトマトとキュリはうまかった。

米は水っぽく、パンはこんがり焼いて平べったくなくなったのがどさっとおかれるのですが、水なしにはうまくない。

暑下を旅するのですから、ただでさえ食欲がなくなるのに、この料理ではもうかないません。それでも食っておかなければあとでこまると思えば、一口ずつ試し食いなのです。あまり食えなかったのはいまにしても心残りですが、どうもやむをえないようで、もっと長くいれば、おいしくなるだろうにと思いました。

それでも食いただけは気にいったものです。つまり手でつかんで食べる習慣です。これならすぐできるし、ハシだのフォークだのと、道具を使いなれて感覚の鈍っているワシの指には、いいことをしてあげました。

果物類、これはうまい。メロン、スイカ、モモ、なんでもうまかった。のどのかわきにはいちばんで、食えない料理のかわりに栄養になったのかもしれない。それにくらべればコーラは倍の値段だし、やさしさが無い。飲みものならなんでもやったけれど、最高にうれしがらせるのがチャイといわれる紅茶です。たとえばアフガニスタンでは一五円で三杯飲み、疲れをいやし、あるいはものごとを夢みるにはいちばんでした。ところがイランに入ると、同じ値段でも一杯しか飲めず、イランが金持ち国でアフガニスタンが貧乏国であることを考えれば、なるほどと思ったし、まして東京のキッサ店のものなんか、あれはなんですか。

いわゆる生ま水はどうかといえば、飲まないにこしたことはないようですが、またしても人びとが飲んでいるのをみれば、かわきにはかてず飲んでしまったこともときにあります。さいわい病気にはなりませんでした。二十時間ちかく汽車に乗ったときは駅につくたびに、水だ水だとうれしがり、パキスタンの人たちがヘンナ顔をしていたのを思い出します。

まあこちらの食いものや飲みものについてあれこれいったところでどうしようもないし、なれないうちはつらいことも多からうとは、はじめから覚悟していましたが、思ったとおり下痢をすることもあり、そんなとき何度もクソをしたくなるのはつらいものでした。

場所によつては野グソとあいなるのですが、こちらの人びとはあたりまえのようにするのに、このワシがしていると、なかケツタイであるらしく、遠まきに見ているバカたちもいました。

便の話をもうひとつ、ここでは紙を使わないことです。はじめはうろたえたものの、なんてことはない、水で洗うのです。おかげで慢性の痔もよくなって、この習慣は今日まで大切に保存しています。

× × ×

こちらで残念だったことは酒類がないことでした。あつても高すぎるし、まず普通に旅していれば飲めないのです。これは回教の規律だそうで、人びとはジュースやチャイを飲んでいるわけです。それでもテヘランにいくとビールも大衆のものとなっていて、

ワシはそのときガブ飲みし、ついでにカバブをガブ食いし、あく
る朝、二日酔と下痢にたたきおこされました。

もう一とつ残念だったことは、女たちのありようでした。いま
だに女が取引されることも聞くし、多くの女たちはチャードルと
いうものを頭から足の先までかぶって歩いていきます。ぜったい
に素顔や素足をみせてくれません。

それでもカブールやテヘランでは女たちの服装もどんどん変わ
りつつあって、かの女たちの素顔をみては、なんと美しいのだろ
うと感激しましたが……そんなありさまですからセックスについ
てもきびしく、たとえ何人かの妻をもてる男がいたとしても、そ
れは権力のあるもののことで、金もなく力もない男は一生独身に
なるかもしれません。

それだからホモもあるように思えましたし、手をつないでいる
男たちはザラでした。さてテヘランにあった遊郭はケツサクで、
女一人に男がかなり複数、それをババアがセリをするわけで、西
洋型売春とはちよっとおもむきがちがっていました。

肉はダメ、酒はダメ、女はダメ、そんな回教の規律こそ、この
荒々しい風土には必要だったのかもしれない。

人びとが巨大なモスクにあつまり、あるいは夕げのひととき、
アラアの神に祈るさまはたしかに感動的なのですが、同時にさび
しさも感じました。こうした規律と近代化の矛盾はやがて社会変
革を生みだすのでしようけれども……

× × ×

南アジアを旅していて楽しいのはバザールを歩いているときでした。モスクのちかくにはかならずあつて、ゴチャゴチャした店々にはなんでもそろっているのです。日用品などはたしかにモノが悪いし、フィルムとか地図といった、こちらの人びとに関係のないものは東京より高いようでした。みやげもの屋はうれしがらせてくれて、ワシは象牙のネックレス、アフガン衣装、ペルシャのテーブルクロスなどを買いましたが、安くてきれいでした。

なんといってもオモロイのは買いかたです。売り手と買い手のデマカセの交渉がはじまるわけですが、なれとあつかましさとまじめさが必要なようです。ペシャワールの老商人がいったように、売ってヨカッタ、買ってヨカッタ、ありがとう、これがカケヒキのコツに思えました。よく損したの、得したのという旅行者がいますけれども、どうもそんなケチなことより、カケヒキのなかで買いものゲームを楽しめばいいのだと思いました。おまけにカケヒキのなかで自分を知ることにもなります。

同じカケヒキでも、乗りものは旅にぜったい必要なもので、この場合なんかはシツコクせねばなりますまい。ガズニからカンダハールまでソ連製のジープをヒッチしたときですが、いざ降りるときになつて金を請求されたのです。はじめはノーといったのですが、アフガニスタンの事情を知ればそうもいくまいし、かといつてワシに責任があるわけでもない。あれこれとモメたあと適当な解決にいたりしました。そんなことはいつもあつたし、オマワリ立会いのもとにタクシーの運転手とケンカしたこともあります。

オマワリをよんだのはかれのほうでしたけれども…

東京にいたころはケンカなんかしたこともなかったし、そのくせ欲求不満はおおありで、あきらめたり、自己嫌悪におちいつてどうしようもなかったことを思えば、なぜかこちらではケンカしても、あとはニタニアタと独り笑いになるのです。だいいちこちらでは甘えた自己嫌悪は通用しないし、ひよつとすると生きていけない。

× × ×

お金の話にうつります。こちらにはそれぞれルピー、アフガン、リアルと通貨があつて両替せねばなりません。

ところがどこにもヤミルートがあつて、ボサツとしていればかならず、チェンジマネーと話しかけてくる人がいる。

パキスタンでは銀行で換えるよりもレートが高くて、たずかるわけですが、これはドルの現金にかぎります。トラベラーズチェックは役にたたず、まして日本円などは銀行さえ見向きもしません。ドルの威信がおちたとはいえ、南アジアはいくらがちがいます。

こちらでは金のもち歩きをいかにするかで苦労します。よくいわれるように金や荷物が盗まれることは多いようです。ペシヤワールでヘタバッていたドイツ人旅行者は、インドですつかり金をとられたといっていたし、そんな話はあたりまえのように聞きます。そんなところに気を配って旅しなければならぬのは不幸なことです。

けれども一〇〇〇ドルももった貧乏旅行者というものがじつは

皮肉なのでしょう。この矛盾を知っていれば、憂き目にあいがちなのもよくわかりますし、こっちの人間はどうのこうのといってもはじまりません。ですからこちらの人びとを非難してもそれだけではなにもわかっていないのです。そして事故はしばしば旅行者の不注意に原因があつて、ここは日本でもヨーロッパでもないのです。

ワシはといえばカメラを置き忘れたり、トラベラーズチェックを失くしたりと、オツチヨコチヨイでしたが、どちらも無事に戻ってきました。この、チェックを失くしたときの気分はみょうなもので、どうしてもエエワイとべつにヤケにもならず、すがすがしかったものです。それでも銀行にいつて紛失届をだしたのですが、銀行員が警察のように訊問し、こちらの風体をみて横柄な態度できたのには、客であるワシをなんと思つてるのかとじつに憤慨してしまったのです。

こうしたもろもろの失敗は欠かせないもので運の良し悪しみたいなものでしょう。できればもつとゆったり旅したいものですし、荷物なんかも、あれこれと気づかつてたくさんもってくる人もいますが、あれなんか気の毒に思います。

金というものはすべてにつきまとつていて、ミエなんか関係なく、みんなが金をほしがるわけです。それで旅行者のほうもなんとかケチろうとする。

これも程度によりけりで、金を使わない主義ならいざ知らず、食べたいものも食わず、重い荷物を背負つて遠くまで歩くなんて

のは、南アジアをバカにしているようにも思えたし、つまらなく
みえます。ようするに楽しく旅をつづけられればいいのです。

× × ×

いったい南アジアはこわいところなのでしょうか。こわさとい
うものは未知のものにあって、夜知らない暗い道をひとりで歩く
ようなものかもしれません。着いてすぐパキスタンの夜汽車に乗
りこんだときは、身動きできぬほどにパキスタンの人びとにかこ
まれて、しかもかれらの顔つきがたいそうにみえて、なんとも不
安になったのですが、べつにそれだけのことで、ワシがニツと
ほほえめば、かれらもニツとするわけです。あたりまえのこと
です。

二十時間もいっしょに乗っていると、果物や水をわけあい、な
んやかやと語り、はじめの不安が悲しくなりました。

たしかに日本と南アジアのあいだには経済とか文化とか風土の
差異があり、それが人間の性格に影響をあたえることがあったと
しても、その反対ではないわけです。ですからこちらの人びとは
日本人と同じように、いくらかお人好しで、いくらか悪知恵がは
たらいて、好奇心もあるが、権威主義的なところもあるわけです。
人間はどこもいっしょでした。そんなあたりまえの確信をえてか
らは、こちらの人びとのありさまをじっくり観察し、マネできる
ものはマネをし、この土地や人間になじんでいくことができたよ
うに思います。

けれどもこうやって説明してなお、南アジアが安全だといいきる

こともできません。さいわいこのワシにはなにこともなかったけれど、こちらにはこちらの生活があり、ルールがあるのですから、旅行者がかれらの内側に入っていくと、やはりシッペ返しを受けるでしょう。

たしかにブツソウな噂を旅行者からよく聞かされました。ワシはそんな噂が嘘とは思いませんでしたが、本当だとも思いませんでした。そういったことはありうるだろうし、それで旅をやめる気にもならなかったのです。そして問題なのは、小さな事件が大きな事件にすりかえられ、噂に根がはえていつのまにか、完全なる事実としてあれこれ飾られ、それがたとえば日本と南アジアの較差とあいまって、ひとつの偏見になってしまうことではないでしょうか。ワシは噂の正否についてはわからないし、いままで書いてきたのも自分の経験だけです。

Sサン、もしもこの南アジアに興味がわいてくるようでしたら、実地にためしてみてください。そのチャンスはアンサンにもあるだろうし、それだけの価値がじゅうぶんこちらにはありました。

ワシは南アジアの人びとを好きにも嫌いにもなりませんでしたが、べつのいいかたをすれば好きな人もいたし、嫌いな人もいました。ですから、人びと一般をほめるつもりも、けなすつもりもありません。

多くの人びとは日本と同じように夢もなく毎日を生きていたようだし、すくなくともワシがここを旅している動機らしきものと重なりあうようなめぐりあいはありませんでした。その意味では

あくまで孤独だったのでしょう。

× × ×

ワシの孤独さは同じ旅行者である西洋の若者たちといっしよのときもかわらなかったようで、英語がヘタクソだったからか、ワシがアジアの人間だったからか、ワシ自身の性格によるのかよくわかりません。

かれら若者たちのことをヒッピーとよくいうようですが、これはジャーナリズムの使う言葉にすぎず、身なりだけで人間がきめられてはかないません。

多くの若者が現代の物質文明を忌避してカブールへ、カトマンズへ流れていくわけですが、これとてハッシッシがあるからかもしれないし、物価が安いからかもしれないし、あるいはわざと西洋の対極なり、冒険なりを求めているだけなのかもしれないのです。いずれにせよ、個々の人間の巡礼、あるいは旅行として必要なことのようにも思えますし、それだけの絶望をつくりだした、すくなくとも夢というものを打ちくだいた近代の幻想にたいする怒りは、かれらと共有したく思うのです。

カブールの街はここらあたりでは涼しくて気持のよいところでした。この暑さにもかかわらず、遠くの山々には雪が残っていたのです。街を歩けば、チェンジマネーとよってくる人も、好奇のまなざしでジロジロ見つづける人もすくなくなかったし、人びとは高原の街を白い頭布をまいてさわやかに歩いているようでした。食いのさえおだやかで、やさしい街なのです。ここが貧乏なアフ

ガニスタンだからか、それとも首都だからか、それはわかりません。

安ホテルの中庭ではロックがかかっていて不思議な気分になったし、街の店で手づくりのものをみてはうれしくなりました。

若い旅行者たちとアフガニスタン人との出会いは、なるほど偉大なる文化交流なのかもしれません。たしかにひとつの流れができてきつつあって、こういうかたちで異なる世界同士の出会いに感動さえします。それにこの街に住む人びとに日本人そっくりの人びとがいることを考えると、時代を過去にさかのぼることもでき、さきの若者たちとの出会いとあいまって、夢を見ることができるよう

× × ×

それにしても南アジアはヨーロッパと陸つづきなのです。その点ではヨーロッパの若者がうらやましかったものです。反対に、日本と南アジアのキヨリは社会主義中国、戦争下の東南アジアをへだてていて、はかりしれず遠いし、また心ない日本の交通資本によってメタメタ金がかかるのです。旅とは自由であるものなのに、金が必要だったり、あるいはパスポートが必要だったりとはなんとかなしいことでしょう。

たしかにパスポートには、「日本国民である本旅券の所持人を通路故障なく旅行させ、かつ、同人に必要な保護扶助を与えられるよう、関係の諸官に要請する」とありますが、その内実はバッチリと管理しますよ、なのです（たとえばテヘランの空港で持ち

ものを徹底的に調べられたのですが、ムツとすることもあって、たてついても、最後は強制力でもってグイでした。もうどうしようもなく、これも国家というもののなのでしょうね。だれがどこでなにをしていますがかわらないではありませんか。旅しているといつもそう感じます。

× × ×

もとはといえば東京にすることが恐しくなり、これはヤバイと逃げてきたワシなのです。Sサンはそういうふうには思いませんか。仕事もやめ、部屋もひきはらい、それでも思いつめたものになにもなく、スンナリと羽田を飛びだったのです。スケベー根性だしてこちらにやってきたのも、多くの若者を魅了する中近東をみたかったからだし、巨大なアジアにひざまずきたかったからですが、いまふりかえってみると、人びとはあたりまえのようにいただけなのに、なぜか心底にせまるものがあつたような気がします。

それはひとつに南と北の世界の分裂によっていて、つまり日本と対照的なかたちで南アジアがひろがっているという事実が、旅するワシにショックをあたえたのでしょう。そしてまた、安くできる旅は、毎日ムダ金を使っていたワシの頭を洗脳してくれたようにも思えるのです。おかげで物にたいする考えかたもかわって、なんとなく物自身の格というようなものを尊重するよ

うになりました。人間についてだって、ややもすれば抽象的に語っていたころのことがあさはかに思えます。

この風土のなかにも人間が生きているという事実は、もっとおだやかな風土のなかにいたはずのワシを勇気づけてくれたし、反対にどうしようもない人間の弱さも感ずることにもなりました。

そして、なんといってもアナーキな秩序をもった日本社会からぬけだして、現地主義的に旅をつんでいくことはワシ自身に新鮮な感動をあたえてくれて、東京でつかれていた自分をときほぐし、あるいは生気を取りもどしてくれるのかもしれませんが。こんなふうに旅をしながら、世界を遊行していくことは生の中味をゆたかにし、偏見といったケチクササから自由になるために必要なことのようにも思えるのです。

ほんとうのところ、南アジアがワシを魅了したのではなく、ワシのなかのある部分、いいかえると、東京での欲求不満がなにかを求めていたといったほうがあっていて、いわば南アジアはショック療法としてあったのかもしれないのです。その後どうなるか、東京を逃げだしたものの行きつく先を仲間に知らせたいと思っています。

× × ×

パリは物価高ですし、警察はいばっていて、住みやすそうにはぜんぜんありません。雨ばかり降って寒く、あの南アジアが恋しくなります。永居せずにでていきます。Sサンも機会をつくって東京を離れてきてはいかがですか。

また手紙します。ともかくがんばってください。

(一九七三年八月十日、パリにて)

【註】戦争はベトナム戦争のことだが、それはいまはない。

著者註：

この文章は私が四年前に東京を離れ、その直後の南アジア旅行記になる。今回、これを発表することになったのは、今まで発表の機会がなかったということのほかに、たくさんの若い日本人旅行者の旅がどういうものであるかをブラジルのコロニアの人びとに知っておいてもらいたかったからである。コロニアの未来が議論されているときに、新しい日本人の形態としての、あるいは少くともそれを求めている日本人旅行者がどんどん増えているということはどこかでつながりがあるように私は思っている。

私は南アジアの短い旅を終え、パリを中心に西ヨーロッパに一年ばかり滞在したが、この文章でも予期していたように、南アジア恋しさの旅が中南米という、場を変えたものとしてその後、実現されたような気がする。それも三年にわたる旅となったのだ。南アジアと中南米をいっしょにして考えるのは無理があるけれど、多くの人びとの生活が貧しかったということでは共通するものがあった。私はこの貧しさに直面するたびに、無責任ながらいつも旅に活気づいてしまうが、それはなぜであろうかと気にかかる。この問題は私に残されたままである。

私は旅をしながらも、その後も紀行文を書いてきているが、こうして四年前の文章を見やると、私自身が変わったのであろうか、違和感が出てくる。

たとえば、私が南アジアで感じた恐さは、今なら世界中どこでも感じないだろうと思う。金をケチって旅する旅行者を批判していた私は今では私自身がもつとも金をケチル、ヒッチハイク旅行者になってしまった。パスポートを管理社会の象徴として批判したが、私はいまだにパスポートを、携帯所持品のなかで5〜6番目に重要なものとして感じている。そしてなによりも、中南米での旅ではたくさんの友人ができた。南アジアではその余裕がなかった。だから体験の内容も浅かった。

そうしたいいくつかの違いは感じているが、南アジア体験はやはり私個人のものであったことに変わりはなく、今回、コロニア文学に投稿することにした。

よく、コロニアの人びとから、あるいは進出企業、商社員のひとから“ヒッピー”として私たち、若い日本人旅行者は嫌われているようだ。たしかに私たちの側で問題のあることもあるかもしれないが、私たちはほとんどの場合、日本や合州国などで自ら稼いだ金でもって旅しているのであり、旅の責任は私たち自身が持っている。これはべつの階層の日本人と同様である。

旅の終末（終わりのない旅をふくめて）がどうなるかは大きな問題であるが、それは私たち自身の問題である。

私はいまも、仲間の苦い経験を思い出す。彼にはサン・パウロに、日本で前に会ったことのある、日本人移住者の親類の人がいた。東京にいる彼のバアさん家庭といつも親しく連絡があったその人を訪ねようと、二年前、合州国から彼は手紙を出したことが

あつたが、その人と、その家族に断られたうえ、日本へ帰るよう忠告されてしまった。彼の生活のスタイルが受入れられなかったことを私は知っている。彼は血のつながりに甘えようとしたのではない。それにしても人間関係の深い断絶であつたと思う。その親類の人は今年、亡くなつたと、東京から知らせがあつたという。彼も、私と変わらぬ若い日本人旅行者であつた。

（一九七七年八月十五日）

サン・パウロにて、 石 朋次

大根の花

矢 島 健 介

(1)

三十キロ近い米袋を背負った田倉時子は、視野の限りつづいて
いるコーヒー園の中をひとり歩いていった。

昨夜は久しぶりの大雨で、砂径は締っていて歩きよかった。

雲のきれ間から照りつける日ざしは強く、大地からたえず水蒸
気が上昇していた。汗が身体中をぬらした。荷は重かったが、思
いがけない賞与の米だ。

時子の心はずんでいた。一刻も早く持って帰って、病臥中の
母親や家族の者を喜ばせたい。そう思うと一人で歩く寂しきや、
身の疲れも感じなかった。

もう二キロは歩いた。

時子の住む分耕地“パウダリオ”と記した標識も過ぎた。ゆる
やかな起伏でつづくコーヒー園は、そこから地形が傾いて盆地と
なっていた。コーヒー樹の育ちが悪く、雑草が繁茂し、雑草にま
じって薹のたった大根が薄紫の花を咲かせていた。

或所は一、二本でなく大根の花が雑草を被いつくしていた。何
年か前に住んだ日本の移住者が種子をおろしたものだろうか、

すっかり野生化して根は細いが、丈はのび、花は可憐だった。

その地区は、八代常吉の家族の受け持っていた個所だった。同航海、そして同じ耕地へ配耕されたよしみで、家族ぐるみの交わりを持った。ことに隆夫、斐子という二人とは朝夕顔を合わし、現実の貧困をなげいたり将来にほのかな希望を抱いた仲だったが、ある事件がもとで、別れの挨拶を交すこともなくあっけなく耕地から追放されてしまった。

時子はふとそこに立ち止って、咲き初めた大根の花を凝つめた。花に重なって隆夫の笑顔が浮かんできた。闇に光を求めあうような生活の中で、折角親しくなれたばかりなのに……、いまあの人たちは、どこでどうしているだろうか？、賞与の米を分け合って喜びを共にしたかった。時子は静かに眼を閉じた。すると恋慕に近い思いが胸を熱くした。

耕地の監督の吹く起床ラッパが、朝の静寂をやぶって、執拗に物憂く鳴りつづけた。四時だ。起きなければならないが、疲れた身体は朝でもけだるく、目をこすってみるがまたうとうとと夢の中にまいもどってしまふ。ラッパはその怠惰を責めるように鳴りつづけた。鶏鳴も次第ににぎにぎしくなっていた。

「ああ、しんどいなー」

時子は関西弁まるだしでつぶやいた。

長女なので家族の誰よりも早く起きた。手探りで枕元のマッチをする。左手で旧式のカンテラのほやをとり、マッチの火をカンテラに移した。赤い力のない灯がぼっと周囲を明るくした。日本

から移住したばかりで、柳行李が三個、部屋の片角にころがっているだけで、三メートル方位の部屋は寒々として、天井のないすすけた屋根瓦までの空間が、言いようのない虚しさを見せていた。時子はほぐれた髪毛をピンで止め、寝巻代りの浴衣の前を合わせた。寝台ではない、板を並べた床をぎしぎし鳴らせて土間に降り、無雑作にタマンコをひっかけ、片手にカンテラを持って炊事場に入った。

かまど、棚、食卓、洗場すべてが手製だった。棚の上には家族五人分、最少限度の茶碗、鍋類がのせてある。配耕になった翌日、裏の原始林から生木を切り出して造った食卓の足や、流し場の棚は嫌な生木の臭気を放ったが、近頃は乾いて茶の乾燥場にいるような香気を漂わせていた。

二個のバケツを両手に裏庭へ出た。冴えた空には星が降るように輝やいていた。井戸は炊事場から十四、五メートル離れていた。東側にバナナの古株が並んでいて、黒々と伸び上り風にはためいた。暗い裏庭に出るのは恐くて、宵に水を汲みためていたが、何軒も一緒の共同井戸は夕刻から夜の水は濁ってしまうので、やむなく朝にした。

十八メートルの深い井戸は綱で巻取式になっていた。つるべ代りのラッタを垂らすとバシャと音がして、ラッタが木に沈んだ重みが手に加わってきた。

嫌な音のする巻取機を三十何回巻き上げる。ラッタの水は星月夜の下で新鮮な生き物のようにゆらいで上ってきた。それを二つ

のバケツに移し、一つは屋外に洗面用に置き、もう一つは炊事用にする。

時子は、家の横の叢に入っていった。屋内に便所がないので、屋外で用をたすのが耕地一般のならわしになっていた。最初鍬で穴を堀ったものだが、他の人々が垂れ流しなのでいつのまにか同じ習慣にそまってしまった。風は冷たかった。じつとしゃがんでいると下半身がじんと冷える。藪蚊の大きいのが一、二匹耳をかすめた。冬季でも蚊がいた。片手で蚊を追いながら、人目をさけて叢にしゃがむ習わしがひどく厭だった。落付けなかった。こういう生活がいつまで続くのかと思うと憂鬱になった。

草を揺すって近づくものがあつた。豚だ。早く用をすまさない、と、後方から汚れた鼻で尻を持ち上げられる。草の葉をもちで汚れをぬぐい、時子は素早く立ち上った。鍬で埋めなくても豚が清めてくれた。

時子は自分が上品な女だと決して思っていないが、都会を何百キロをへだてた僻地で暗いカンテラの下での原始的な生活は、たとえようもなく悲惨で寂しかった。泣きたい毎日だが思考がそこに及ぶと、負けず嫌いの時子は、慣れなけりやいけない強くならなけりや生きられないと自分を叱りつけることにしていた。

小学校時代、成績のよかった時子は、向学心にもえていたが、裕福でもない家庭の事情を察するとそれを口にだすまえに諦めねばならなかった。何かの職を求めても、高等小学卒の学力では、満足な務め口はなかった。

日本列島が不景気の風に吹きまくられていた昭和七年は、全国に膨大な数の失業者を出していた。

満州事変が勃発したのもその頃で、政府は数多の失業者を満蒙の地へ送り出していた。

新聞を精読する時子ではなかったが、貧しい家庭の一人として不景気は肌で感じていた。十八才の時子は男でないのを悔いた。男に生れていたら大陸に渡って思う存分戦ってみたかった。腕をためしてみたかった。

ブラジル移住というかたちで、時子の大陸への夢は実現したのだ。泣き事など言ってはもらえない。

小急ぎで炊事場になると、火にかけておいた薬缶の水は沸騰していた。食卓の角に取り付けてある小形のコーヒー製粉器に炒ったコーヒーの豆を入れ、手廻しで粉をつくる。速成なのででき上ったコーヒーの香は新鮮だった。

「コーヒー沸いたでー」

時子はその一ぱいを持って、アメーバで寝込んで起きられない、母親のとめの枕元へ運んだ。

「持ってこんかて、今朝は起きられそうやわー」

「無理せんかてええがなー」

「すまん、ブラジルへ来て一頑張りしようと思ったのに、このざまやー」

「わしが二人分働くさかい心配いらへんー」

「早う仕事できるようにならんと、借金ばかりふえるさかい

な―」

再び角ラッパが響いてきた。コーヒー園への出発を告げる六時のラッパだ。

「これまるで軍隊式やな―」

父の惣一ははね起きた。昨夜ぬぎ捨てた汗くさい仕事着を再び着込み、裏庭で洗面をすませ、コーヒーはあかん、と冷飯に茶をかけて佇ったままかき込んだ。食事がすむと巻ゲートルに地下足袋で身をかため、太鼓形の水樽をコーヒー採集用の袋に入れて背負った。軍隊生活を経験した惣一の仕度の早さは見事といえた。

「この恰好、まるで土方やな―」

惣一は、神戸市で仕入れてきた安物のカーキ色の仕事着は、気に入らないものの一つで毎朝嫌な顔をした。すっかり日焼けした顔を寝ているとめに一寸と向けて、そのまま家をでた。

「お母ちゃん寝てるといいよ、朝飯は悠二に作らしたらええ、もう十やもん飯ぐらい焚けるわ― 今日真向いの兜山のC十一号区やから悠二にそう教えといて―」

母親にそう言って時子も父につづいて家をでた。

一軒に二家族住める家が十軒並んでいた。時子の家はそのコロニアの中間に位置していた。家の前の細径を東に向ってコーヒーの空袋を背負った女、コーヒー採集用のラステラの柄に水樽や弁当をひっつけた男たちが、次々と通る。背の高い逞ましい男たちだ。コーヒーの実をさびる丸い大きなペネイラをころがしてゆく少年もいる。ふるいにかけることをさびると耕地の人々は言うて

いた。

六月の朝の六時はうす暗い。そしてかなり冷えていた。径にかぶさっている草の露が足につめたい。

明けきらない野径に、墨絵のように動いている労働者の列は新鮮で、活力にあふれていた。混血と黒人が大半で、他はポルトガル、イスパニア、イタリヤ、ドイツ、それに日本からの移住者たちだった。

ポルトガル語に弱い移民たちは、おのづと同国人のグループをなした。

八代斐子は毎朝時子の出現を待って列に加わった。

斐子は目鼻だちの整った色白の娘で、背高ではないが気品があった。澄んだ瞳を時子に向けて、

「お母あさんのぐあいはどうな。ちよつとは良か方かいた？」

斐子は熊本県の出身だった。いつも標準語を使おうとしていたが、やはり訛が多かった。

「元気だしてるらしいのやけど、あまり良くないの、少しつつ痩せが目立ってー」

「入院でもしなはったら………近くに病院はなかでしつしゅうかー」

「あつても行かないわ、皆にすまん、すまんといって医者も呼ばないもの、こんなことぐらいで医者にかかってたら、お父さんの疲労もお前の身体のでき物も、一家全部医者通いやってー」

「えーそぎゃんひどかでき物？」

「私、皮膚が弱いからね。蛇に刺されるとその後が全部膿を持つ、かなわんわ、着物と脚絆でかくしてるけど、中身は癩患みたい、夜横になるとひどくうづくのー」

「わたしもこの間、足の爪が痛痒かもんで、よう見るとまあ、どうな……蚤が肉にくい込んだら、あいた。隣のブラジル人に見せたら、犬や豚の足にわく砂蚤ちゅうもんげな。ほったらかしとくと卵ば産みつけち、蚤になって出てゆくちゅうじゃなかな。

たまがった……えらい蚤のおる処にきたもんたい、ああたー」
「わしの腫物にも蠅がよってきて、油断したら脚絆の上から卵を産みつけるの、卵でなく蛆を産みおとすのもいるわー」

「ほんに泣こうごたる、なんしてそぎゃん国へ来たとでしゅうか、人間より人間をむしろ害虫や病菌が多かごたるー」

斐子は砂蚤のあとの親指を化膿させ、繃帯を巻いているので靴がはけず、片足は草履だった。

二人は牧場の重いポルトンを開けた。牧戸のきしむ大きな音があった。牛や馬の糞が所々にころがっていた。湯気をたてているのもあった。低地は牛馬の蹄の跡が泥にくい込んで水溜りができ、板切れや丸太を横たえてあった。注意しながら渡った。朝の早いせいか、蛙の鳴声も、泥にたむろする蝶の群にも逢わなかった。低いロバにまたがった長身の男が、

「ヴァモ、ヴァモー」

と言って二人の傍を通りすぎた。耕地の監督のルベンスだった。

西部劇映画そのままの帽子をかぶり、赤ら顔に赤い髭、肩から斜めに角ラッパをかけ、腰にピストルと弾丸の並んだ草帯をまきつけ、左手に手綱、右手は腰につつ立てた鞭の柄をしっかりとにぎっていた。お伽噺の国の魔法使いそのものの姿は滑稽にすら見えた。

「あのピストル、ぶっ放すことあるだろうか―」

「あるらしいわ。彼は警察権を持っていて耕地の秩序を乱すような人物へは容赦なく向けるらしいわ―」

「わあ、おそろしか―」

白い角杭にC十一と記した四辻に出た。今日の仕事場である。

そこは耕地第一の高台になっていて、波状にたたなわるコーヒー園は、行儀よい列を作って紫色に彼方の空までつづいていた。本耕地の全景が見えた。一文字に並んだ白亜のコロニア、広いコーヒー乾燥場、倉庫、事務所、売店等々が、コーヒー園の裾の牧場の中に一にぎりの大きさにかたまっていた。二ヶ月前、駅からトラックの便で、耕地への第一歩を印したのがこの本耕地だ。

シャンブレ耕地は本耕地を中心に四つの分耕地があつて、千アルケールのコーヒー園と二百アルケールの牧場、他にまだ多くの原始林をかかえていた、ペンナ町管轄最大の農場と言われ千人に近い労働者を有し、日本の移民船が入る度に何家族かをこの耕地に配耕させられていた。

田倉惣一親子五人が、この耕地へ配耕になったのは昭和七年の

五月だった。日本から五十日近い航海を共にした八百余名の移民たちは所々の駅から配属先へ降り去り、シヤンブレ耕地に着いたときは八代常吉との二家族になっていた。

本耕地には四つの分耕地から集められたコーヒーを洗條、精選する設備、彪大な乾燥場や倉庫が並んでいた。コーヒーの採集期には火力発電によって夜業がつづけられていた。

労働者用の売店、薬局、医務局もそこにあった。

医者は週に一度町から出張してきた。

診療日には朝早くから病人の列ができ、軽い病人は診てもらえなかったし、重病人は列に加わるのが苦しかった。設備があつて不便な医務局といえた。

すべて一応整っていたが、教育設備がなかった。

十才以上の子供は農場に出るように半ば義務づけられていたのである。

奴隷制度が廃止されて、四十余年の月日が経過したばかりの、その頃の耕地はまだまだ奴隷の名残をとどめていた。各国からの移民は奴隷に代る労働力の補給だったのだ。

その日は、コーヒーの実をさびて袋に入れる作業だった。惣一がラステラで地に落された実をかき集めた。木の葉や砂も一緒に集まる。時子が後ろから小山をなしているその実をペネイラに盛り、全身の力で持ち上げ腰の調子をとって揺ると心よい音をたてて砂は足元に落ち、実と葉とコーヒーの小枝などが残る。更にペネイラをゆすって中央に集まった実を手前から右斜上方にはふ

り上げると、自動的に風が起きあふりをくつた葉や小枝は前方に散る。実は頭上一メートル余も浮きあがる。その落ちてくる実を右足を一步引いてペネイラに受けとめる。同じ動作を二、三回くり返すだけでよい。が、この仕事は熟練を要した。器用なものでも十四、五日、年輩者は一ヶ月やってもうまういかなかった。上達する前に腕、肩が痛む、足がこわばる。手に豆ができそれが破れ、破れた傷に泥がつまり胼胝になるまで、涙と血のにじむ努力がいる。時子は持ちまえの体力と負けず嫌いで、十日ばかりで何とか形がとれた。

採集が初まって一ヶ月余だが除々に能率を上げていった。

時子は自分の体力に自信を持っていた。気心のつく幼時から、
“おてんば”でなちし、近隣の子供の中でいつも大将株だった。

巡査であった父の惣一は職務上毎年転々と移り住んだので、時子のおてんばは行く先々で名をなした。とりわけ山住みの生活が時子の体質を頑強にした。

弟の悠二と栗拾いに行き、山主の子供にとがめられて一戦を交えたこともあった。春の野でいたどりを折って玩具の水車を作ったり、町から来た従弟たちと松茸狩に行った思い出、夏は小川の渚で級友たちと泳ぎくらべをやった。その頃から誰にも負けない運動神経を持っていた。小学五、六年には運動の選手として出場、母校に幾本もの優勝旗をもたらした。その頃、世界的に名をなしていた陸上選手に人見絹枝がいた。時子は第二の人見絹枝を夢に描いたこともあった。

「トキコはバイヤーナ（バイヤ州の女）の体力と能力があるな、ママイが病氣でも、トキコ一人で二人分かせげるなあー」

監督はそんなことを言った。皮肉にも聞こえたが、自分の体力を自負していたので、気にならないばかりか内心得意だった。

「がんばらなけりや、こんな安い採集賃金じゃ一家五人食べられませんかー」

せい一杯の皮肉でやりかえしたが、笑うだけで多く語らない日本人には戸迷うがおまえは遠慮せず表現するのでよく解る、と、ことのほか監督に可愛がられた。

九時は朝食の時間である。コーヒー樹間の遠近で、少年や若者がしきりにラッパの音色を真似て朝食をうながす。その時間に監督の廻ってこないのを知って氣力をゆるめてしまうのであった。

ラッパが短く三回鳴った。労働者は歓声を上げた。

時子は埃まみれの黒い顔を頬かむりにしていたレンソで丁寧に拭いた。汗のとれた顔は紅潮してみずみずしい若さがあふれていた。その時間まで採集したコーヒーの実を背負って道までかつぎ出し、惣一の持ち出したのと合わせて一俵に仕上げた。豊作の地区なので九時までに二俵半さびられた。晩まで十二、三俵の収穫を得れそうだ。今迄の最高記録を出してみよう。

「えらいことさびれたな姉ちゃんー」

弁当をはこんできた弟の悠二はコーヒーの樹蔭から日焼けした黒い顔をみせた。

「遠かつただろ。でもよくここわかったな―」

「二寸迷ったんだ。けど耳をすますと遠くで人声がした。その声をたよってきた。外人って大きな声で叫んだり、唄ったりするんやな―」

「外国からきたんやから、悠二が外人やろ―」

「でもみんな外人って呼んでるじゃないか、いや毛唐って言おうか―」

「さあ早く飯にしよう、腹が減った―」

惣一はそう言って弁当の横の大地にあぐらをかいてシャツのボタンをはずし、腰の手拭で胸や腋の汗をふいた。

時子は弁当を開らいた。シユシユの煮つけにシユシユの漬物、それに塩鰯があつた。

「今日は飯に豆が入ってない。これはいい。なんば豆が安くても米粒より豆の多い飯はかなわん―」

「お父ちゃんのお四十二の厄払やから白卸飯にしたんやって―」

「そうか。お母ちゃん病気で俺のとし知ってたんやな……………厄払いだから白飯か。日本じゃ小豆の入った赤御飯だったな―」

「ブラジルは何も彼も反対やから―」

と時子は言った。

「ほんまやな―」

惣一は笑った。

「水をかけた飯に塩鰯はよく合うな。うまかった―」

「貧乏性やな―」

「もともといい生れでないからな―」

惣一はコーヒ―の袋に背をもたせ、腰の煙管をぬいて「敷島」をつめ、日本のマツチをすり、一ふく大きく吸いこんで目を閉じた。煙草をくわえた時の惣一は、現世の苦労を忘れた磊落な表情を見せた。

2

弁当がらを片付けた時子は、食事後の休憩時間を利用して八代斐子を訪うた。

斐子も食事の後片付けをしていた。

「うちは大家族でっしよ、弁当もこぎゃん大きな鍋で持ってきた―」

白い布で包んだ大鍋を時子に示した。

八代一家は親戚の若者を数名家族に加えて渡伯していたので、耕地第一の労働力を持っていた。大勢の男が一所に円座を組んで談話している情景は、力強く頼もしかった。

時子は斐子を呼んで、少し離れたコーヒ―樹の蔭に坐った。

「斐子さん、日本からの荷物着いた？」

「三ヶ月ぶりで昨日やっと着きましたたい―」

「中の物見やはった、荷数はそろっていて中身はほとんど空っぽやったわ―」

「家のもそうでしたばい。先の入耕者の話では無事に着くのが不

思議な所らしか、——ことに今年は革命のどさくさで運般はめちやくちやらしかばい——」

「運の悪い時の移住でしたな——」

時子はリオに入港した日の革命騒ぎを思い出した。

憧れていた上陸は許されず、移民たちは手持無沙汰で、しぶきを上げて舞い立つ水上機の長いセツタを見上げては偵察機らしいと言ったり、武器密輸の疑いで撃沈されたという湾内に傾いていた黄色い船体を眺めたりした。ポン・デ・アスカルの石山もコルコバード山も灰色にかすんでいた。

サントス市の移民収容所は軍隊に徴用され、移民たちは近くの安ホテルに分宿を余儀なくされた。ホテルの寝台が人数に合わず板床に藁のクッションを敷いてザコ寝した。屋内は蒸し暑く、かと言って外出は許されず、窓から人通りのない夜の街を見おろした。四辻に、鉄兜に銃をかまえた十人ばかりの兵士が、土囊に寄って前方をにらんでいた。パンパンと銃撃の音がしてその兵士たちは散った。革命軍なのか政府軍か見当はつかなかったが、実に血なまぐさい零囲気につつまれていた。

「でも革命は一段落ついたらしか——」

と斐子は言った。

「どんなふう花落付いたん——」

「バルガスとか言う大統領の……」

斐子はそこまで言って、兄の隆夫を呼んだ。政治問題は斐子にがてだった。

「わしだってそんなことわかるもんかー」

隆夫は渋面をつくって出てきた。日焼けているが顔だけは良くめったに笑わない顔は男性的であった。

当時ブラジルの政治はカフエ・コン・レイテ政策と言われ、大統領はサンパウロ、ミナスの両州から交互に選出されていたが、時の大統領ワシントン、ルイスはそれを無視して同じサンパウロのジュリオ、プレステを次期大統領に推したことからミナス州民は激し、リオグランデ州、パライバ州と組んで「自由同盟」を結成、ゼツリオ・バルガスを対抗者として立候補させた。が、結果はジュリオ・プレステの勝利に帰した。不正選挙の犠牲者だといきどおったバルガズはミナス州知事らと計って革命を起し、わずかな日月で政府を倒しバルガス臨時大統領が誕生した。

けれど間もなく立憲政治の再建を叫ぶ者が続出、再び「パウリスタ革命」が勃発した。それがこの度の騒動で、サンパウロの兵士は三ヶ月よく戦ったが、後にバルガスの和議提案を受諾して革命は一応おさまった。

以上のことを隆夫はぽつぽつとつながり合わせて話した。副監督の安田順三のくれた邦字新聞などからかなり正しいニュースを得ていたのである。

「隆夫さん、政治通やなー」

と時子は感心した。「日本も不景気の上に満州事変やし、こちらも革命騒ぎ、世界中どこへ行ってもええことあらへんなー」

「くよくよしでも仕方なか、それよりわしいものの奢ろー」

そう言つて隆夫は二、三本向うのコーヒー樹の下から、両手に黄色い果実を抱えて来た。マモン（パイヤ）だ。

「どこから持つて来たとのー」

斐子は目をみはった。

「裏の植民地から貰つてきて熟ましておいたー」

「盗んできたとのー」

「声をかけようにも近くに人がいないから黙つて失敬した。どうせ野生の果実だ。この国じゃすき腹のとき、他所のものをとつて食うのは罪にならないらしかー」

「うまいこと言やはるわー」

時子が笑い、つられて一同が笑った。

隆夫は腰のバンドにぶらさげていたナイフを開いて、四つ切にし、その一切れを最初に時子にくれた。

黄色く厚い肉の中に胡椒のような黒い種が一ぱいつまっていた。コーヒーの小枝を折つてその種子をこさき落した。

笑いが再びこみ上げ、おさえようとして時子はむせた。隆夫が横から時子の背をさすった。時子は驚いて横に身を退いた。けれど嬉しかった。

仕事開始のラッパが鳴った。仕事始めのラッパは誰も口真似をしなかった。

その日、時子は十三俵のコーヒーを収穫した。今日迄の最高記録で、早く病床の母に知らせたく、急いで家かけ込んだ。

「工合はどう、お母ちゃんー」

返事がなかった。臥床に母はいずカンテラがボツと空虚な光を投じているだけで、人の気配がない。

時子は部屋から炊事場へぬけてでた。すると薄暗い野外から、髪毛を乱した母が痩せ細った手を力なくさげて、ふらふらと入ってきた。

「いま便所に行ってきたんや、一日に何十回も立たなきやならんし、思うように便は出ないし、かなわんわー」

時子は母に手をかした。その手は熱かった。

「……………あ、また牛が来た、仰山の牛や、こち、そっちへ行け、早く誰か、こわい、こわいー」

とめは時子の手をといて、あたりを追い払うまねをした。

「牛なんかいない、ここ炊事場やがなー」

「……………」

とめは空ろな眼であたりを見廻した。自分の位置が定かでないらしい。

「だけど一ぱい居る。角の長い大きな斑牛や、はよ逃げよ、あ、追いついてくる……………」

「あかんやないか、お母ちゃん、何もおらんのにー」

時子は胸のつまる思いがした。目の居坐ったとめを、力づくで部屋にともなった。とめは泣きながら恐い恐いと叫び寝巻の裾を払いつづけた。

「牛がきたらわしが追ってやるから、恐がらんでもええ、ゆつく

り休むんやー」

とめを横にさせた所へ惣一が帰ってきた。

「お母ちゃん大変な熱や、それにえらい昂ぶってるわ、沈静剤ないやろかー」

「……………」

咄嗟のことで何かわからず、惣一はきよとんとしていた。が、すぐ事能を察すると炊事場から水と白い錠剤を持ってきた。

「アスピリンや、これをやってみー」

「きくかな……ゆっくり休ませてやらんと、昼からずっとこんな状態だったかも知れへんー」

「こんな自由のない抑圧された生活じゃ錯乱もおきるさー」

「何言ってるの、お父ちゃん、しっかりしてよー」

「俺は正気だよー」

「悠二や竹子どこへ行ったんやろー」

「ほんまやなー」

「探して来て、お父ちゃんー」

惣一はポケットをさぐって出てきた一本の巻煙草に火をつけて家を出た。径を歩くとき煙管を使わなかった。疲れた、やり切れない表情だった（めったに家を空けない悠二が、重病人をおいてどこえ行ったんだろう、伯人の家にはめったに行かない筈だ。だとしたら八代さんの所かも知れない）

夜空に黒く盛り上っているコロニアを一軒づつ注意しながら東に向った。しばらく行くと、カンテラを持った男が、二人の子供

を両側にしやってくるのが見えた。

男は八代常吉だった。

「今頃まで何しとたんだ、お母ちゃんが寝てるのに――」

惣一は出合いざまに大きな声を出した。帰ってきた子供を内心喜びながら、表面ではつい大きな声になった。これは子供に対する惣一の癖だった。

悠二はしくしく泣き出した。竹子も泣いた。

「惣二君はお母さんが熱でうなされているから心配して、いい薬でもないかとわしの家まで来なはった、病人を置いて遊び歩いてたわけじゃないなア……悠二君はそんな子供じゃなかですよ――」
八代は子供の心になって、惣一に弁解した。

「……………」

「とめさん、悪いらしいじゃないか――」

「ううん――」

「入院させるわけにや、いきまっせんかな、万一のことでもおきたら、こぎゃん所では死んでも死にきれませんばい――」

「とめはな、配耕になった翌日からすばらしい緑の農園や、と言うてな、日本を出発前後の気疲れや、航海中の船酔いの憔悴も気にせず、こんないい国に来たんやからどんどん働くんや、とはり切ってたんやけどな……」

「落膽するのか移民の常ばってん、とめさんは何かその時点からおかしかったのじゃなかですか、心配だな――」

惣一の家まできた八代は、黙ってとめの病室に入った。

看病にあたっていた時子は、

「心配おかけしてすみませんー」

と、頭をさげた。そして惣一に向って

「アスピリン効いたみたい、寝息がととのったわー」

と安堵の声を出し、とめの額にあふれている汗を拭いた。

炊事場の卓の上には夕飯ができ上っていた。風呂の加減もよかった。母親はいつものように悠二に夕餉の指図をし、その後で熱に犯されたらしい。指図がなくても悠二に炊事はできたが、母の息がかかっていると思いたかった。

風呂に入った惣一は、いつになく早く上った。上半身裸のまま、巾広く作ってある長椅子の上にあぐらをかき、テーブルの上に両手を組んだ。

部屋にいた八代を呼び出し、

「わしは仕事から帰って風呂の後、こうして裸で一ぱいやるのが一ばん楽しみだんね、こっちの酒強いから水で割って爛をすると丁度舌ざわりのいい味になりまんねー」

と言いながら卓の上の杯を八代に渡した。

「やれますやろー」

「はあ、嫌いじゃありませんー」

惣一は八代の杯になみなみと酒を注いだ。

二人は玉子焼を着に杯を重ねた。

「わしの生家は百姓だしてな、次男だしたから軍隊に志願したり、巡査になったりして、その間に酒と女をおぼえましてな、ロ

クなことありまへんでしたわ、家庭のことを考え出した時は三人の子持になっていましたな、それから何とか恩給のつくまで巡査を務めました、わずかな恩給じゃ一家五人の生活が無理だしな。かつかつ食べれるとしても将来に望みをかけられないし、ちょうど海興会社がブラジル移民を大々的に募集してましてな、いい機会やおもて移住してきましたん、海興の宣伝通りでしたら十年もすりや一儲けできる筈ですが、この調子じゃお先真黒ですわー」口数の少ない惣一だが、酒がまわるととりとめもない身の上話や、昨今の不満をぶちまけた。

「わたしもー」と八代は言った。「薬学校を出るとすぐ兵隊にとられましたたい。軍隊で出世なんて思うとりまっせんし、除隊になって、薬局を開く資本はなし、学業とは別に北海道開拓にはまってみたばってん、これも駄目、子供ばかり殖えるし、満州移住を考えてもみたが、あすこも雪で半年は仕事にならん処でしゅうが、……それでブラジルがいいということになりましたたい。北海道の経験から百姓は人手がないと面白くなかとで、甥やら女房の弟をつれてやってきたもんたい、ああたー」

眼鏡をかけ、長身瘦躯、容姿端麗な伊達男の八代も、酒がまわるとかなり舌をもつれさせた。彼は玉蜀黍の皮にねじ煙草を刻んで巻いた。しかも隣の黒人から貰った火打石をつかった。ねじ煙草はしけていてなかなか点火しない。土民がやると悠長で愛嬌ものだが、彼の動作はせっかちで滑稽に見えた。

「移住者はどこへ行っても暫らく苦勞せにやならん、それでもあ

あた、ブラジルはよか国だけん、希望が持てますばいー」

「どういふふうに希望が持てますかー」

「それは除々に体得するより方法がなかですなー」

先輩顔で後に入る移住者に講釈したり、苦勞話を売りつける男がいる。八代の言動はそれに近かった。

「ブラジルにいくるとミソも糞も一緒にされがちでかないませんなー」

と惣一は言った。

「そこが面白かとですたい、わしの薬学もエンシャーダ（鋤）には役立たんし、巡査部長の田倉惣一の智識だつて百姓に役だつたありますまいなー」

「前歴なんかあげつらわれないことですな、わしに部長というのも止めとくなはれー」

「部長でよかばい、軍隊で除隊になると一級上進しますたい、あれと同じでブラジルに漂着するとみな一級、或は何級も上がりますたい、炭坑の労働者は坑内の監督、教師は教頭、巡査は部長、みなそういうふうに言うところごたあるー」

「さよだっかー」

二人は声にだして笑った。一介の農民として移住したものの、日本で要職にあつた者は、ただの労働者として混同されたくない、低級に見られたくない自尊心を心の底で持っていた。

しかし、部長も薬学士も野良に出ると、一人の労働者として、黒人のそれよりはるかに能率が悪く、耕地の監督のアゴで使われな

ければならなかった。

インテリであるほどやりきれない世界である。かなり酩酊した二人は、隣室に病人のいることなど忘れてしまっていた。

時子はいつものとおりの部屋の片角に床をとった。

毎日の重労働で床に入ると朝まで熟睡するのだが、その夜は寝苦しかった。ざわざわと誰かに身をさすられている感じで、無意識に身体の一部の腫物をさすった。バサバサと何かが闇の中で動いた。大きな生き物ではないが、腫物の上を無数に這い廻る厭な感じで悪感が走った。

時子は起きてマツチをすった。灯火に驚いた生きものは一せいに板壁の隙間に向って逃げた。それはゴキブリで、時子の目には何百匹にも見えた。身体のでき物の汁をゴキブリがたかって吸っていたのだ。一、二匹なら眼を覚ますこともなかったが、その夜は大群をなして襲ったのだ。身の毛がよだった。

「ああ、嫌だ―」

立ち上って寝巻をふるうと逃げおくれた一、二匹が羽をひらいて飛んだ。中の一匹はゴキブリより小さく、あまり走らない虫がいた。口の先に針を持った虫だ。それはシユパンサという吸血虫で、多くのシユパンサに血を吸われ、知らずにいると、何年、或は何十年の後に喉に瘤ができ、白痴になることもあるという。時子は手でその虫をつぶした。血が手を汚した。

「どうしたん―」

目覚めたときは蒼白い顔を時子に向けた。

「油虫が一ぱいやー」

「お前のその寝巻モスリンやから虫がつくんやろ、明日から木綿の寝巻に替えるとなええわー」

「そうや、きつとそうやわー」

癩患のような腫物だらけの身体を虫けらに荒らされている、と思うのは情けなかったが、とめの言葉は時子の気持ちを少し楽にした。

3

山崩しの仕事が始まった。コーヒーの樹間に盛り上げてある畝を崩す作業である。コーヒーの採集前に山立と言って、草、木屑、木の葉の類をロードという巾五十センチ大の鍬で引き寄せて畝を作っておく。コーヒーの採集を容易にするため、いはば樹の下を清掃して置くのである。

山崩しの仕事に熟達するのも一日二日では成ならかった。長い柄に鍬をカギ型に据え、なるべく土を堀らないで草をとり畝を崩すのである。鋤とか耕すこととは根本的にちがう。柄のはしを持ってあまり腰をまげず、立った姿勢で、腰で調子を取りながら引くのである。

鍬の柄に水樽をとおし、背に負って径に出ると、

「ボン ジイアー」(お早う)

と言つて、西隣のベネジタが白い歯を見せて立っていた。大柄でダミ声を出す黒人だ。七人の妹たちと、男まさりの母親が一家の全部で、父親は若い女と家出していた。

欲求不満の母親は何彼につけて子供達にあたりちらす癖があった。

或日、庭先に干しておいた時子の衣類が紛失した。

ベネジタの盗んだことが発覚し、力士のような母親はタマンコで娘の尻を叩いた。それでもあきたらず、終に馬の鞭まで持ち出してふりまわした。ベネジタは涙を流すだけで大声もださずこらえていたが、母親は鞭の手をゆるめなかった。ベネジタは殺されそうだ。憐憫に思つた時子は、

「エウ・ケ・デー」(私があげたの)

と言つて二人の間に割り入んだ。女の鞭が次に自分の皮膚にくい込むかも知れない、と思いながらも、そうしなければベネジタがあまりにも哀れであつた。

その事以来、ベネジタは時子を妹のように親しみを寄せた。薬草の煎じたのを時子の腫物に効くと言つて飲ませ、牛の皮膚に入るビショが人体を犯すと、煙草のニコチンで酔わせて絞し出した。家族一同が数えきれぬ恩恵を受けた。

「水樽持つてあげよう」

ベネジタは首のレンソを器用に丸めて頭にのせ、その上に水樽を横たえて悠々と歩き出した。曲芸師そのものだった。物慣れたベネジタの動作には舌をまいた。羨望した。

「ジョン・デ・パー・ロが鳴いているー」

太く横に張ったパイネーラの枝の上に、パン釜を小さくしたような泥で固めた巣があり、雀大の小鳥がその枝でさえずっていた。生活が多忙で、自然界を注視する余裕もない日々だが、山の樹々はこきざみに緑を装おうていたし、谷間の牧草も朝夕繁くなっていた。もう乾燥期も終りを告げていたのだ。

「空が灰色で太陽が赤いでしょう、こんな日の続いた後、ジョン・デ・パーロが鳴くと雨になるー」

「ほんまかなー」

「ケ・ポスタ？」（賭けようか）

「止めとく、ベネジタのカンにはかなわんからー」

昨日まで気付かなかったコーヒーの枝に白い小さな荳が見えた。或所では少し開花していた。春なのだ。初めてみる小さな花卉に時子は顔を寄せた。むせるような芳香があった。

「雨もないのに、どうして植物は春を知るんやろー」

「時季がくると、雨とかかわりなく花は咲くよー」

「土地に湿気が多いんやなー」

判じ合いの会話を交しながら、その日の仕事場に到着した。

先に着いていた父の惣一は二、三本先の樹下で山崩しをつづけていた。

時子は鍬に鑪をかけ、これから父に追いつくんだ、と意気込んで手に唾をひっかけた。

そこは時子たちが「大根畑」と呼んでいる低地で、雑草より野

生化した大根の方が多く大地を覆っていた。コーヒーの採集の終る頃には、盆地一面に薄紫の花を咲かせ、蝶や蜂を舞わせて哀しい郷愁をそそったものだ。

すでに簾のように素枯れていたが、この種子はまた雨と共に芽ぶくだらう。抜いても削っても絶えることなく、代々生きついでゆく大根のたくましき、ややもすれば現実の重労働に滅入りがちな時子は、大根の叢に鞭をあてられているような気さえした。

この根強い野菜と同じく土地に同化し、猛暑に、風雨にめげない強靱な人間にならねけりやいけないんだ。その時にはじめて、この大陸で存分に活躍できる人間になれるのかも知れない。きつとそうだ。

移植したばかりの品種じゃ駄目なんだ。

背丈ほどに伸びほほけた、その一本一本に力を入れて切り倒していった。切りとることによって未来が開拓されるかのように……削るといふなまやさしい作業ではなかった。

一畝横で鋤を動かしていた隆夫は、時子に肩が並ぶまでせまってきた、

「大根もこぎゃんはびこると仕末が悪かばいー」

と言った。

「誰が蒔いたんやろー」

鋤の手を止めて時子は腰をのばした。

「大根を食べるのは、それや日本移民にきまつてる」

「昔から耕地に日本人住んでたんやなー」

「そぎゃん昔でもなからう、この国では年に何回も花を咲かせ、種をもつらしいから……」

「私等も根強く生きなけりやー」

と時子は言った。

「……」

隆夫は黙って時子を凝視した。隆夫の目は意志の強い男に似合わずやさしかった。時子は視線をそらし、

「私、大根の薄紫の花、大好きやわー」

誰にいうともなく独りごちながら、中腰に再び鍬を動かした。自分に注がれている隆夫の目が意識されて、鍬を引く手先が狂いがちだった。この気持は何なのだらう、恋だらうか、畏怖なのだらうか、男性の近くにいて身の置き場のない、滅入る思いにさいなまれるのは、初めて持つ経験だった。

どんより濁った空、病んだように赤かった太陽も、昨夜の雨で生気をもどし、野山は一斉に緑を濃くした。コーヒー樹は白い花を咲かせた。農園全部が雪に覆われたようにすばらしい開花を見た。花の芳香が四周に漂よい、蜜蜂がひねもす花から花を伝って、自然に生きるものの大きなシンフォニーを奏でていた。

切り捨てた大根に実っていた種子は、コーヒー樹間に緑の毛氈を敷いた。大根の萌芽に圧されて他の雑草はほとんど見えない。二十日ばかり経て、大根の芽は十センチ近く伸びた。時子は三日に一度はその地区に廻って大根葉をぬいた。漬物にして翌日の食

事に供するのである。大根葉の一夜漬は故郷の味がして、一家の嗜好に合った。

その頃には、コーヒー園と牧場の間の雑株に蕨が出た。しばらく後には野生の南爪や、さつま芋の葉ものびた。それらを摘んでおかずにした。

「今日は日曜日やな、悠二一緒に売店に買物にいこー」と時子は言った。

「ううんー」

悠二は気のりのしない返事をした。毎週のならわしだが、四キロの道を往復八キロは楽な行程ではない。

「そしてくれるか、俺は裏山から一週間分の薪をとつとくわー」と惣一は言った。

日曜日でも次の週にそなえて、親子はそれぞれ仕事を分担した。ここに時子は母が病床なので、洗濯、買出し、炊事などに寸暇もなかった。

売店は本耕地の近くにあつた。耕地に古い人は乗馬を持っていた。優れた馬に上等な鞍をつけたのは裕福な人で、革の帽子をかぶり、腰にピストルと弾帯を巻きつけていた。人を射つことは禁じられていたが、護身用として大人の誰もが携帯を許されていた。山路で鹿や山豚に出逢うと、このピストルは意外な収穫を得ることがあつたが、逆に仲間喧嘩などで、持っていたが為に自制がきかず、とんでもない悪役を背負ってしまう男もいた。時子が入耕してこの方、そんな係争はなかったが、コーヒー園の中から為体

の知れぬ白骨が出た、と聞かされたことがあった。

時子は徒歩になれていたが、悠二はすぐにまいった。靴が足の皮膚にくい込んで、忽ち豆をこしらえてしまった。靴を手にして歩いたが、太陽の熱か径の砂を焼きだすと、跣足の行進も苦痛になった。

長さが十四、五メートル、入口の四つある板壁の売店は、四つの分耕地から買出しに集まった人々でごったがえしていた。

頑強な男たちの体臭、巻煙草や酒の匂い、店で商う腸詰、乾肉、バタ等々の臭気が店一ぱに漂よい、その上店の前に繋いである馬の垂れ流す糞尿までが入りまじり、一種異様な空気が、吐気を催さすばかりだった。

おとなしくしていつは何時までも買出せない。二人は大きな男たちの中に割り込んで、一週間分の米、塩、砂糖、油等々を買い、余裕のある日は牛肉を少々買うことにしていた。

売店は耕地の経営で、各家族の労働力から得た収入高は、耕地の会計部から店に報告されていて、収入一ぱいの買物は許されていた。だから働きのない者は買い出せないのである。信用のうすい新移民は他の店で借りることもできなかった。

言葉が充分でない。必要品を指で示しながら買物をすませてそれを二つの袋に入れて結えたのを時子が肩の前後にふり分け、他の一部は悠二が背負った。

朝から上昇をつづけていた気温は三十度近くになっているようだ。身体中から汗が流れた。荷を負ってまた四キロ引き返すのは

重労働だった。身体を伝った汗は足までぬらした。空模様があやしくなって来た。西空の叢雲がぐんぐん頭上にせまって、蒼空をすっきり覆ってしまった。

「雨になるばいー」

後方から突然声がかかった。同じく買出しの帰途らしく、荷を背負った隆夫が、赤く熱っぽい顔で近づいてきた。

「あ、驚いたー」

虚をつかれた時子は、びっくりして立ち止った。胸の動悸がおさまらない。隆夫が寄るといつも心の平衡を失った。

遠くにあった雷鳴が、次第に間隔をつめて頭上にせまってきた。コーヒーの葉が風に鳴り、大粒の雨が光りつつ落ちた。三人は顔を低くして走ったが、荷が重いのももの十メートルも走れない。徒歩と小走りを繰返しながら急いだが、追ってくる雨から逃げだすことはできなかった。

コーヒー樹海の上にぬきんでて、巨大な化物の骸骨を思わせるファイゲラの古木がたっていた。雨宿りに恰好の場所だ。

「姉ちゃん、ここがええわー」

悠二はファイゲラ樹の下にこんもり繁茂しているコーヒー樹の下にもぐり込んだ。

雨は一しきり激しくなった。

「濡れてしまうわ、私等もあすこへ入いろうー」

雨は二人の仲をぐんと近づけ、時子はおじけずに隆夫を誘うことができた。樹の下は枯葉の朽ちた嫌な匂いが漂っていたが、し

ばらく我慢しなければならぬ。三人は無言で樹の下にうづくまいった。

その時、頭上で物の碎ける異様な音がして、三人の近くに大きな物体が落ちた。

「あー」

耳をふさいだ時子は、瞬間に隆夫によりかかっていた。悠二は時子にしがみついた。沈黙が息ぐるしく、狭いコーヒー樹の中をつつんだ。

「フイゲラの枯枝が、雨の重みて落ちたらしいー」

と、隆夫は落付いて言った。

「わたし、もう駄目だと思った。頭上でばりばりとさけたんだもんー」

時子はそう言って、隆夫に寄りかかっていたことに気付いた。

「ごめんね、びっくりしたんだもん、本当にごめんねー」

と何回も言った。無意識だったとは言え、顔が真赤になった。どうしてしがみついたんだらう。隆夫にはずかしたったし、悠二にも厭な所を見られてしまったような気がした。けれど、もし悠二がいなかったら、青年と二人で、こんな所でどんな事態が起きたかわからない。そう思うと時子はいたたまらず、コーヒーの葉を分けて外に出た。大降りには去っていたが、無数の糠雨が銀糸を引いてコーヒーの葉をぬらしていた。

コーヒー樹間の除草と山崩しが終る頃から本格的な雨期に入っ

た。土間は湿り、板壁には白い黴がきた。庭に転がっている古木に無数の茸が生えて、そして腐臭をただよわせた。

早朝から降りつづく日は休日となったが、曇り日でやがて雨となるのがわかっていても仕事にかり出された。途中から降りだしでも、出かけた以上少しでも仕事をして置かないといけない。それは監督の意地悪でなく、本耕地の支配人の命令によっていた。

その日は午後からどしゃぶりになった。コーヒー園から流出した雨水は條を引いて道路に落ち、轍は川と化し、泥土を低地へおし流していた。

コロノ達は大降りになるとコーヒー樹の下にかくれ、止むと働きだすのだが、もう身体中がずぶ濡れになっていた。気温は低くないが濡れ衣をまとうた身体はぶるぶるふるえた。

大女で知られていたベネジタの母親は、例の大声で、こんなに降っちや仕事にならない、風邪でも引いたら医薬代を仕払ってくれるか、と監督に抗議していた。

「もう少し待たら、西空が少し明るんだから止みそうだ、俺だつてこんな日にや休みたいさ、だけど支配人の命令なんだ。いま帰って雨が止み、農場に人がいなかったら小言を頂戴するのはこの俺なんだ―」

「止みやしませんぜ、監督さん、わしや三十年もこの地区に住んでいるからね、朝から西の雲が厚く、午後から降り出す雨は晩まで上ったためしがない。降つてりや支配人も廻っちやこないさ―」
「もし止んだら―」

「このわしが罪をかぶるわー」

「責任を君にとらせられないんだ、コロノの言いなりになった。と攻められるのは俺だー」

「また大降りになってきたじゃないかー」

女は頭のレンソをとって雨水をしぼりながら、

「皆んなお前さんの吹く帰宅ラッパを待ってるんだぜー」

「俺は吹かないー」

監督はロバに鞭をあて、その場から姿を消した。

労働者に言い負かされては監督の沽券にかかわるのだ。監督は労働者の目のとがない個所にのがれてラッパを吹いた。

「ごま見やがれー」

黒人女は雨の中でサンバを踊るまねをして、それから皆をうながして帰途についた。

家まで三十分はかかった。

時子の家では、裏のバナナ林の蔭に風呂場があったが、荒作りなので昼は入れない。雨で火も入れられない。湯を沸かして家の中で行水にした。濡れ衣を着替えてほっとした。時子は日曜日に洗った衣類の破れを継ぎながら、もう暫らくしたら夕食の仕度だ、病む母に特別に何か御馳走を作ってあげたい、と考えていた。

五時前に雨は上った。すると不意に出動ラッパが鳴った。時子は自分の耳を疑ったが、まもなく監督がきて、S区十号地のコーヒーの枯れ後にコーバを作って種子を蒔くように、と告げていっ

た。

「仕事場についたら、すぐ暮れるのになあー」

「しょうがないなー」

時子と惣一は浮かぬ顔で帽子をとり、重い足を運んだ。

十号地へは、牧場の裾を通らなければならない。

細径は牧草のジャラグワが両側からかぶさっていて、目を細めながら中腰で歩いた。草の葉にやどった雨滴が身体を濡らした。牧草がつきると、カラピシヨ地帯で、小さい刺の実が沢山落ちていた。時子は地下足袋をはいていたが、時々横から刺が足にささった。どうしてこうまで人をいじめるのだらう。時子は腹をたてていた。

径の傍の叢に赤土の塚があつて、所々の穴からざわざわと灌木にぶつかりながら、無器用に舞いたつ多数の赤い虫がいた。それは三センチ大の尻の大きな女王蜂であつた。雨上りの土の湿りを利用して飛びたち、近郊の地に移り、新しい一つの巣を形成する。分布なのである。大きな鋏を持った兵隊蟻は、出立する女王の警備に塚一面に出動していた。いかに激怒した形に鋏を広げて走りまわっていた。

蟻の行動を眺めながら、時子は自分もその中の一匹であるかのような錯覚にとらわれた。

耕地全体がこの蟻塚で、コロノ達は労働蟻なのだ。

彼等もきつと上からの命令によって行動しているのだらう。そう思うと近親感が湧いて、その一匹をつまみ上げた。蟻は大きな鋏

を更に開いて激怒した。

木の枝におしつけると、力一ぱいその枝をはさんだ。

時子が引いても離れない。頭と胴がちぎれてしまった。(意志の強い生き者やなー)

時子は独りつぶやいて歩き出した。

指示された地区に着いた二人は、いつものように意気が上らなかった。日暮れと共に数の増すブヨの群を追いながら、大型の土萬頭を作り、周囲を鍬で叩いてかためた。中央の穴にコーヒーの実を落とし、その上を木片で蓋をする。穴の中は温床となって二十日ばかりでコーヒーは発芽する筈だ。雨期になすべき仕事だ。一つのコーバを仕上げ、次に移った時、八代隆夫が大声で走ってきた。

「あの、親父が……………」

隆夫は息をきらしていた。

「どうしなはってんー」

と惣一はきいた。

「親父が監督と口論しましてな、監督の山刀で頭ば切られたとです。支配人に訴えて監督を処罰してもらわにや。と近所の人々が集ってとります。毛唐になめられないため、この際日本人が団結して、事にあたりにやならん」それで仕事を止めて帰るよう言うとりますー」

「誰が言うとるんやー」

相手があわてている時、惣一はわざとゆっくりかまえ、煙草に

火をつけ、深く一ぷくすった。

「どういふことか、わからへんけど、まあ行ってみます」

コーヒー樹の中に鋤をかくし、

「時子、仕事はゆっくりでええさかい、六時まで居てくれな、それで一日の義務は果せるさかい」

そう言つて惣一は隆夫と帰つていった。

4

分耕地に住む日本人四家族の、全部の家長が八代の家に集まり、田倉惣一の到着を待っていた。

田倉を出迎えた八代の妻のたつえは、

「ほんなこと開いて下さい。監督さんが来てあの時間から仕事に出ろ、と言いつけなはった。うちの人はもう五時だし、出かけても仕事になりやせん、そんな無理なこと言わんで、みんな休ませちやりなさらんか、と言つたとですたい。当然のことですしゆ、うちの人はコロニアの労働者を代表して言いなはった。隣の毛唐なんかそれを言えなくて、仮病で寝込んでしまった。監督さんはそれを察してやる心もなか、全く無慈悲だ、わしらは行かん、とうちの人言つたら、彼は馬の上で腰の山刀ばぬいてふり廻しよる。私、癪にさわったから『切るなら切つて貰いな』と、うちの人ば押しやった。そしたら、どうな、本当に山刀をふりおろしたとですたい。ほんにあきれるじゃありませんか、田倉さん、いくら

監督さんでもあんまりじやなかですか、この際、私ら話し合って、あんな監督さんを耕地から出てもらうまでストに入ろうというのですが、田倉さんの考えは、どうでつしゅうか―」

八代の妻は興奮していた。彼女の話なら当然の怒ともいえたが、一方の言い分だけを鵜のみにできないことを田倉は知っていた。

「現場に居合わせなかったので、何とも言えまへんが、まあ事を荒だてないことですわ、八代さんの言い分も解りますけど、監督さんも職務上、労働者が従がわないと立場が苦しくなりましろ―」

「でも山刀までぬく必要はなかったと思いますよ―」

「威嚇だっなんでしやる、ブラジル人は表現が大げさだすさかい―」

気のたっている女をなだめ、集合した人々にも慎重に考えるべきだ。明朝あらためて集まることにしよう、田倉はそう言ってその場をおさめた。

その夜、ルベンス監督は通訳の安本順三を伴って惣一の家に来た。惣一はさりげなく二人を招じた。

暫らく雑談の後で、安本は監督に頼まれた、と言って夕方八代との件を持ち出した。

「刃傷沙汰はおだやかでありまへんな、困まつせ―」

惣一は高飛車に出、コロノたちの怒りを伝えた。

「そこがなんです、ルベンスは八代さんと口論になったが、傷つ

ける意志など毛頭持っていなかった、と言うんですー」

「それはそうでしょうー」

「八代さんは日頃から少し一徹な所があるでしょう、いつものあの調子でルベンスの言葉を左右して聞き入れなかったらしいんです。聞き入れられないと彼の監督としての務めは果せない。そこが辛い所なんです。家族の若い者たちも集まってルベンスを痛罵したらしいんです。ルベンスは居たたまらなくなって山刃をぬいたらしいんです。あれは彼のゼスチュアみたいなもんですが、その時八代さんの奥さんが『切って貰え』と、八代さんを前に押したらしいんです。その為に若いロバは驚いて身体をかわした。不意をつかれたルベンスは、落馬すまいと手綱をしぼった。その時、右手のファッコンが八代さんの頭にふれたんだそうです。予期せぬでき事で、ロバから降りてわびを入れようとしたら、彼の家族が激怒して近くに寄せつけない、本当に傷を負ったものか、何ほどの傷か知ることができなかった、と言っていますー」

「……………」

「本当に傷ついたものなら、医薬代は仕払わせてもらうから、と言っております。ルベンスがこれだけ折れるのはよくよくのことですし、……………」

安本はあらかじめ考えてきたことを並べて惣一の顔をうかがった。哀願する表情だった。

「……………」

惣一は黙っていた。

翌朝、惣一は八代と、八代と行動を共にした四家族の家を廻り、昨夜の監督の言葉を伝え、そして農場に出た。

「八代さんたち、どうしやはった？」

時子は心配顔できいた。

「傷はたいしたことないけど、連中えらい権幕や、虐げられどおしの我々に丁度いいチャンスや、日本人の面子にかけてもこの際、徹底的に制裁せにやならん、大和魂がどうか言うてー」

「大和魂って勇ましくていい言葉やなー」

「地球の果まできて大和魂でもあらへん、仕事の能率の悪い、向うゆきばかり強い日本人と言われるだけにこっちゃー」

「そうやろかー」

負けず嫌いで、血氣盛んな時子は、大和魂とか、世界に冠たる日本民族、という言葉は、聞くだけ胸の勇躍を覚えた。軍国主義の思潮に染まっているなと考えていなかったが、うるさい、自由のない鬼耕地なら、うるさくない明るい耕地に改革すればいい。大和魂がそれに役立つなら大いに利用すべきだ、と心の底で思った。

「わしらだけ働いて悪いんじゃない？」

「いいんだ、ほっとけ、連中に巻きこまれていたら何もでけやへんー」

九時過ぎに監督が巡視にきた。安本もいたが、二人ともその日は元気がなかった。

惣一は、昨夜の依頼を今朝一同に伝え、平常通り仕事をつづけ

るように勧めたが、てんで効果のなかったことを告げた。日本では職務上数多くの諍いを裁いてきたが、いまは一介の農民でしかなく、人々を動かす力のないことを言って、惣一はみずからを嘲けて笑った。

或る暁早く一台のトラックが、八代の家の前に横づけられた。五、六名の黒人が降りて八代の家の戸を叩いた。たつえは不吉な思いで八代をおこした。

戸を開けた八代に一人の男がピストルをつきつけた。

その様から監督が、

「本耕地からの命令だ、このトラックで移転してもらおう―」
ある威厳をもって言った。

「そげん無茶なことがありますか、思わしからぬコロノなら、その事を前もって言って下さりやいい、それでわしどんが出なけりや、追い出すこともよからうが、何の前ぶれもなしに……そりや無茶ですな―」

ストを固持しつづけた八代だが、その時の言葉はおどおどしていた。

「前もって事が穩便にすむように計った筈だ、にもかかわらず仲間を抱き込んでストを続行することは耕地の規則に反する、もう他に方法はない、移転の用意はいらない、この男たちが手伝ってくれる―」

監督の言葉は冷たかった。傍の屈強な男たちは、そういう事態

に慣れていて、器用な動作で家財道具をトラックに積み込んだ、新来者の所帯道具はそれほど多くない。寝台や食卓に使用した板は耕地からの借物だからそのまま家に残された。忽ち家は空になった。

たつ子は半狂乱でトラックに乗らない、家を出ない、と居坐つたが、八代になだめられて泣きながら立ち上った。

荷を運んだ男たちはみな腰にピストルをつけていたので、家族の誰もが抵抗できなかった。

夜どおし降りつづいた雨は朝忘れたように止んだ。カッと照りつけた太陽は濡れた樹木や、草原の露を一瞬に干し、大地からしきりに水蒸気が上り、それが靄となり、雲となって空にただようた。

そして真夏の正月が近づいていた。

朝食を終えた惣一は、コーヒー樹の蔭に坐り、すっかり労働者になりきった磊落な恰好で、

「時子がよく頑張ってくれたんで、とめが寝込んでも借金もせんで何とか乗り切ってこれた。コーヒー採集の賃金も少しある、正月には裏の日本人の植民地へ行って餅米でも探そうかな、それから醤油と味噌もあつたらわけてもらて雑煮を作ろう、そしたらとめの病氣も一ぺんに良くなるやろー」

「ほんまやなー」

時子は鑢をかけた鋏の切れ味を親指でたしかめながら合槌を

打った。母の病氣は赤痢ばかりではなさそうだ。一進一退でがんばしくないが、雑煮でも食べて元気になってほしかった。

年の暮も近づいた或日、本耕地の会計事務まで出向くようとの通達があつた。本耕地からの呼出しは苦言ばかりでいい事はない。監督の言いにくいこと、言っても効果のないことを支配人からじきじきに言いつけられるので、コロノたちは会計事務所を敬遠したが、出向かないと後がもっと悪い。

呼出しにはいつも時子が父代りに出頭した。ポ語がいくらか話せるのと、女性には支配人の苦言が多少やわらぐからである。

ところが、その日の支配人はいつになく気嫌がよかった。彼は大きな手で握手を求め、

「コモヴァイー」

と親密をこめて時子の肩を叩いた。そして、

「いい話なんだ、わかるかい、時子たちは入耕以来よく尽してくれた。ことにストライキの日、雨にもかかわらず、仕事に出て、コロニアの範を示してくれた。ファゼンダでは感謝の意味で小さなプレゼンテを贈ることにした。そこにある米なんだが、持って行けるかいー」

支配人は時子を抱くようにして米袋の前につれていった。めつたにない温顔に接した時子は、未知な男から求婚でもされたように戸迷った。配耕以来努力と忍従の繰返しで、人間らしい扱いを受けた覚えは一度もない。奴隷に近い生活でしかなかった時子に、突然かかった温かい言葉は暫らく信じられなかった。

「来週カロツサ（馬車）でとどけて上げよう」

支配人は親切に言った。そうしてほしいが、一方の心では何とかして持って帰り、病臥中の母親に見せて喜んでもらいたかった。

時子はその半分だけ今日貰って帰ることにした。

半分でも三十キロの重量だが、この方七ヶ月の労働で鍛えた身体は、その袋を背負っても充分歩けた。

事務所の戸口に立った支配人は、ナタールには本耕地で牛を五頭はふって、コロノたち全員にシュラスコをおごることになっている。夜は打上花火もある。それから正月には日本人たちの慰安演芸会と運動会も準備されているから、家族と是非出てくるように、と何回も時子の肩を叩いて言った。時子は涙がこぼれるほど嬉しかった。

繁茂したパイネーラ並木の下を通り、広大なコーヒー乾燥場の一角にさしかかると、東京音頭の曲が流れていた。明るい新鮮なメロデイド。

張りめぐらしたテントの中に、板を並べた小さな舞台があつて、五、六名の日本着姿の娘たちが、音楽に合わせて踊っていた。可憐で美しかった。正月に催される演芸会の下稽古らしい。

時子は背から荷をおろし、どかっとその上に腰かけて、娘たちの踊りを凝視した。上手とも思えないが、日頃野良で荒々しい仕事に明け暮れ、久しぶりで見る日本の音頭はしなやかで、情緒があつた。

賞与の米を得、日本の音楽に見とれる。夢にも描かなかつた異

質の場所に座った時子は、あまりつきすぎていて、何かにバカされたのじゃないかと思った。暫らく茫然となっていた。

音頭が終って、再び米袋を背負った時子は、やや前のめりになって歩きだした。瞼の裏に母親の顔が映った。今日は気分がすぐれないから早く帰ってほしい、と言った言葉を思いだした。（お母ちゃん、ごめんね、道草しちゃって、もうすぐ帰るから待ってね……今日はな、支配人から小言じゃなくて賞与の米をもらったんやで、それから正月には運動会と演芸会があるんやって、久しぶりで時子走ってみようと思うの、学校を出てから何年もやってないけど、きつと勝ってみせるわ、それまでお母ちゃん元気になって、一緒に出かけて時子の走るのを応援してな……。労働法のきびしい鬼耕地やてみな言やはったけど、ちがうな、労働者に思いやりのあるええ耕地やわ、追放された八代さん達には、それがわかっていなかった。わかるまで一緒に働きたかったわ、悪い人たちじゃなかったもんな、そうやろお母ちゃん、隆夫さんも斐子さんも親切な人好きのする人やったのに――ささいなことで別れてしもたけど、又逢える日もあるやろな）ひとり呟きながら道を急いでいた。何故か母親の容態が気にかかってならなかった。一刻も早く帰りたい。心はあせったが、足ぶみして進まない夢路のように家は遠かった。

終刊の辞

野尻アントニオ

一九六五年、コロニアの文学愛好者達の手によって誕生した“コロニア文学誌”が爾来十一年、さまざまな紆余曲折を経ながらも、コロニア文学運動の一翼を担う、というよりも、コロニア文学運動の推進力となって来ましたが、諸般の事情やみ難く、この三十二号を以て最終号とすることになりました。

これは主として資金面に於て、本誌を続ける為の予算の見通しが立たない、という中央委員会の合議の結果によったものであります。

会員諸氏もすでに御承知のように、第一号から第三十二号迄の本誌出版諸経費は、常にその収入と支出の不均衡が甚だしく映画試写会、クリスマス・カードの作成販売など各位の好意によりなんとかその不足分を補填して来たのであります。

本誌発足以来、武本編集長を中心にこうした補填作業を続けつゝ今日に至りましたが、内外の諸事情の悪化に伴い、今後はそのような状態での本誌発行は不可能だ、という結論に達した訳であります。

こゝで私個人の考えを申し述べさせていただきますと、吾がコロニア文学誌は、コロニアに於て、すでにその使命を果たすと云える

のではないか、ということでもあります。

一九六六年、創刊の頃「コロニアの日本語の将来性から推して、現在の時点で発行出来なければ、恐らく以後は不可能事に属するのではあるまいか」という考えで始められた本誌が今日まで存続し、コロニアの文学運動の為の一つの広場となったことを考えれば、いまその十数年間の経過と、その成果はとも角としても、老齡期に至ったコロニアに於て、本誌の使命は一応終った、としてもよいのではないかと思います。

繰り言めいた云い方を許して頂けるなら、かつて月一回の文学研究会に於ても、ごく少数の参加しか得られず、二世、三世にアツピールしてのポルトガル語による作品募集もあまりかんばしい結果とならず、又コロニア文学新人賞の試みも残念ながら、年毎に沈滞気味となり、遂に中止という事態に立ち至ったこと等々、こうしたコロニア文学の現在を考え合わせれば、本誌の存在価値はまことに薄くなってきたと思います。

ではありますが、過去十数年にわたる本誌の存在は決して小さなものではなかったと思うのであります。

コロニアという文学瘦土にしろろじて根を下した吾々移民達のまごうことない生の証、とでも云うべきものを記し留め得た、ということだけでも、“以て瞑すべし”と云えると思うのであります。

こゝに三十二号を以てコロニア文学誌は終刊といたしますが、会の法的存在は従前通りといたします。

勿論従来の会員の会費納入義務は消滅いたしますが、「コロニア詩歌」の継続発行もあり、会そのものは解散しないのであります。そうすれば今後何か新しいかたちでコロニアの文学の役に立つことがあるではないか、とも思うのであります。

以上、コロニア文学会長として、不肖私の終刊の辞とする次第であります。

コロニア文学 第32号

発行 コロニア文学会

1977年 12月発行 サンパウロ市

（移民文庫編集部注・コロニア文学の編集は30号までは武本由夫が、31号と32号は醍醐麻沙夫が担当した。武本はこの後、規模を小さくして「コロニア詩歌」を陣内しのぶを助手として発行し、地道な努力をかさね徐々に旧に復し、武本亡き後の2012年現在も「日系文学」として続いている）